もくじ

●発刊に際して……鰺坂二夫　2

個人研究の部

1．学級やグループの中で，役割に気づき活動する幼児をめざして ……6
——あと片付けを通して——
宮城県仙台市旭ケ丘幼稚園　教諭　横尾雅子

2．障害となっている話しことばの改善をはかりながら，明るく……12
素直で積極性をもつ子を育てるにはどうしたらよいか
島根県出雲市立今市幼稚園　教諭　後長敏子

共同研究の部

3．親同士のつながりを深め幼児の友達関係のひろがりを通して……18
幼児期の社会的な習慣や態度を育成する
群馬県前橋市大利根幼稚園　代表　木暮寿雄

4．幼児に基礎的事項を身につけさせる幼稚園と家庭との連携……28
東京都保谷市みどりが丘保谷幼稚園　代表　大塚茂雄

5．主体的に活動に取り組む幼児を育てる園と家庭との絵本交流……38
千葉県市川市立新浜幼稚園　代表　大西紀子
6．自らあそびに取り組み，生き生きとあそびを発展させていく……49
保育を創造しよう
――家庭と心を通わせて――
静岡県駿東郡長泉町立南幼稚園　代表　青木早枝子

7．3，4歳児混合クラスによるたてわり保育を実践して……58
静岡県静岡市静岡若葉幼稚園　代表　若林智子
8．主体的に活動し，自ら伸びようとする幼児をめざして……70
――幼稚園と家庭との連携を通して――
岡山県岡山市立芥子山幼稚園　代表　井山房子

9．自ら環境に働きかけ遊びを工夫する幼児の育成……81
――自然環境を生かした活動を通して――
島根県浜田市立石見幼稚園　代表　大屋勝義

10．親子の心の絆を基盤とした基本的生活習慣・態度の育成は，……91
どのようにすればよいか
――園だよりによるゆさぶりで――
愛媛県松山市桃山幼稚園　代表　佐伯照美

1．個人研究　　■研究のテーマ■

「学級やグループの中で，役割に気づき活動する幼児をめざして」
——あと片付けを通して——

宮城県仙台市旭ヶ丘幼稚園
教諭　横尾雅子

1．主題設定の理由

幼児が，幼稚園という場で集団生活を経験することは，個人生活のみならず社会生活に必要な習慣や態度を身につけるうえでとても意義のあることと言える。その集団生活の中では，自分の身の回りの始末も含め，クラスでの当番活動や遊具のあと片付けなど，幼児ひとりひとりにさまざまな形で，いわゆる「役割」というものが欠かせないものとなってくる。また，幼稚園ばかりでなく，家庭という小さな社会集団の中においても，幼児は両親あるいは兄弟といった対人関係の中で，自分の果たせる役割というものが少なからずあるはずである。しかしながら，今，保護者は一般的なしつけについて幼稚園まかせになりつつあるという問題もあり，また目先ばかりの幼児教育に先走り，基本的な生活態度については「やりたいのに大人に先取りされて経験できない」「できることも時間がかかるからとやらせてもらえない」という子ども側の現状も否定できないのである。

そこでこのような実態をふまえ，幼児の活動を高めるために，幼稚園と家庭とで一貫性のある取り組み方で連絡提携していき，できるだけ幼児の自主的・自発的な活動を促して自立の態度の芽生えを培っていきたいと考えた。

2．研究のねらい

幼児が集団生活を経験する中で，場面に応じて自分の「役割」に気づき，その責任を果たそうとする態度を身につけていくためには，幼稚園と家庭とでどのような配慮や工夫が必要であるか。

その内容を「あと片付け」を通して，園と家庭とで共通の意識のもとに，つながりをもちな

がら明らかにしていく。

3．研究の内容と方法

⑴ 遊具・用具のあと片付けについて幼稚園での幼児の実態を把握する。

① 一斉活動の場で用いた用具のあと片付けについて

(クレパス・のり・はさみ・粘土・自由画帳等個人で所有するもの)

② 自由な遊びの場で用いた遊具のあと片付けについて

(大小のブロック・積み木・ままごと・絵本・砂場用具・ボール・縄とび等)

⑵ 幼稚園と家庭における幼児の姿を情報交換しながら，「自分の役割を果たそうとする態度」について相互理解を深め，連携をとりながら「あと片付け」について指導する。

① 家庭訪問による情報交換（S61．4．17)

入園後の園での生活の様子，自由な遊びでの姿，教師との関わり方など具体的に知らせ，家庭における基本的な生活態度について情報を交換する。

② 保育参観日を設け，集団の中での幼児の姿をとらえてもらう。(S61．4．30)

うがいや手洗い，一斉活動での製作，用具のあと片付けなどの活動を参観してもらい幼児の取り組み方，友達との関わり方を観察してもらう。

③ おたより帳による家庭への連絡（毎月末)

幼児ひとりひとりに，毎月末に記載し，その月毎に幼児の努力した点や活動の高まった点あるいは家庭でもほめてほしい点などを記入する。3歳児の場合は，必要に応じ「連絡ノート」に随時記入し，家庭との連絡を密にする。

④ クラス懇談会をもつ（1学期末 S61．7．13)

学級内での当番活動への意欲，友達との関わり方の変容，役割を果たそうとする態度等について伝えるとともに，母親同士で意見の交換をする。

夏休みのすごし方の一つとして「家庭の中で幼児が毎日続けられる役割」を家族の中で話し合ってもらうことを提案。園で独自に作った「なつやすみ帳」を利用して，役割を果たす態度について，工夫を加えながら指導してもらうようにする。

⑤ ようちえんだよりの発行 (毎月1回)

望ましい幼児像，望ましい母親のあり方等の内容をとり入れるとともに，行事に際しての感想等を保護者から寄せてもらう。

⑥ 個人面談を行う (S61．11．27)

行事への参加やクラスとしてのまとまりの中で，集団の中で果たす役割への取り組み方や意欲について，保護者と教師が一対一で約15分間の話し合いの場をもつ。その中で，あと片付け

についての情報，夏休み後の変容について意見を交換し合う。

⑦ クラス懇談会をもつ （学年末 S62．2．6）

保護者と教師の配慮や工夫により「あと片付け」を通しての自分の役割を果たそうとする幼児の姿がどのように変わったかを把握する。また，言葉かけのあり方や，ほめ言葉による指導について話し合う。

⑧ 「はぐくみ通信」を個人に配布する（S62．3．14）予定

1年間のまとめとして，幼稚園生活におけるさまざまな角度から，幼児の成長を記し各家庭に配布する。

4．実践事例

(A) 幼稚園での指導の例

① 幼児の自由なあそびへの取り組み方とその実態

入園して間もない子ども達は，大小のブロック，積み木，ままごと，レールつなぎ等，目新しい室内遊具を興味のむくままに出して遊ぶ。しかし個々に深いつながりは持てない段階であり，一人あそびや，教師が仲立ちになり数人でごっこあそびをする。その中でも一つの活動が持続せず，次々に他の活動へと移ってしまったり，遊具をめぐって取り合いになったり，まだ傍観的で自分から遊びへ入れなかったりなど活動の様子はさまざまである。

2学期も半ばになると，運動会という大きな行事に向けてクラスとしての仲間意識が芽生え，友達関係もより深まってくる。ごっこあそびの内容も活発になり，固定遊具と用具等を巧みに組み合わせて用いる幼児，砂場に種々の用具をもち出し共同で遊ぶ幼児などが多くなってくる。

② 幼児の自由なあそびにおけるあと片付けの実態

園では，朝の自由なあそびの後，全園児でホールや園庭に集まり，「朝の集会」の場を設けている。自由あそびで用いた遊具を，友達とスピードを競って片付ける幼児，自分が使っていなくても手伝って片付ける幼児，また自分が使ったものへの自覚が十分でなく他人まかせになっている幼児，殆ど片付けには参加せず，朝の集会の場へすぐ移動してしまう幼児などがいる。とくに，Aの遊びからBの遊びへ移った場合はその遊具が片付けられないまま放置されているという場合も生じている。

③ 教師の配慮や工夫による幼児の反応・変容

	片付けについての問題点	教師の配慮と工夫点	幼児の反応・変容
	○自分で使用した遊具への自	○ままごと等は，遊びの延長	○教師の声がけに喜んで片付

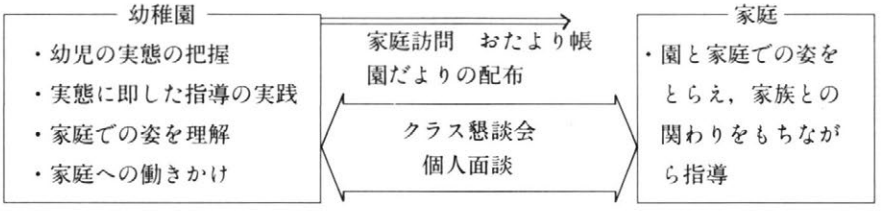
前期	覚がなく片付けにすすんで取り組めない。 ○個人で使用したものは片付けるが，共同で使用したものについて，特定の幼児のみが片付けに携っている。	としてとらえ，言葉がけをままごとの役割に関連づけてあたえていく。 ○共同であそんでいる様子を観察し遊びの中での役割を個々に把握することで，幼児の片付けへの声がけを工夫する。	けるようになるが，声がけがないと他人まかせになってしまう。 ○遊びのつづきとして声がけされることにより，一層興味を抱き積極的に片付けるようになるが，自らの役割を自覚できたとは言えず教師の声がけがないと参加できない幼児が多い。
後期	○クラスでの当番活動への参加も充実し，友達とあそぶ経験が多くなるにつれ，片付けることへの義務感・責任感が芽生えてきたが，参加しない幼児に対しては幼児同士で解決できず，教師に告げ口をすることが出てくるようになった。 ○遊場用具やなわとびについては，片付け方が個々で大きく異なるため，乱雑になってしまったり遊具への思いやりが欠けるようになった。	○一緒にあそんだ遊具を幼児と確認し合い，友達同士の声がけで片付けられるように導く。 ○砂場用具について，一斉の活動の場で，片付けの方法について話し合い，実際にどのように片付けたら使いやすくなるか実践する。 ○なわとびのむすび方を個々に指導しながら，できるようになった時には友達同士でも教えあえるようにする。	○砂場用具をかごに分類し，バケツ，シャベル，カップ，ふるい等それぞれ分けて入れることを皆で共通に理解した。このことにより，遊具の片付けが丁寧に楽しみながら，行えるようになった。 ○「○○ちゃんが片付けないんだよ」等ということが少なくなり，「○○ちゃんも一緒にやろう」と幼児同士の声がけがかわってきた。

④ 考察

片付けそのものは，ゲーム的にしたり幼児同士競争するなどして楽しみながらできるのに，あそびが途中でかわったときや，自分が使用したものについて自覚が十分でないと教師や他児による声がけを要するようである。また，自分の使ってないものまですすんで手伝っている幼児もいることは，友達への思いやりや役割について認識があるためではないだろうか。朝の会などの全体の場で話し合うと，片付けることの大切さを発言できることから，一斉の活動の場で

「片付けの方法」について確認し合ったことで幼児は興味をもって取り組めたのではないだろうか。

(B)　幼稚園から家庭への働きかけによる指導例



①　第1学期クラス懇談会による家庭への働きかけ

〈話 題〉

○幼児のクラス内での当番活動について

○友達との遊び・協力する態度について

◎夏休みへの提案について　～夏休み帳～

幼児が集団生活において身につけつつある「自分で取り組もうとする姿」を母親に伝えるとともに，意義ある夏休みの過ごし方について話し合う。

幼稚園で独自に作った「夏休み帳」の中に「がんばり表」を設け，子どもが毎日継続してできる役割を家庭の中で話し合ってもらうよう呼びかける。

〈がんばり表の内容（一例）〉

○毎朝新聞をとりにいく
○遊んだおもちゃの片付けをする
○食器を片付ける経験をする
○自分のくつ下の洗濯を経験する

家庭で話し合ったことについて，幼児ができたときには，夏休み帳のカレンダーにマークをつける等，楽しみながら取り組めるようにする。

夏休みをとおして日常の生活の中では，自分でできることは自分でする機会を多くもたせるように，家庭では急がずじっくり見守る姿勢でのぞむことを園と共通に理解する。

②　夏休み帳による家庭と園での情報交換

〈家庭での片付けに関する配慮・工夫点〉

○遊んだおもちゃの片付けを親と一緒に取り組む経験をする。

○食事前に片付けの時間をつくる等，幼児が自分で取り組み，気づいてできるよう見守る。

○自分で使ったものを毎日継続して片付ける習慣を身につけさせ，おもちゃ箱等を手づくりで工夫していく。

○一方的なおしつけにならぬよう配慮し，ほめ言葉を工夫する。

5．研究のまとめと今後の課題

本来幼児は，あそびを主体として活動をくり広げている。そのことはもちろん幼稚園ばかりでなく家庭においても同様である。片付けに関して見るならば，保育者があそびの延長として幼児に働きかけると非常にスムーズに取り組むことができる。このことは園での実践の結果でも明らかである。

しかしながら，友達関係が深まり集団としての意識がでてくると，「協力して取り組める」ようになる反面，「他人まかせ」に走ってしまう場合もある。そのような場面に出くわした時，幼児と話し合いの場をもち，また家庭との連携の中で協力を得，相互に共通の方針のもとに指導することの必要性を実感した。

家庭においては，必要以上に手をかけすぎていたり，逆に放任的になっている等，この幼児期に培われるべき態度や習慣を身につける上でマイナスになっている場合もあることに気づいた。

クラス懇談会や個人面談，夏休み帳やおたより帳を通して，家庭と園とが連絡提携する中で，幼稚園側から家庭へ課題意識をもたせ，一貫した取り組み方で指導することにより幼児の活動意欲が高まっていくものと思われる。今後は，自分の果たす役割への取り組み方の中でも，片付けに加えて，当番活動等のあり方を家庭と協力しながら探っていき，主題へもう一歩近づきたいと考えている次第である。

2. 個人研究

■研究テーマ■

障害となっている話しことばの改善をはかりながら，明るく素直で積極性をもつ子を育てるにはどうしたらよいか

島根県出雲市立今市幼稚園
教諭　後長敏子

1．主題設定の理由

ことばに問題をもつ子どもに対して，障害を軽くしたり，性質や程度を改善するように努めているが，ことばの問題を完全にとり除けない場合も多い。ことばに問題を残したままであっても，集団や社会生活を楽しく送れるように，指導をしていかなければならない。

そこで，私は，ことばの問題にのみ目を向けていくのではなく，「人と気持ちの交流がもてること」に目を向け，人とのかかわりを楽しみ，積極的に自分の気持ちを相手に伝えようと，不十分なことばを他のコミュニケーションで補いながらも，話すことを楽しむ子に育てていくことが大切であると考え，本主題を設定した。

2．研究のねらい

(1)　ことばの教室での指導の中で，子どもが，自分の気持ちを体やことばで表現でき，ことばの障害を気にせず，自信をもって楽しく遊べるようにする。

(2)　母親の指導・援助を行い，子どもにとって，人との交流の基盤である母子関係が安定するようにする。

(3)　集団の中でも，子どもが，ことばを気にせず，友達と遊べるように，学級担任との連携をはかる。

3．研究の内容と方法

(1)　ことばの教室における子どもの指導

①　指導にあたっては，非指示的態度・共感的態度で接するようにし，子どもに遊びの中で，

思う存分，自己表出させると共に，自主的，積極的な態度を養う。

② 遊びの中で，思いきり体を動かさせ，気分の解放をはかると共に，体やことばで，自分の気持ちが表現できるようにさせる。

③ 絵本指導を重視する。

親子で，あるいは，教師と共に，絵本を見ながら，内容について語り合うことにより，その中で子どもが感じたことや，思ったことなどの自由な発言を促し，抵抗なく話そうとする態度を養う。

(2) 母親の指導・援助

① 母親に，ことばの教室での指導場面に加わらせ，子どもと一緒に遊ぶ中で，正しい見方や接し方を身につけさせる。

② 母親の話をよく聞き，共感しながら，悩みの軽減をはかる。

③ 月１回の母親教室に，積極的に参加するよう働きかけ，悩みを話し合う場をもたせると共に，仲間づくりをはかる。

④ 母親が，毎日絵本の読み聞かせをすることで，母子のふれあいを深めると共に，ことばのやりとりを楽しんだり，話を発展させ，イメージをつくらせるようにさせる。

(3) 学級担任との連携（原学級）

子どもの原学級の参観を積極的に行い，集団の中での子どもの状態を把握すると共に学級担任との情報交換を密に行い，指導の一貫性をはかる。

4．実践事例

(1) 構音障害児A子の指導

① ケース　A子　　昭和56年生まれ　市内幼稚園在園

② 主　訴　●ことばがはっきりしない。

●カ行音を正しく発音できない。

③ 初回時の印象（昭和61年６月）

ア．A子の様子

＜ことばの様子＞

○口数が少なく，声もささやき声である。聞き返すと黙ってしまう。指さししたり，首を振ったりして意志表示をすることも多い。

○カ行音（タ行音に置換）ガ行音（ダ行音に置換）に誤りがみられる。

＜遊び＞

○自分が遊びたい遊具や，使いたい遊具も，自分の方からすぐに遊んだり使ったりしようと

せず，母親が声をかけるのを待っている。

＜人との関係＞

○顔を見ると，にこっと笑うが，愛想笑いの感じがする。

○意志表示が乏しく，問いかけに，全部うなずく。

○声をかけるのを待っている。

イ．母親の様子

○暖かく穏やかではあるが，自分の気持ちを表現しないで，抑えているように見える。

○A子に対して，幼児音(サ行音・ツ音)を使って話しかけることが多い。

○A子に対することばかけは，指示や問いかけ(物の名前)が多い。手をとってやり方を教えることより，ことばで教えようとすることが多い。

④ 生育状況

生後，数か月で，内臓疾患の手術をしたこともあって，入園するまでは，室内遊び(絵かき，テレビ視聴など）が多かった。

⑤ 学級での様子（昭和61年6月）

＜集団への参加＞

○入園当初は，動作が緩慢で，おどおどしていることが多かった。担任が励ましたり声をかけたりすると，笑顔もみられるようになり，友達の後からではあるが，少しずつやろうとする意欲が出ている。

＜友達とのかかわり＞

○他の子は，A子を赤ちゃん扱いにし，めんどうをみてやることが多い。自分の方から，友達の中に入っていくことはまだない。

＜基本的な生活習慣＞

○衣服の着脱は，ゆっくりであるが，自分でできる。排尿は，入園当初，失敗が多かったが，最近は，生活が安定したのか，失敗はない。

＜ことば＞

○声が小さく，子ども同士で話し合う姿は，まだ，ほとんどみられない。教師とは，簡単な会話はできる。

⑥ 情報の整理と指導方針

ア．情報の整理

○内臓疾患があったため，乳幼児期より体のことを気づかうあまり，過保護になり，経験を与えることが不足していたのではないだろうか。そのために，運動面が遅れがちになったり，自己主張が乏しく，自発性の乏しい子に育ってきたのではないだろうか。

○母親や家族の「遅れがちなのではないか」という不安が，ことばへの注意になりA子の話すことへの自信をなくしていると思われる。

○学級担任の努力により，担任との関係が安定し，学級でのボール遊びや遊具での遊びに興味を示しはじめている。

イ．指導方針

＜A子の指導＞

○自分が表現でき，よく話す子に育てるために，非指示的態度で接する。

○遊具は，体を動かす遊びに使うものを多く準備し，思いきり体を動かし，気分の解放をはかると共に，体を動かすことを楽しませるようにする。

○口腔内の運動機能を高めるため，吹く吸うなどの遊びを楽しませるようにする。

○絵本の読み聞かせをとおして，正しい発音を育てていくと共に，豊かな心情を養うようにする。

＜母親の指導＞

○母子関係の改善をはかる。

・A子の良いところや進歩に気づかせ，過保護的態度を改め，A子の成長を見守り，待つことができるようにする。

○母親の不安や心配の軽減をはかる。

・ことばの発達について，正しい知識を与え，ことばについての不安をなくし，A子に対して正しい接し方ができるようにする。

・母親の話をよく聞き，母親の不安や悩みを軽くする。

・母親教室への参加をすすめ，悩みの話し合える仲間づくりをはかる。

・母親に，毎日絵本の読み聞かせをさせる。

・母子のふれあいを深めると共に，自由に話し合う中で，豊かなことばを養ったり，正しい発音を育てたりさせる。

＜学級担任との連携＞

○学級担任との連絡を密にし，A子が学級の活動の中にすすんで入っていけるように援助する。

・体を動かす遊びの中で，A子が興味をもっていること，得意なことをみつけ，担任に知らせ，学級の中でもとり入れてもらうようにする。また，学級の運動・遊びの中で，A子がよろこんで遊んだ遊びを知らせてもらい，ことばの教室でも，それができるように遊具を準備する。

・学級でのA子の様子を知らせてもらい，ことばの教室での話題にとりあげ，認めほめるようにし，A子に自信をもたせる。

⑦　指導の実際

月	指導過程	A子の姿	学級担任との連携	母親への指導援助
6月	○A子のやりたい遊びをする。 ・A子が動くのを待ち，後からついて動く。 ・A子のことばや動きに，ことばや体で反応する。(うなずく，まねをする，正しいことばでくり返す) ○ボール遊びに必要な遊具を準備しておき，ボール遊びを楽しむようにする。 ○絵本の読み聞かせをする。 ・A子の好きな本	指導回数を重ねるごとにささやき声からほぼ普通の大きさの声になる。 表情がくずれることも多くなりキャッキャッと笑いころげる場面もみられる。	○運動遊びによろこんでとりくんでいるA子の姿を学級に見に行く。 ○ボール遊びが好きなことを担任から聞く。 ○学級でシャボン玉遊びをした時，友だちからほめられよろこんだことを担任から聞く。	ことばの発達に対する正しい知識を身につけさせる。 ・パンフレットを渡す。 「こころ，からだ，ことば」「正しい接し方」 同じ悩みをもつ親がいることを知らせ，勇気をもたせる。 ・親の会の「会報」を渡す。 絵本の読み聞かせの効用を知らせる。 ・パンフレットを渡す。 「親子読書のすすめ」 「正しい発声の育て方」
9月	○思いきり感情が体やことばで表出できるようにする。 ・A子のリラックスした動きのまねをする。 ・A子をからかう。 ・A子の感情のこもったことばをくり返す。 ○ケンパーとびの遊具を準備し楽しませるようにする。 ・認め，ほめる。 ・遊びが広がるようなことばかけをする。 ○紙人形吹きをする。 ・競争する。	リラックスした姿が見られるようになり「疲れた」といって床に寝ころんだりする。 自分の方から母親を遊びに誘ったり，遊び方を指示したりするようになる。 遊びながらいろいろ話すようになる。	○担任の掃除の手伝いをしている様子や担任と一緒にケンパーとびを楽しんでいる様子を見に行く。 ○園外保育〝虫とり〟に指導者も参加し，学級でのA子の様子を見る。 ○研修会で構音指導のあり方について得た知識を担任に話す。 ○運動会にA子の好きな玉入れをとり入れた競技を計画してもらう。	A子の変化に気づかせる。 ・泣かずに母親と昇降口でわかれるようになったこと。 ・担任以外の職員に声をかけられても受け答えができるようになったこと。 ・オドオドした感じがなくなったこと。 を知らせる。 A子の良い面に気づかせる。 ・掃除の手伝いをしていること。 ・Y子とケンパーとびをしている姿が見られたこと。 ・運動会で力いっぱい競技ができたこと。 を知らせる。
1月	○思いきり感情が体やことばで表出できるようにする。 ・A子をからかう，じらす。 ・攻撃的な遊びができる遊具を準備する。(ける，たたく，ぶっつけるなど) ○カードゲームを楽しむ中で(かるた，絵カード，トランプなど)ことばのやりとりを楽しんだりよく聞いたりできるようにする。 ○うがいからK音を誘導する。 (からすの鳴き声遊び)	自分のやりたい遊びがどんどんできるようになる。 (サッカー，ままごとなど) 遊びの中で学級の友達のことをよく話すようになる。 (T男，S子，H子など) カードゲーム（かるたとり，仲間合わせ，絵カードとりなど）に自信をもちはじめる。 うがいから水なしうがいができるようになる。 (K音の誘導)	○A子の様子(学級，ことばの教室）を担任と話し合い，A子に自信をもたせるために，ひとりでことばの教室での指導を受けさせることにする。 ○かるたやトランプを使っての遊びが学級で始まっていることを担任から聞く。 ○T男とサッカーその他の遊びをする姿が見られるようになったことを担任から聞く。	A子の成長に気づかせる。 ・A子ひとりでもことばの教室で遊べたこと。 ・うがいからK音の誘導ができつつあること。 ・かるたとり絵カードとりに自信をもちはじめたこと。 を知らせる。 ※連絡ノートの活用

⑧反省と考察

ア．A子の指導

○ことばの教室では，自分から話すようになり，声も大きくなった。これは，非指示的態度で接した効果が多分にあると思う。また，学級活動にも，積極的になり，会話も増え，仲良しの友達ができつつある。このことは，集団の中で自信がついたためと思われる。

○ボール遊びやケンパーとびなどの体を動かす遊びやこわがっていた未経験なトランポリン遊びも，少しずつ経験させていくことで，喜んでするようになった。これは，好きな遊びや得意な遊びを重ねていくうちに，体を動かす遊びに自信をもったためと思われる。

○うがいの時の緊張感がとれてきたので，うがいからK音の誘導ができつつある。このことは，園生活の中で，うがいを励行させてきた効果であろうと思われる。

○A子の所属園では，親子読書を実施している関係もあってか，母との絵本読みをとても喜び，遊びへの積極性と比例して，思いの表現もよくするようになってきた。

イ．母親の指導

○ことばへの注意はしなくなったが，時々，幼児音を使って，A子に話しかけることがある。運動会の競技にA子の得意な玉入れをとり入れたことで，A子が喜んで参加したことから，母親のA子に対する見方が変わりつつある。これらのことから，今後もことばの発達について，正しい知識を与えるとともに，過保護的態度を改めるように，A子の良いところや進歩に気づかせるように指導をしていく必要がある。

ウ．学級担任との連携

○学級担任との情報交換がこまやかにできたので，遊びが広がり，自信をもって遊べるようになった。これは，A子の心を解放させ，ことばの教室でのリラックスした行動や会話につながっていた。このことが，予想より早くK音の構音指導に入れるきっかけになったと思う。

5．今後の課題

(1)　子育てに対する父親の協力を求める

母親は，少しずつ子どもに対する見方を変えてはいるが，まだ，母子関係を十分改善するところまではいっていない。指導方針の中で，父親の母親に対する援助への手だてが，弱かったと思われる。今後は，父親教室や親の会の行事のもち方を工夫し，参加してもらう中で，父親が母親の子育てに協力し，しっかりと母親を支えていけるようにしたい。

(2)　ことばの教室内から外へと遊びの場を拡大する

ことばの教室では部屋が狭く，遊びが限られるので，今後は固定遊具・砂場・プールなど，思いきり体を動かし心をゆさぶるような遊びができる園の施設を利用した指導を考えていきたい。

3. 共同研究　■研究テーマ■

親同士のつながりを深め幼児の友達関係のひろがりを通して幼児期の社会的な習慣や態度を育成する

群馬県前橋市大利根幼稚園
代表　木暮寿雄

1．主題設定の理由

県の造成により，約20年前に大きな住宅団地ができ，さらに最近その周辺に，高層の県営住宅が建設され，一大住宅団地地域となり，それに伴う商店街等が発展する中にある幼稚園として，それらの家庭から通園してくる園児が大部分を占めているという環境条件の中で，本園の園児のようすを見ていると，特に顕著な現象の一つとして見られることは，「友達づきあい」や「友達づくり」について問題をもつ子どもが，比較的多いということである。(表．1参照)

すなわち，幼稚園にきてもなかなか親の手から離れず，園の中に入らない子どもや，園にきても一人遊びやグループの中に入れず，傍観している子どもが多く見られた。これは現代の幼児の一般的な傾向かもしれないが，その背景には社会環境，家族構成の変化や団地特有の雰囲気等が，大きな影響力をもっているので，保護者の交際の範囲の広さが，子どもたちの友達関係のひろがりに影響を及ぼすことが多いのではないかと考えられた。そこで，保護者のつきあいを広げる一方策として，保護者会活動を活発にし，その活動を通して，親同士の明るい心のつながりを深めていくことによって，子どもたちの友達関係を広げ，その友達とのふれあいの中で，望ましい社会的な習慣や態度を自然に身につけさせるようにしたい。そのために，幼稚園と家庭はどのように手を握りあっていったらよいかを考え，実践していくために本主題を設定した。

2．研究のねらい

「親が変わることによって子どもが変わる」という考え方を基にして，親によって構成される保護者会の活動を通して，まず親同士の心のふれあいを深くし，お互いがよく理解しあい，さ

らに地域全般に広げられた広範囲の結びつきにより，子どもたちみんなが友達になり，そのひろがりを通して，自然に望ましい社会的習慣や態度を身につけるようにすることが，最も適切な方策であろうと考えた。そのためには，次のようなことをねらいとして，保護者会活動をすすめていった。

(1) 友達とのかかわりの中で遊びやかかわり方のマナーを通して社会的な習慣や態度を身につけさせる。

(2) 友達づきあいが，保護者（特に母親）の友人関係や近所づきあいとに関連性があることから，家庭と家庭・幼稚園と家庭・幼稚園と地域との結びつきを深める。

3．研究の内容と方法

(1) 研究の内容

① 園児やその家庭・地域のようすを知る

㋐ 園児の意識調査

㋑ 園児家庭状況調査票

㋒ 園児状況一覧簿

㋓ 家庭との交流記録票

㋔ 地域内環境状況地図

② 園と家庭との心のつながりを深める

㋐ 保育参観の実施方法の検討

㋑ 園だより・学級だより・連絡帳等の改善

㋒ 家庭訪問や相談室の充実

③ 保護者会活動の活性化

㋐ 趣味や教養の講座開設

㋑ スポーツによる交流

㋒ ＰＴＡ図書館（ふれあい図書館）の開設

㋓ 研修会・講演会

(2) 研究の方法

① 園児の意識調査については日本総合教育研究会の「幼児総合発達診断検査」による「社会性の発達」で調査した。その一部を抜粋したのが〔表．1〕である。

「園児家庭状況調査票」「園児状況一覧簿」については園で独自に作成した用紙に記入し，常に全職員が目を通し共通の理解をし，「家庭との交流記録票」については保護者との話し合いの交流過程の記録を保存し，誰が対応しても共通理解のもとに対処できるようにする。

② 園と家庭との心のつながりを深めるためにはいろいろな機会をとらえ，その実施の方法や内容の改善をする。

③ 保護者会活動の活性化をはかり，できるだけ気軽に誰でも参加できるように工夫する。

〔表．1〕

項　　目	5歳児	4歳児	3歳児
2～3人の友達と仲よく遊べる	% 100.0	% 93.3	% 100.0
友達に自分のおもちゃを貸してやる	96.6	96.7	96.4
友達との間に競争心がある	92.4	76.7	60.7
他の子どもと協力して遊びや仕事ができる	93.1	90.0	67.9
友達に手助けを頼むことがある	67.0	53.3	40.7
友達に賛成を求めることができる	58.6	50.0	42.9
友達に迷惑をかけたときあやまることができる	82.8	63.3	57.1
きめられた約束を守れる・	75.9	60.0	32.1

4．実践例

本園では次の3つの事項について全職員で実践してきた。

(1) 園児やその家庭・地域のようすをよく知る

相手を知り，己を知ることが大切である。そのためには十分な調査をし，変化のようすを記録し，園全体の職員がそれをよく理解し，誰が対応しても同じ歩調で対処できるようにすることである。

① 園児家庭状況調査票

市販のものを参考にして園の状況に適するよう改善したものを使用し，できるだけ細かく園児のようすを記入するようにした。これは常時担任が所持し，子どもを理解するように努めた。

② 園児状況一覧簿

園全体の幼児のことが一目でわかるよう見易く記入し，さらに詳細については調査票を見るようにその間の連絡をつけておく。これは常時園長が所持し，園全体の園児のようすを把握するようにしている。

③ 家庭との交流記録票

子どもたちの生活のようす，家庭との交流の過程，子どもの変化の推移が継続的にわかる記録票を作成し，常時利用できるようにすると共に，誰がみても幼児の生活，変化の推移がわかりそれに適応した対応をすることができる。ここにその一例としてY子の記録票を掲げてみる。

Y子は4歳児の時に入園し，現在年長5歳児として通園している。家庭にはごく普通のサラリ

一マンの父親と２人の姉がいる。母親が非常に暗い性格でその上神経質で，小さなことでも気にかけるような毎日であった。居住地は新興の団地であることからなかなか隣近所とのつきあいもなく，朝晩の挨拶をかわす程度であった。Y子も友達がなく，登園拒否をくりかえしたり，園内でもいつも一人ですみの方にいるようであった。「母親が変わらなければ子どもは変わらない」ということを話しながら親の交際範囲を広げながら明るくなるように努めた。その頃から子どもも変わりはじめ，現在では友達も増え，誰とでもにこにこ話をするようになった。その「園と家庭との交流のあしあと」は〔資料．１〕のとおりである。

〔資料．１〕

園と家庭との交流のあしあと

No. 18	園児名	Y子	昭和55年○月○日生	クラス	すみれ ほし	担任	○ ○ ○ ○ ○ ○ ○ ○
保育歴	年中（４歳児）から入園。当初から親の手を離れず，園になれさせるだけで精一杯の様子だった。姉２人も本園に通園していたが，やはり生来の暗い性格だった。同じように消極的で暗い感じで，しばしば登園拒否をおこした。			家庭の様子	家庭は円満であるが，妹２人がいて，末っ子ということで甘やかし，また母親が非常に暗い性格で，かなり気をつかっているようで全てに消極的である。		

子どもの様子	家庭との交流	子どもの様子	家庭との交流	子どもの様子	家庭との交流
60年 ５月７日(火) 登園してくるが園の門の所までくると，母親の手を離れず親子共々泣いている。教室に入れても部屋のすみで小さくなっている。	60年 ５月30日(木) しばらく様子を見ていたが，どうしても園になれないので，一つの方法として，母親の近所づきあいを広げて，近所の友達を増やすようにすすめる。 保護者会のクラス役員となる。	61年 １月23日(木) 母親が自信と明るさを増してきた頃から，Y子も日増しに明るくなり喜んで登園し，友達も増えてきた。母親がガールスカウトの世話役となる。	62年 ２月５日(木) 久しぶりで母親と話しあったが，つきあいが広がると共に，子どもをいろいろな角度から，ながめることができるようになったということだった。	62年 ２月14日(土) バレンタインデーに「園長先生にプレゼント」といってにこにこしながらチョコレートをもってくる。 家での様子をいろいろと話してくれる。	62年 ２月16日(月) 電話で園長先生より母親にバレンタインデーのことを話したら早速来園し，園長室でしばらく雑談をしていく。

④　地域内環境状況地図

地域の白地図にその環境状況（地区行事，神社仏閣等の名所旧跡，公園，危険箇所等）を適時記入して，いつでも誰でもわかるようにしておく。

(2)　園と家庭との心のつながりを深める

教育は信頼である。お互い同士の心がつながり，お互いに信頼しあうことにより，その後の教育が有効にその機能を発揮することができるのである。心のつながりを深めいろいろな機会

を効果的に使うために，次のようなことを実践した。

① 保育参観

子どもたちの園での生活を理解するためには，実際の子どもたちの活動のようすを見ることがいちばんよい。また，その機会に保護者との意見の交換もできるし，保護者同士の話し合いの中でお互いの子育てや子どもの生活のようすを知ることができる。本園ではいろいろな方法で年間何回かの保育参観を実施している。幼稚園の場合，子どもたちの生活や活動を参観する時間には，ほとんど全員の保護者の参加が得られるが，子どもたちのようすを話したり保護者との意見の交換の場となるとぐっと人数が減ってしまうことが多い。これはどうしても小さい子どもがいて気がかりになったり，勤務の途中で参観だけにきたりするからである。また，子育てを母親だけにまかせていないで，父親や祖父母まで参加できるいろいろな機会をつくり，家族全員で共通理解のもとで子どもを育てていく方策を考えバラエティーに富んだ計画をたてていった。そのため，普通の保育参観の他に父親参観，給食参観，敬老参観を計画実践した。

―― 父親参観 ――

○ 実施日 11月16日（日）

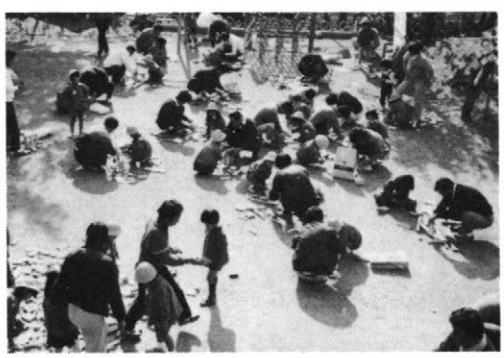
○ 主 題 お父さんとつくろう

○ 材 料 年少組（3歳児） 粘土

年中組（4歳児） 牛乳等の空きパック，空き箱

年長組（5歳児） 建築や製材等の余った木材

どこにでもある素材を使って日曜日に父親に集まってもらい，午前中いっぱい子どもたちと共同して製作を楽しんだ。平素あまり一緒に遊ぶ機会の少ない父親と過ごし，協力して製作する喜びを味わい，父親に親しみ親子の話し合いの中で製作意欲を高め製作方法を学びながら社会的なルールやマナーを身につけていく。また，父親同士の友人関係を深め，幼稚園に対する理解も高められた。子どもも父親も生き生きとすばらしい作品を作り上げ，その作品を中心にして対話が楽しそうにはずんでいく。父親にとって幼稚園が身近になったようだ。



―― 給食参観 ――

○ 実施日 7月15日（火）

○ 対 象 全園児及びその保護者

平常の子どもたちの活動を参観した後，昼食時に子どもと同じ給食を食べながら子どもとの語らい，他の保護者との話し合いをすすめていった。給食のことを中心にした話題から，家庭での食生活，さらにいろいろな子どもたちの活動のようすがリラックスした雰囲気の中ですすめられ，お互いのコミュニケーションがふくらんでいく。ほとんど全員が参加した。

―― 敬老参観 ――

○ 実施日 9月13日（土）

○ 主 題 おとしよりのお話をきこう

○ 対 象 年長組（5歳児）

裏の公園で毎日のように50人位の近所のおとしよりがゲートボールをしている。5歳児全員を公園につれていって，おゆうぎや運動をしてそのようすをおとしよりに見てもらう。子どもたちの動き方，ことばづかい等を地域のおとしよりにできるだけ多く見てもらうことによって年齢のひらきの大きい幼児への理解を得る。また，そのあと子どもたちはそれぞれ持参したジュース等に手紙をつけプレゼントする。それに対しておとしよりの中から昔ばなしをしてくれる人，ゲートボールを教えてくれる人等子どもたちとの交流はつきない。子どもたちも真剣に話をきいている。このことにより，おとしよりへの敬慕の念がより深くなっていったようだ。こうして地域との心のつながりが子どもたちの社会性を伸ばすのに大きな力となっている。

② 園だより・学級だより・連絡帳等の改善

「園だより」「学級だより」ともに幼稚園のようすを細かく連絡し，内容を理解するためのお知らせとして活用するものであるが，とかく園の方からの一方的なお知らせにはしることが多い。園と家庭が手をつないでいくためには保護者からの連絡も受け入れるようなものにしていく必要がある。本園では「園だより」は毎月末に翌月の保育内容，ねらい，行事の予定等をお知らせすることが多く，「学級だより」は次の月の初めに前月の活動のようすを細かく報告することによって身近に個々の問題を知ることができるように工夫している。そのためにその内容について保護者からの意見や質問，感想等が「連絡帳」を使って幼稚園にもどってくることが多くなった。「連絡帳」は教師自作の小さなノートで常に園児のカバンの中に入っている。教師も保護者も気軽に記入して交流を深め意志が十分に通じあうように活用している。

特に「園だより」「学級だより」の発行にあたっては，次のような点に留意してつくっている。

㋐ 平易でわかりやすく，要点をきちんとまとめた文章にする。

㋑ できるだけ大切なところは箇条書きにする。

㋒ 正確な読みやすい文字にする。

㋓ 創造性に富んだ魅力のある紙面にする。

㋔ 印刷方法も考慮し，気軽に発行できるように工夫する。

㋕ 園の顔であり心である。印刷・配布する前に必ず園長に提出し，その指示を受ける。

㋖ 時間的に余裕をもって配布する。

㋗ 保護者からも反応が返ってくるような内容をおり込むようにする。

㋘ 「学級だより」では幼児の個人差にさりげなく気づかせるようにするとよい。

61年3月の末，1年間のまとめとして「年少だより（りすぐみ）」の最終号をだした時，それに対して家庭からいろいろな感想が寄せられたが，その中の一つを紹介する。

―― 年少だより（りすぐみ　最終号）―― （一部抜粋）

月日のたつのは早いもので，4月に入園した子ども達も今や年中組へ進級しようとしています。お母さんと離れられずに何日も泣き続けた子。園には元気に来てみたものの何をしていいのかわからずに困っていた子ども等々，昨日のことのように思い出されます。しかし現在では4月のようすなど想像もつかないほど元気になりました。

たくさんの友達と一緒に楽しいこと，悲しいこと等集団生活ならではの経験もたくさんしたことでしょう。個人差はありますが1年を通してどの子もみな成長しました。年中組になってからも新しい友達と仲よく，なんでも頑張れる子どもに成長していってほしいと思っています。私も陰ながら応援しています。この「年少だより」も今回で最後となりました。いろいろと足りない点もあったかと思いますが，1年間本当にありがとうございました。

―― お母さんからの感想文の一例 ――

学級だより10号マラソン競技もゴール間近。長かったようで短かったような気がします。朝，子どもを送り出しても心配でテレビカメラでもあって園のようすがわかると安心するのにと，頭の中はいろいろなことがまぜこぜになっていました。　――中　略 ――

1学期は“たより”や何か他のものを持ち帰ったりするのを心持ちにし，それを見，読んだ後の子どもとの会話も楽しみでした。子どもの口に出すこととぴったりだったりすると「お母さんお家まで聞こえたの」とか「見に来たの」というような言葉が返って来てニンマリ……2学期も半ば頃になると，“たより”の中に書かれている子ども達の会話で成長のようすが手にとるようにわかってきて，毎号ここをいちばん先に読むようになりました。

―― 中　略 ―― 10号を持ち帰った日「お母さん年中さんになると何組になるかな？　でも私りす組さんとさよならするのいやだな――」とちょっぴりさみしげな表情を見せました。このたよりもいつまでも残しておいてあげるつもりです。

「園だより」とは別に園長が月1回程度発行している随筆的な家庭との連携文として「せせらぎ」がある。「せせらぎ」は保護者の心のオアシスとなり，子育ての指針の糧となるように，バラエティーに富んだ内容を考えて配布している。ここに「せせらぎ」21号を読んだ年中組の女児のお母さんから，次のような手紙が担任のところへ届き，以後いろいろと話し合いがすすんでいるようである。

> いつもお世話様です。保育大学の本いくらかお読みになりましたか。あわただしい毎日で，思うことはあっても忙しさの中で時間ばっかりたっていくようです。「せせらぎ」に家庭からもお便りをとありますので，折角の機会と思い夜中に起きだして書いております。
> —— 中　略 —— 運動会で年長さんのリズム運動，私は神経発達の伸びる時期にいい教材だと思うのですが，それについてお母さん達の反応もさまざまなことでしょう。映画「さくらんぼ坊や」の中でみせる子どものしなやかな動き，躍動に驚きながらそれを可能にした小さい時からの子どもの成長過程に興味がそそられます。そこの子どもたちのすばらしい歌や絵(見方はいろいろありますけれど私はすばらしいと思います)はどこから生まれてくるのか？　あまりに泥まみれで動き回る子に，また机や椅子を積み重ねて登るなど親として黙って見てはいられないだろう場面をどう考えたらいいのだろうか？
> 良い，悪いは見る人の判断におまかせして，一つの実践例として園と家庭と話し合う材料にもなるし，親として子どもに対する見方を考えるきっかけになることと思います。まとまらない文章ですが，またお話する機会のあることを願っています。

③　家庭訪問や相談室の充実

最近は共働き等で家庭を留守にする母親も多くなり，あるいはその他の事情でなかなか園に出向いていろいろ話し合う機会がない家庭もあるので，家庭訪問をして細かい連携をすすめていかなければならない。4月末に定期的に行う家庭訪問の他に，随時必要に応じて，こまめに家庭をたずねることが大切である。また，毎週水曜日の午後を教育相談日として，園長が直接いろいろな相談にのり適切なアドバイスをしている。

⑶　保護者会活動の活性化

①　趣味や教養の講座開設

手芸教室，料理教室のような趣味や教養を通して話し合いの場をつくり，同じ仲間の中から講師もでて，講座運営も自らの手で行い，友人同士の中で心のかよいあいを図っていった。

②　スポーツによる交流

年2回（6月・9月）園内でチームをつくり教員チームも交えて親善ソフトボール大会を開き，その間何日か練習日を設けて和気あいあいの中に意気投合してソフトボールに夢中になる姿は，真に母親同士が心をかよわせてきたあかしであろう。

③ ＰＴＡ図書館（ふれあい図書館）の開設

保護者に広く呼びかけ，家庭の本棚にねむっている図書の寄贈を募り，その本を中心にして保護者用図書として自由に貸し出し，その運営も保護者会自身で行う。時には，一つの本を中心にして読書感想会を開いてお互いの意見を交換しあう場面も見られる。

④ 研修会・講演会

７月３日（木） 竹ノ内一郎先生を招いて「自分からすすんでやろうとする意欲をもたせるために家庭ではどうあるべきか」という主題のもとに講演会を開催した。当日は約70名位の出席で非常に感銘をうけて終わったが，どうしても出席できない人，また，あまり関心のない人等が半数はいたので，すぐ翌日その講演の趣旨を要約して印刷をして全家庭に配布した。この処理は非常に有効で，当日きくことのできなかった人から大変喜ばれた。

保護者会活動をすすめ母親が積極的になってきたために子どもが変容した例がいくつかあるが，その一つを例示してみる。

―― 保護者会活動に活躍するようになった母親とI子の変容 ――

I子は５歳の女児。３歳児の時の入園，当初は登園拒否をするほど暗い孤独な子どもであった。年齢が20歳以上も離れた異母兄姉がいて，その中に生まれたI子は可愛さと兄姉との関係もあり，母親が極端な過保護にしたため，子どもも母親一辺倒の生活が続いた。母親の性質も消極的で，団地のため隣近所ともほとんどつきあいがなく家の中にいることが多かった。そのためI子も友達がなく，園にきても一人でいることが多く，何回か登園拒否もあって母親が園に相談にきてはいろいろと話し合いをすすめていた。４歳児（年中組）の時，母親に「保護者会の役員になるように」と園長からの強いすすめで本部役員となり，沢山の人とつきあうようになって園にも足しげくかよい，職員とも気軽に話をするようになってきた。５歳児（年長組）になり母親は副会長として先頭にたち，リーダーとして会運営に活躍するようになり，交際範囲も広く積極的になってきた。家庭でも明るく元気になってきたので，家庭内の雰囲気も一新した。

この頃からI子も生き生きと登園し，小さい子どもの面倒をみながら先頭にたって遊びをするし，発表会等でも主役を演じるようになってきた。今では沢山の友達と遊ぶことによって，多くの事柄を学びとっているようである。母親は次のようなことを実感として述べている。

「私は保護者会の活動を手伝わせてもらって，本当によかったと思っております。話をきくのも，手芸をするのも，みんな初めての体験。そして私の視野が広がりました。家庭の中での私の役目が非常に重要で，家中がにこにこ，生き生きとなるには私がそうなればよいことに気がつきました。それが事実I子にはねかえって，登園拒否どころか今では自分から幼稚園にいき，友達を集めて遊んでいます。こんなところからひとつひとつのルールを学びとっていくのですね。私が変わることがこんなにも子どもに影響があるとは思いませんでした」

5．研究の結論と今後の課題

幼稚園と家庭が車の両輪といわれるように，互いに手をとりあっていかなければならないことは当然のことであっても，実際には形式的になってしまったり，またひとつひとつの事柄は，必ずしも一致しないで少しずつくいちがっていることが多い。勿論，子育ては家庭だけでもできるし，幼稚園に通園しなくても育っていくことは言うまでもない。しかしながら，幼児施設も増え完備され，社会的にも複雑多様化され，幼児をとりまく社会環境の変化や家族構成も変わってきた昨今では，幼稚園はそれだけの重要性があり意義もある。それぞれの立場のみを主張していたのでは，偏った育ち方をすることは明らかである。そのようなことを考えていくと，本園で取り組んだ家庭との心のつながりは，いろいろな面で子どもたちの変容を見ることが多く，有意義であった。しかし勿論全部が有効であったとは限らないので，失敗例もあることは事実である。それらの失敗例をさらに深く分析して今後の指針にしていきたい。

今後の課題としては，次のようなことが考えられる。

(1) 個人の様子やプライベートの問題にもふれることがあるので，関係のない外部へもれることのないよう細心の注意をしなければならない。

(2) 話し合いの場をできるだけ多く持つようにすると共に，意図的，計画的に場の設定，内容の検討をする必要がある。

(3) 話し合いに参加できない諸条件を考慮し，その方策をたてる必要がある。

(4) 家族全体や地域の人の共通理解や協力を得ることが最も大切である。

(5) 視聴覚メディア，特にビデオカメラを有効に利用する。

「教育は信頼である」といわれるように，お互いが信頼しあって心のつながりを持つことこそ，全ての活動の基礎である。一緒によろこび，悲しみ，心配し，なやみ，考えていくことが望ましい連携の姿であろう。

4. 共同研究

■研究テーマ■

幼児に基礎的事項を身につけさせる幼稚園と家庭との連携

東京都保谷市みどりが丘保谷幼稚園
代表　大塚茂雄

1．主題設定の理由

本園は園庭の一部に武蔵野の自然林の面影をそのまま残した森があり四季の移り変わりが展開する。子ども達にとっては，安らぎの場所であり，自由で楽しい遊び場所になっている。春の新緑・夏のクワガタ探し・秋のどんぐり拾い・冬の霜柱遊び等，季節の変化を体で感じている。

子ども達は，この森で遊びながら，植物や昆虫などに興味や関心を持つようになる。子どもが「なぜ」「どうして」といった疑問を持つようになった時の教師の接し方，また，数的処理にせまられた際の助言の仕方，言葉がけの研究をする必要にせまられた。

それには幼稚園だけの研究でなく，「家庭との連携をとりながら進めなければ，成果はあがらないだろう」ということで標記の主題とする。

2．研究のねらい

子どもがいろいろな遊びをする中で，自然界の事物に触れたり，子どもなりに創意工夫するところに，科学する心の芽が育つものと思う。また，単に抽象数を唱えたり書くだけでなく，遊びの中で具体的に対応の操作活動をする中で，数の基礎的概念を身につけさせたい。このような内容を日々の保育の中で，計画し実践すれば子どもに定着すると考える。

子ども達が長時間接する母親に，研究の趣旨を理解していただき，幼稚園と家庭でお互に連絡し合いながら進めていこうとするのが，本研究のねらいである。

3．研究の内容と方法

(1) 研究の内容

① 指導計画の作成

教育課程編成の基本的な考え方をふまえて，本園の実態に即した指導計画を作成しようという気運が数年前から盛りあがった。それから3か年かけて，幼稚園教育要領の内容に示されている22の大項目について，具体的な指導のねらいを作成する。

② 自然の領域の実践

昨年度は自然の領域を年間の重点研究としてとりあげたので，本年度も昨年度に引き続き研究を高めていく。本年度は特に保育の中で記録を積極的にとるようにする。

③ 家庭との連携

この領域については，家庭で子どもがどのような反応をしているのか。幼稚園の生活だけから子どもの変容を評価せず，親からもその様子をうかがう機会を多くもつように工夫する。

(2) 研究の方法

① 基礎的・基本的事項の理解

「幼児の心身の調和的な発達を図り，健全な心身の基礎を養う」という基本的なめあてをふまえ具体化する表現にする。「幼児の発達に応じ，その生活経験に即し」という表現が随所に見られる。この2つの句を，実際の指導の場面に正対する時，どう表現するか考える。

第1年次は，3領域10項目，第2年次は残りをまとめるという計画を立て，それを執筆する。執筆は2人ひと組になり項目を分担する。その原稿を職員会へ提案し話し合いの資料にする。そこで話し合った結果修正された箇所を訂正して清書する。このような手順をくり返して基礎的・基本的事項を理解しながらまとめるようにする。

② 保護者の評価を吸収する工夫

研究の成果をあげるためには，家庭の協力を必要とする部分が多い。この点を十分に理解して家庭に働きかけなければならないと思っている。

家庭教育と幼稚園教育にはそれぞれ果たすべき分野があり，それを互いに共通理解し，成果をあげるようにすることが，本研究の第2の方法である。

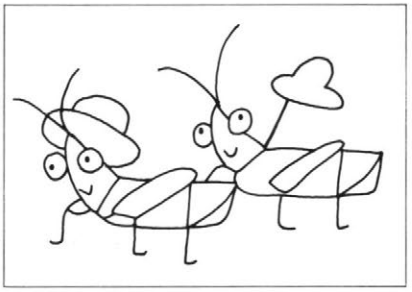
4．実践例

研究の方法で述べた指導計画を，手がかりとして実践を試みる。その際，何のためにという目標をはっきりとする。そして，どのような活動や経験という内容をどのように実行するのか

方法をふまえ，その結果はどうであったかの反省評価をする。

全領域について一応は原案を作成してあるものの，形式的な調和ばかりにとらわれず，本園の特長を生かすことを重点的に考える。特にこの報告書では，主題設定の理由の最初に述べたように，自然の領域にしぼる。その中で芝生の活用と，本年度の重点とした森のどんぐりに焦点をあてて，その実践例を述べる。

(1) 芝生という環境と子ども達



園の隣には広い芝生(約3000 m²)があり，子ども達が自由に遊べる。数年前までは，この芝生を活用しなかったようである。3年前，年中組の担任は，ここでお弁当を食べることを試みた。(59年5月23日)

その後何度か芝生を活用する保育を実行したところ，でんぐり返し，すもう等運動や遊びが活発になったことが担任の記録に述べられている。また，バッタやみみず等虫に関心を持つようになっている。

秋になって急に真っ赤になった芝生をみて，子ども達は驚いた。やがて芝生は黄色になり，季節によって，自然に著しい変化のあることを知った。芝生と生活環境との関連において認識していくことの芽が育てられたと，この担任はレポートで述べている。

(2) わり箸とどんぐり

秋も深まると幼稚園の森や園庭には，あちらこちらにどんぐりが落ちています。贅沢な悩みですが，身近にどんぐりがあると見向きもしないのが現状です。そこで私は，このどんぐりを活用する保育をしてみたいと考えました。手で拾えばわずか数分でバケツいっぱい拾うことができますが，わり箸で拾わせたらどうなるだろうかと思い，ある日私は保育の中でとりあげてみました。(60年度年中担任)

① 遊びながら身につくもの

どんぐりをわり箸ではさみ，カップに入れるのはむずかしいようです。お箸をうまく使えなかったM子は，どんぐり拾いを機会に，根気よく練習するようになり，うまく使えるようになったのです。

遊びの中ではじめた箸の使い方が上手になると，食事の時も進んで箸を使うようになりましたと，お母さんも喜んで知らせてくれたのです。(担任報告)

② どんぐり拾いゲーム

ある日，A君とB君が森からどんぐりを拾ってきました。2人は部屋の床にころがっているどんぐりを，わり箸で拾っているN子の様子をみて，みんなでどんぐり拾いの競争をしようとB君が呼びかけました。何人か集まりC君が「用意！　ドン」の合図をし，競争がはじまりました。子ども達は真剣になり，集中力をどんぐりに向けて遊びます。

私は「幼稚園だけでなく，お家でも使うようにしてね」と，言葉がけをしています。また，お母さんの集まる機会あるごとに気になる子については，その子のお母さんに話しかけ，園と家庭とのちがいがないようにしています。

10月の中頃，E君は1人で一生懸命どんぐり拾いをします。最初手をそえていましたが，右の写真のように上手に箸が使えるようになりました。そして物事に熱中するような態度になりました。

クラスの遊びの中で，わり箸を使うことが多くなります。わり箸鉄砲・飛行機等いろいろと工夫して遊ぶようになります。(61年度年中担任)

③　どんぐり拾い2年め

年中の秋，どんぐりがたくさん森に落ちました。私はあの箸の持ち方をする子ども達が，わり箸で，どんぐりをどれだけ拾えるかなと，興味を持ちました。ある日わり箸とバケツを持って子ども達と森へ行きました。森の中で手づかみで拾う子ども達の前で，わり箸を使って拾いはじめました。

ぼくにも貸してというのです。「ああ，むずかしい。なかなか拾えないが面白い」その声をきき，注意深く見ていた子ども達は，次々に箸を使うようになったのです。

どの子もコロコロ逃げるどんぐりをわり箸を使って懸命に拾おうとしています。はじめのうちは全然拾えなかった子も，教師の持ち方，お友達の仕方をみて，だんだんできるようになりました。

Y君は，いままでは，にぎり箸でお弁当をかきこむような食べ方をしていました。しかし，どんぐりを拾えるようになってからは，箸をうまくもって楽しく食べられるようになってきました。

このクラスが年長になり，この季節になるとまたどんぐり拾いがはじまりました。ゲームもクラス全体でするように発展してきました。箸の持ち方の上手・下手で差がつくので，負ける子は，持ち方をくふうしたり，拾い方の練習を積極的にするようになったのです。

ゲームを見て気のついたことですが，正しい持ち方でなくても上手に使える子，左手で2位になった子もいるのです。無理に指導しなくても，左手を矯正しなくても上手に使えるようになればよいと反省しました。(60年度年中・61年度年長担任)

以上①②③のレポートは，わり箸を使い，どんぐりを媒介として，季節の変化，園地内で手に入る利点を活用し，直接経験を子ども達にさせるような保育を心がけている一断面と言えると思う。

上述のどんぐりとわり箸の部分を抽出したが，6領域22の項目にレポートは関連している。子どもから発展する他の領域・項目についても体験する機会を与えるような保育をすることが，幼稚園の指導であるとうけとめているからである。

④　かぞえ方のくふう

61年10月の下旬になりましたら，遊びが少しずつ変化しはじめたのです。どんぐりをわり箸で自由に拾えるようになりますと，一定時間に誰が一番多く拾ったか，どんぐりの数をかぞえはじめたのです。かぞえてはみますが途中で数とどんぐりが合わなくなります。するとカップから出してかぞえなおしです。だんだん数が多くなるとわからなくなるのです。

20の次はいくつ，30のつぎはいくつと私のところにききにきます。ある日，M子はカップでなく，卵10個入りのパックを持ってきたのです。

M子は卵のパックの区切りに２個ずつ入れて，得意そうに私のところに見せにくるのです。私はM子ちゃん，とてもかぞえやすいね。いいものを持ってきたねと，ほめてあげたのです。その後M子のようにすれば，誰が一番かすぐわかるということで，お友達も卵のパックを持ってくるようになりました。そして今日はT君が１番でM子ちゃんが２番だったとか言って，私に知らせにくるようになったのです。

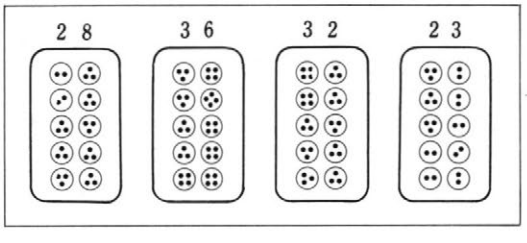
この発想を思いついたのは，M子です。私は最初の時，M子の見せてくれたパックのどんぐりが穴によって違うことを認めてあげず，可哀想なことをしたと思いました。

箸を上手に使えなかったM子が，どんぐり拾いからお箸を使うことはもちろん，数のかぞえ方の基本である１対１の対応の方法を考え出したのです。

しかも，お友達の勝ち負けをきめられるようになったことはすばらしいと思います。(61年度年中担任)

ある幼稚園では年中から，一般的には年長になると園児募集のPRとして，数詞をとなえさせたり，３＋５や７－４のような計算を一斉指導する幼稚園があるとかうかがっている。本園では，小学校１年生まがいの数量や図形の指導はしない。上述の担任が実践しているように，遊びの中で，１対１の対応の考え方や分類整理の集合の考え方の基礎を導き出すようにしている。そのためには子どもが考え出せるような場面を，教師は設定するような保育をしている。

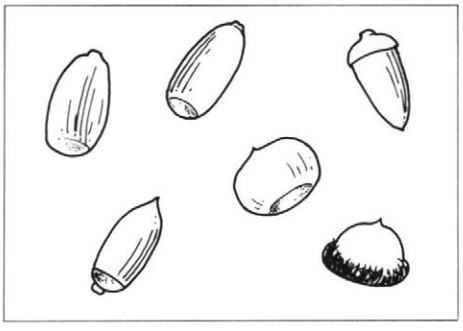
どんぐりの例を示すと，28個，36個，32個，23個の４人では，だれが１位かわからないことがあった。数詞をとなえられるD夫も，数詞とどんぐりの対応は，うまくできず，お友達を納得させることはできなかったようである。



ところがM子の持ち出した卵パックでは，

10の穴とも３個か２個かで判断し，次に４個か３個のが，いく穴かで判断するので，１位から４位までの順位がつけられる。

どんぐりの数え方から，卵の空パックという用具を使うことにより，数量の大小比較を理解するようになる。パックには穴が10個あることは，年中の子ども達も理解している。穴１個の中に，どんぐりが２個か，３個か，４個かということで，入っている数との対応によって，数の大小を判断する基準としている。



他のクラスでは，このパックを活用することにより数の大小だけでなく，集合の考えを用いてゲームの勝ち負けを争うように発展している。

森の中には，どんぐりといっても，楢の実・樫の実では形が違い，また色の違いで分類もできる。10の穴のうち５個は楢の実，５個は樫の実に分類して勝負をするゲームも考え出している。

(3) どんぐりごはん

お弁当の時，子ども達の箸の使い方をみるといろいろです。大人のように上手に使いこなす子，格好だけは右手で箸を持ちながら，実際は左手でつかんで食べる子，げんこつにぎりで口の中に入れようとする子などさまざまです。

どんぐり拾いが他のクラスと同じように盛んになりますと，部屋の中にどんぐりがたくさんたまります。ござをひろげ，ままごと遊びが始まります。いつもは空っぽの入れ物で食べるまねをするだけです。ある日のままごと遊びに，どんぐりとわり箸を子どもらが持ち出したのです。

どんぐりごはんに，どんぐりのおかずで，入れ物の大小によって，どんぐりの数が違います。わり箸でどんぐりをはさみ，お茶碗に入れることは大へんのようです。皿の大小によってどんぐりの数を入れかえて，皿とどんぐりの対応づけをしながら，ままごと遊びが盛んになり，どんぐりごはんが有名になってきたのです。(61年度年中担任)

子ども達はいろいろの考えを出すものである。ままごと遊びにどんぐりごはんと命名し，楽しくゲームは発展する。担任が思ったより興味を示し成功したと報告している。

このほかに，落ち葉を拾い集めて，お店やさんごっこや，ままごと遊びをする。これらをとおして季節感を体で知ったり，算数学習の基礎的・基本的内容を，操作しながら体で覚えている。

(4) 家庭の協力の方策

実践活動の１つの柱として「家庭との連携」をとりあげている。これは幼稚園の一方的な押しつけ的な研究でなく，家庭に理解していただき協力を求める方策をたてる，子どもがどのように変容するか，家庭の生活態度にどうあらわれるか等を知り，反省すると共に研究の成果をあげるよう考えたからである。

園としては毎月の「園のおたより」で，その月の方針や学級の状況を報告し，連絡をとるように努めている。ちなみに昭和61年度のおたよりのテーマは，次のとおりである。

４月	新学期を迎えて	５月	お友達と楽しく
６月	体でおぼえる生活技術	７月	大人の心を読む子ども
９月	じょうぶになる体力づくり	10月	元気な体
11月	感謝の心	12月	先生の気くばり
１月	かぜは万病のもと	２月	体でおぼえる幼稚園
３月	足跡を残す		

家庭の様子は，父母の会・クラス懇談会・家庭訪問等に担任がうかがうようにしている。また機会あるごとに母親からメモを学級担任に渡してもらうようにする。母親のメモを紹介する。

① 我が息子は入園するまで，虫を手にすることもできませんでした。母親の私が虫がきらいなので仕方がないと，あきらめていました。

入園してしばらくすると「今日はＴ君と森でカブト虫を見つけたよ」とか，「Ｓ君とクワガタを探すんだ」とか目を輝かして虫の話をするではありませんか。そして私の目の前でカブト虫やときにはクワガタをつかんで，嬉しそうな顔を見せてくれました。

先日もいも掘りで，クワガタの幼虫を見つけてきて，今箱の中でねむっています。果たして成虫になって息子を楽しませてくれるか，心待ちにしているこの頃です。

② 庭のない家なものでしたから，小さかった子どもをつれてよく公園へ行きました。どの公園も整備されていて，人工的な感じでなじめませんでした。

入園してからは，通園カバンの中にいろいろなものを入れてくるようになりました。セミの抜け殻，かなぶんぶん，どんぐり，大きな栗……お友達が森の中で大きなクワガタを見つけた，と言った時のくやしそうな顔，数日後「ぼくも見つけたよ」と，小さなクワガタを見せてくれた顔は対照的でした。自然の森のありがたさをしみじみ感じました。

③ チェンジマンごっこ等のTVの真似ばかり毎日飽きもせずにしていた我が子が，入園してから家での遊びが変わりました。サッカー・馬跳び等の運動はもちろん，花や虫に関心を持つようになったのです。夏休み前「おじぎ草」の苗を幼稚園から貰って帰りました。毎朝出かける前に触って葉をたたみ，帰ると「あっ！　もう開いているよ」と驚くのです。その後，ピン

クの可愛い花が咲いた時は，大喜びでした。

ファミコン相手に遊ぶことより，戸外で走り回り四季折々の変化を，遊びの中に見つけられる生活を，幼稚園と同じように我が家でも大事にしてあげたいと思っています。

④　4歳半までは街中の高層マンションで育った息子は，入園後しばらく自然の風物や季節の移り変わりに余り興味を持たなかったのです。同い年のいとこが庭に植木のある家に住み，犬を飼い，花木の名を多く知っているのに，我が子は何も知らず無気力でした。

自然とのふれ合いのために休日毎に，山や川へドライブに連れ出す親の努力に関心を示しませんでした。入園して4か月後の夏休みごろから彼の行動に変化が見られ，夫も私も自然の環境と幼稚園教育のすばらしさに驚きを感じたのです。

カタツムリやクワガタ虫をさわれるようになった彼，裸足で芝生を走り回ると気持がよいと話しかける我が子です。集団生活のありがたさと幼稚園の熱心さに感謝します。

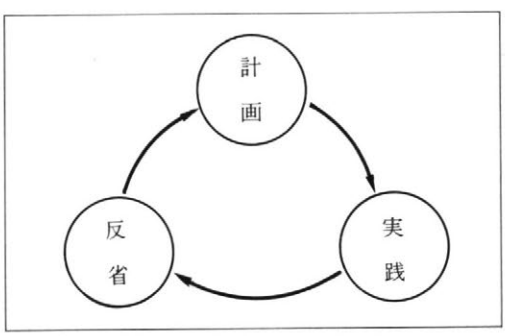
⑤　お母さん卵の入っていた白い箱をちょうだい，と幼稚園から帰った娘は急に言い出しました。運よくパックが2個あったので，理由もきかずに娘に渡したのです。翌日パックの中にどんぐりを入れて大事そうに持ち帰りました。1列には各穴に3個ずつ，他の一列の3つの穴には4個，他の2つの穴には3個入っています。

「1つの箱はK子ちゃんにあげたの。あたし，森のどんぐり拾いで，K子ちゃんより3個多かったよ」と，とても嬉しそうでした。珍しく早く帰ったお父さんに，嬉しそうに今日のできごとを話しています。その娘の横顔をたのもしく感じたひとときです。

5．研究の結論と今後の課題

(1)　研究の結論

幼稚園生活の保育で，研究の看板を大上段にふりかざして，掲げることは，おこがましい。なぜなら，20歳代の比較的経験年数の浅い女性集団であり，まして私立幼稚園においては，教育委員会や他園との交流は少ないからである。従って園内で細々と進めている研究だからである。日々の保育活動に追われ，勤務時間をオーバーして研究を進めるわけであるから，十分な研究にならないと思うのである。



本園の研究は，保育の基礎的・基本的なことを身につけ，意図的計画的な保育を進め，実践し，反省評価をくり返すサイクルで年間の運営を進めている。

その一例としての実践を自然の領域について報告をしたのである。研究主題で述べたように

幼稚園の特性からして，家庭との連携をとり成果をあげることは急務である。

そこをねらったが，十分な成果はあがらなかった。このことがこの研究を進め，教師自身の子どもをみる目，ひとりひとりの子への接し方，言葉がけ等で成果をあげることにつながったのである。

(2) 今後の課題

自然の領域を軸とした研究だが，ともするとねらいがそれることがあった。幼稚園は遊びという形で指導をするが，子どもは総合的で変化の富んだものであるから，教師がそれにつられてしまう。そこでねらいがそれるので，この点を明確にしていきたい。

「クラス全体で行う経験や活動」の共通の経験を持たせることを，ややともすれば，一斉指導になりがちである。クラス全体の子どもに興味や関心を持たせる活動をどうするか，興味や欲求を持つように，環境設定や動機づけをする研究をしてみたいと思っている。

研究にたずさわった者

竹川　裕美	高橋　美幸	市川いずみ
沖　　広美	青木　正恵	松井由美子
村山　淳子	山之内英子	大塚　茂雄

5. 共同研究

■研究テーマ■

主体的に活動に取り組む幼児を育てる園と家庭との絵本交流

千葉県市川市立新浜幼稚園
代表　大西紀子

1．主題設定の理由

今，子どもをとりまく社会の現状は，情報文化が入り乱れ，好むと好まざるとにかかわらず，子ども達に過剰な刺激を与えている時代である。出版物も数多く，絵本をとっても氾濫の一途といえる。低年齢化していく知育偏重の風潮と共に，遊び場・遊び時間・遊び仲間の減少が問題視される子どもの世界を背景として，幼稚園は何を育てるかが問われている。ここ数年来，当園においても，受身で自らの意志を働かせて，遊びに没頭する姿が失われていく傾向を憂慮して，園の教育目標である心豊かでたくましい子の具現のために，研究課題は「主体的に活動に取り組み友達とかかわりを広げていく保育」とかかげ，実践をしてきた。子ども達の興味関心を受け入れて，共に歩み，生活を作り出し援助しながら，望ましい経験や活動を方向づけていく保育者の構えを共通理解として一人一人を生かす学級経営に当たる。園全体としては，自ら遊び出せる環境作り，より多くの友達とかかわりのもてる生活作りを研究の重点とした計画である。特に自発活動を促すコーナー設定に力を入れてきた。その中で絵本のへやは，全園児が自由に出入りして主体的に絵本にふれ楽しめる場としてとらえ，担任・主任・園長・母親との連携プレーで運営に当たり，園と家庭とのふれあい交流の場としても活用し，研究効果を図ってきている。

2．研究のねらい

絵本にかかわる活動を通して，幼稚園教育要領・言語領域のねらい，先生のお話を喜んで聞き，絵本・童話に親しみ想像力を広げ豊かにすることの達成にとどまらず，子ども達の情緒を安定させ，心情をはぐくみ，思いやりの心，人としての豊かな心を育てていきたい。絵本のへ

やにおいては,正しい本との出会いの場として,将来にわたる読書の世界への橋わたしが行われるように,子ども達が自らの意志で絵本を選び,ページをめくる喜びを味わわせ,主体的に本を読む楽しさが得られるようつなげていきたい。また,4・5歳児の発達段階を考慮して,家庭との連携を密にし,望ましい読書環境を園と家庭側から与えられるよう理解し合う。合わせて母子読書の芽を育てていきたい。こうした交流活動の積み上げから,母子関係を確かに豊かにして子ども達の依存から自立への過程を無理なく助け,自発性・自主性の育ちを育てたいと願っている。

3．研究の方法

(1) 読書環境作り,絵本にかかわる場作り,よい絵本の整備と読み聞かせ計画の推進

各学級では,担任がクラス文庫として,月刊絵本,自然・科学の絵本等,子ども達が身近に手にふれられるコーナーを作り,絵本棚を配置,管理する。園全体としてはどの学級からも立ち寄れる絵本のへやを設置する(図書室の原型として考える)。よい絵本を吟味し,週案打ち合わせ時読み聞かせ用絵本の検討を行う。絵本の整備は園側では園長,主任,絵本係とが協力して行い,絵本サークル活動としてサークル会員も参加,援助する。絵本購入は学期単位で,PTA活動の廃品回収の収益金,教材費,市費等をあてて行う。

(2) 絵本貸し出し活動による園と家庭との絵本交流,おたより交換

絵本貸し出しは,1年間絵本のへやで十分に絵本にふれ絵本の取り扱いにもなれた,年長組80名を対象に行う。事前に父母へプリントを配付して家庭での接し方,かかわり方について理解を求め,啓蒙しておく。

〈絵本貸し出しについてのお知らせとお願い〉

①土曜日貸し出し,月曜日返却。2日間家庭でお読み下さい。月曜日忘れず絵本カードと一緒に絵本袋に入れて返して下さい。まだ数少ない1冊です。平日は絵本のへやでみて下さい。

②1人1冊を原則とします(ただし,その年の子どもの興味の度合で3学期に2冊にすることもあり)。

③絵本カードの記入はご父兄の手で,絵本名・著者名・出版社名をよろしく!

④一言欄はお母さんの感じたまま記入して下さい。決してお子さんに感想を無理に求めたりしないでお子さんの様子を見守り,反応等一寸ひとこと入れてもらえればと思います。

———後でお子さんの成長する姿が絵本の記録と共によくみえますよ———

⑤あくまでも一人一人のお子さんの興味を尊重して選んでもらいますので,もちかえった

絵本の文句，注文はひかえるよう長い目で暖かく見守って下さい。

———同じ本を何回も借りたり家にある本を借りていく段階もあります———

⑥絵本カードは，卒園時，ぼくのわたしの読んだ本の記念として，各自へお返しします。いたんできたらご家庭で補修をよろしく。大切に扱って下さい。

(3) PTA活動・絵本サークル活動・ノンタン会の交流

4月末に行われるPTA総会において，他のサークル（園芸・文化・運動）と共に同好の仲間をつのり，会員で活動する。4年前に命名したノンタン会（ノンタン絵本からノンちゃん雲にのるの童話の世界へ成長することを願って決定したもの）の開催。毎水曜日のノンタンの日活動として読み聞かせ会を定期的に実施する。

サークルへのおさそいのプリントは，次のとおり。

〈絵本サークルへのおさそい〉

今，絵本の数は種々多数になり氾濫しています。何が幼児にとってよい絵本か，お母さんの手でさぐり，お母さん自身，幼い日にもどっていろいろな絵本をみとどけていく必要があると思います。興味のある方で絵本サークルをすすめてみませんか。お母さんによる読み聞かせを中心として，すばらしい絵本との出会いをもちたいものです。たくさんの同好の仲間をお待ちしています。

■こんな活動予定です（案として，また集まったら考え合いましょう）

① 絵本読み聞かせ会（定例水曜日）　ノンタンの日

② よい絵本についての話し合いと勉強会

③ 会員間の絵本貸し出しによる研修会

④ 園児の絵本貸し出しの世話と絵本管理（修理・整備）

4．実践事例

(1) 絵本のへやにみる子ども達の育ち合い

——絵本にかかわる活動・年間記録より抜粋——

期／記録項目	
○絵本のへやの子ども達の様子，姿	・2期/6月上旬——けっこんてなあに？—— 年長組女児ゆり組7名，つくし組5名，思い思いにやってきて絵本を選ぶ。『ドラキュラだぞ』を中にして，額を寄せ3名声を合わせて読んでいる。『まじょっこトローチ』を読んで，『とりかえっこ』を3人で顔を見合わせ，「おもしろ

○育つもの，育てたいもの		い！」と笑い合う。黙って見守っている私に，Y子・M子と寄ってきて，「これおもしろいの，読んで」と出してきたのが『ぴちこちゃんのけっこん』 読みはじめると全員寄りそって聞きこみ，「ねずみはねずみとけっこんするといちばんいいのにね」と身をのり出してうなずき合う。その後，この絵本をめぐって2階のなかよしコーナーで気のあった友達を集めて読み聞かせごっこをする姿が見られ，けっこんという言葉のもつ意味に興味を示し，女児の話題として楽しんだ。それを受けて学級では，『しろいうさぎとくろいうさぎ』の読み聞かせを意図的に行い，女児の興味の望ましい方向づけとして保育者がかかわりをつなげていった。
○Tのかかわり		
○読みきかせた絵本 ※子どもの選んだ絵本	年少組	
	年長組	
○家庭との連携 ○絵本サークル活動の状況		

・2期/6月下旬――まいごのこすずめをめぐって――

梅雨時，年長児S男がアパートの階段の下で巣から落ちたすずめのひなをひろって園にもってきた。「ようちえんでかいたい！」という希望をいいにきたが，ひなは親鳥と一緒でなければ育たないこと，母鳥がさがしているからと説得して，元の巣へもどす約束をして降園させた。

園の小鳥の飼育当番も定着し，丁度，かるがもの引越のニュースが取りざたされていた時期でその影響から野鳥への興味が子ども達の間で湧いて話題になっていたようだ。自然界で育つ鳥，人間が飼ってよい鳥のあること，小さな生き物へのいつくしみの心が育ってくれればと願って，『こすずめのぼうけん』を学級で読み聞かせした。全員集中し，こすずめの一挙一動をくい入るようにみて，感情移入した。その後，また，どぶに落ちていたこすずめを助け介抱して親鳥に返した話が年長女児Hの母親から報告され，母子でそのふれあいの一部始終を手作りの絵本に書きとめ，夏休みの絵本サークル活動の際，完成させていった。

(2)　絵本貸し出し活動にみる園と家庭との交流事例

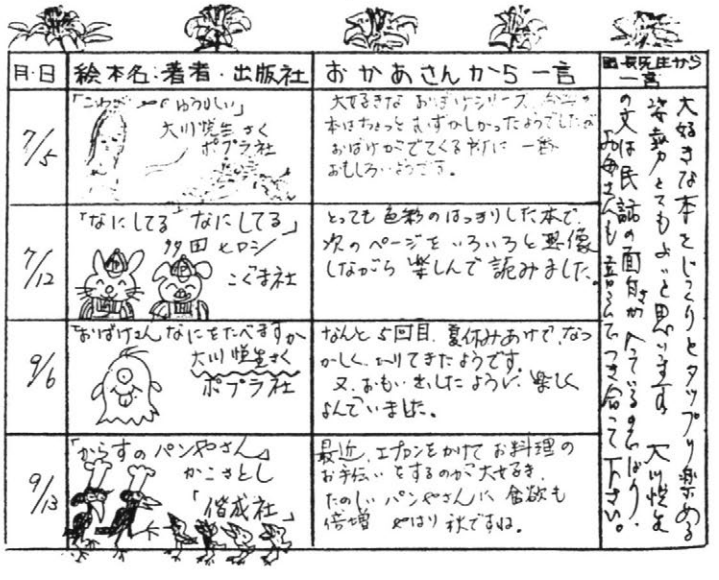
5月10日　第1回絵本の貸し出しを開始する。絵本を借りることについて子ども達は年長になって指おり数えて待っていた。登園すると所持品の始末もそこそこに，絵本袋にカードを入れて小走りに絵本のへやにやってくる。絵本サークルの係のお母さん，園長の見守る中，みたい本を真剣にさがしている。すでに前日より借りる本を決めていた子は早い。「お姉ちゃんがすきな本だから」「うちにあるからこれかりる」「妹にみせるんだけど，赤ちゃんでもわかるのないかな」等と迷った末，思い思いに決めて袋に入れる。椅子に腰をおろして，中をよく吟味し

ながら，何回も本をとりかえる子，どれにしようか神様のいうとおりとひざの上に2冊の本をのせ，うたいながら『親指姫』に決めた子。実にいろいろな借り方である。世話役のお母さんとは，子ども達ができるだけ自分の気持で選ぶことを大切にして，子どもの方から助けを求めた時だけ，アドバイスしたり援助するよう話し合いをしておく。回を重ねるたびに，子ども達の本を選ぶ選択眼が育っていき，この本を読みたい，この本面白いから読むといいよ，次はこれを借りるんだと，目あてをもって，借りていくようになる。夏休み中に家庭で読んだ本の中から園でもこんな本を買ってほしいと申し出る子も出てきた。お兄ちゃんがこの本面白いっていっているという子どもの要求を入れて，字の多い幼年童話，ふれあいシリーズ，おばけシリーズ等，新刊購入の際，参考にしたのも今年の傾向である。各学級の読み聞かせ計画の中へ子ども達の読んでほしい本も加え，保育者の与えたい本と子どもの選ぶ本のバランスを配慮していくようにした。

2学期に入って同じ本を何回も借りるケースが目立ち，子ども達が選んでもちかえる本の取り扱いについて，全体保護者会で再度，共通理解を図って，よい絵本とは何だろうと協議の場としていった。家庭からの一言欄にも，さまざまな反応がみられ，わが子の成長を共に喜んだり，悩んだりする姿が書きつらねられていった。園側から月1回と必要時，返信をとりかわしながら，絵本カードを活用してきた。

◀例❶▶　つくし組・女児M

子どもの借りていく絵本の絵を母親が模写して一緒に絵本を楽しみ，何回も同じ絵本を借りるわが子を長い目で見守り，素直に喜んでいる姿勢が伺われる。この絵は，卒園前の最後の貸し出しまで続けられた。



月・日	絵本名・著者・出版社	おかあさんから一言	園・長先生から一言
7/5	「こわがりゆうかい」 大川悦生さく ポプラ社	大好きなおばけシリーズ。今回の本はちょっとむずかしかったようでしたが おばけがでてくる所に一番おもしろいようです。	大好きな本をじっくりとタップリ楽しめる姿勢がとてもよいと思います。大川悦生の文は民話の面白味が入っているようです。お母さんも喜んでつき合って下さい。
7/12	「なにしてる なにしてる」 岩田ヒロシ こぐま社	とっても色彩のはっきりした本で、次のページをいろいろと要像しながら楽しんで読みました。	
9/6	「おばけさんなにをたべますか」 大川悦生さく ポプラ社	なんと5回目。夏休みあけで、なつかしくなりてきたようです。又、おもしろいようで楽しんでいました。	
9/13	「からすのパンやさん」 かこさとし 偕成社	最近、エプロンをかけてお料理のお手伝いをするのが大好きな、たのしいパンやさんに食欲も倍増やはり秋ですね。	

月日	絵本名・著者・出版社	おかあさんから一言	園長先生から一言
7/5	きかんしゃやえもん 文・阿川弘之 絵・岡部冬彦 岩波書店	先週文化博物館へ行き実物のやえもんのモデルの蒸気機関車を見て、また思い入れが深くなったようです。	きかんしゃやえもんの文章はかなり長いものです。文章の理解力を要とする内容の高いものです。
7/12	きかんしゃやえもん 文・阿川弘之 絵・岡部冬彦 岩波書店	よほど気に入っているのでしょうか、文のよみさえ早くなってきました。やはりとくに暗記しているようです。	
9/6	きかんしゃやえもん 文・阿川弘之 絵・岡部冬彦 岩波書店	ここまで回数が重なると他の本に対する興味が無いのでは、とかすかに感じてきました。本人は喜んでいます。	
9/13	きかんしゃやえもん 文・阿川弘之 絵・岡部冬彦 岩波書店	大変喜んで見ています。他の本を数では扱んでいますが、幼稚園の本では、これが一番気に入っています。	

◀例❷▶　ゆり組・女児S

この場合も同じ絵本を繰り返し楽しむわが子に母親が心配したり悩んだりしながら一緒につき合い，最後にはそんなに好きならと，クリスマスプレゼントに『きかんしゃやえもん』を贈ったという。自分の本として所持してからは，また別の絵本へ興味がむけられるようになった。

月日	絵本名・著者・出版社	おかあさんから一言	園長先生から一言
1/31	①スーホの白い馬 大塚勇三再話 赤羽末吉 画 (福音館書店)	●家内が言うには、この本は息子が以前から借りたくて仕方がなかった本らしく、「ママ、スーホの白い馬。今日やっと借りれた」とにこにこしていたそうです。モンゴルが舞台の本でしたので、世界地図を見せながら読んでやりました。その後にも繰り返し一人で読んでおりました。(父)	すばらしい！スーホの白い馬は分かる年齢の理解力を要とする内容の深いものです。男の子には強さとやさしさが大切であることを味わってほしい。
〃	②ちゅうしゃがこわいムーじいさん 文・森田文 絵・渡辺三郎 (フレーベル館)		
2/7	①おひるねじかんにまたどうぞ 武鹿悦子　小峰書店	この本は自分で何度か読んだことがあるようで「キャベツくんてとても面白いんだヨ」としきりに言っていた本でした。私にもぜひ読ませたいと思ってかりてきてくれたようです。	
〃	③キャベツくん 長新太　大研出版		
2/14	①ひとまねこざるときいろいぼうし エッチ・エイ・レイ (訳 光吉夏弥)　岩波書店	「ひとまねこざる」シリーズはこれが3冊目です。大人の感覚からすれば、それほど面白いとも思えないのですが、いつも息子は大喜びです。(父)	てゆわいに一言補足まで下さる姿勢に感謝申上げます。二年間ふくろう球、確かな味とひと感じ手
〃	②11ぴきのねこと ぶた 馬場のぼる こぐま社		
2/21	①しゅっぱつしんこう 渡辺茂男　あかね書房	●各地の市長さんの話しぶりや、関議の進行ぶりがとても面白かった様子です。カレンダーを見て「あと4回しかかりられない」と寂しそうにつぶやいておりました。(父)	
〃	②ぼくのひこうき 佐藤さとる　偕成社		

◀例❸▶　つくし組・男児K

母親の出産等で父親も参加して読み聞かせをしたり，父子読書の楽しさを味わっている。3学期にはすでに一人で読みこみ，いろいろな面で興味を広げている姿が克明に描かれ貴重なKの絵本の記録となっている。

比較的消極的で，自己主張が余りみられなかった男児だったが，内面の育ちと共にサッカー大会に出場したりして，積極性を増していった。借りる本の傾向も痛快な男の子らしい物語を借りていくようになった。担任共ども感激したカードの一つ。

◀例❹▶　つくし組・女児U

絵本サークルノンタン会の世話役をつとめる母親の熱心な姿が，子どもの本好きをはぐくみ，年少児に読み聞かせをしたりするまで絵と文を自分の力で読み，絵本の世界に入りこんだ。卒園まで絶対に全部絵本を借りたいというのが口ぐせである。

2/7	①キンダーブック図 しせん ひよこ 宇田川龍男・指導 兼子良明・絵 フレーベル館 ② 14ひきのあさごはん いわむら かずお 童心社	図鑑をはじめて借りてきました。14ひき…を一緒に見ながら，子供の頃学校の帰りに，野いちごをとって食べた思い出等を家族で話しました。今は，こういうことも，なくなってしまい，淋しい気がします。	おかあさんのいさい時の話は是非まのあたりに聞いてやって下さい。きっと心の底に沈んでいて後，生きていきます。
2/14	①もりのたからもの・ひさかたチャイルド 花之内雅吾 作・絵 ②からたちばやしのてんとうむし かこさとし 偕成社	2～3日前から風邪気味の娘ですが，私にせがむ時のように，よんでくれました。幼稚園生活もあと，1ヶ月，たくさんの絵本と触れ合って欲しいと願っています。	
2/21	①ウーフはあかちゃんみつけたよ 神沢利子・作 井上洋介・絵 ポプラ社 ②1ぽつぷのしっぽ 神沢利子・作 渡辺洋二・絵 偕成社	フリばしゃらゆら，が借りたかったようですが，明日出るのが遅かったので，借りることができず，ちょっとがっかりだったようです。でも2冊とも娘の好きな本です。ウーフは，必ず，眠る前に，よく読んであげた本です。	
2/28	①ままはあのてんぼ ②ままごりにのる ①②とも，なかざきけんのすけ・作 にしまきかやこ・絵 偕成社	母親の日常をユーモラスに，描いている可愛い絵本でした。年長さんの土曜日の貸しおしが残り，あと1回だというので，とても淋しいようで，ずっと幼稚園にいたい…なんて言っていました。	

◀例❺▶　つくし組・男児Y

入園当初，母親から離れられず泣き叫び，1か月半，担任が手をもっていないと不安でべそをかいていた男児。母親も共に悩み，少しでも不安を解消させたいと，2歳の下の子をつれ，文化サークルに入り，母子で園生活に適応を図っていった。

（カード省略）

◀例❻▶　つくし組・男児A

一人っ子で，わがままな面が強く出て，友達ができにくかったが，母子で絵本が大好きになり，よく話し合いがもてたという。友達とも協調して絵本の整理を進んで行う姿も出てきた。最後には，自分で一言欄を作り，書くようになった。

（カード省略）

以上の記入例は一部の紹介であり，その他80人が絵本をパイプとした一言交換を重ねている。まず母親の感想の第一として，母親の選びたい本と子どもの選ぶ本が違うことへのおどろき，そして一緒に読んでいくうち子どもの選ぶ本は確かに楽しいという発見が多い。子どもの世界にもどってもう一度，己を見直すよい機会となっているという率直な声も聞かれる。合わ

せてこれまでの子育てに対する反省と疑問も生まれ，月１回の保育相談日を活用する母親も出た。１年間の絵本貸し出しによる交流活動はさまざまな出会いを作り，さまざまな語らいの場を生み出してきた。

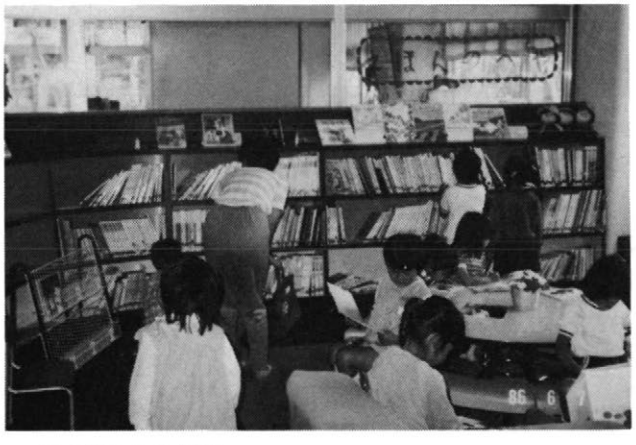
・絵本を通じて子どもと接する時間が増え，一家団らん，話し合いのきっかけとなりよかった。
・私が読めない時は主人が読んでくれるようになり，親子のコミュニケーションが濃くなった。
・１字も読めないで入園したのに，今では随分上手に読めるようになった。たまに聞かれる時教えただけなのに！（先生「○○ちゃんは園でもよく本をみているので本で字を覚えたんでしょう」）本って本当にすばらしいなと思った。
・今日借りたい本があるから早くいかないと借りられちゃう！といっていつもより早く出かけたのにもう借りられていて残念そう。そんな息子を見て積極性が出てきたなと感心する。

等々，家族で本好きになったという記録が増え，親自身，絵本の世界に入って子ども達と楽しさを共有したり学ぶ姿勢がうかがえ，親子関係を円滑にしている。

(3) 絵本サークル活動，ノンタン会にみる交流の記録

４月30日　61年度は入会希望者25名で発会した。早く始めたいという熱心な声があり，同日まず，園長・主任で読み聞かせ会のスタートをきる。あまりテクニックにこだわらず母親それぞれのもち味を生かして，自分の好きな絵本を読みましょうと申し合わせ，３回めからは即実践と母親も順番制で加わる。皆の前で本を読むことにためらいのあった母親もいたが，無理をせず，都合の悪い時は交代して気持の盛りあがりを待って行う等，工夫している。

いろいろな絵本を勉強する目的と読み聞かせ実践をわが家にも行えるように，会員対象に水曜日は絵本貸し出しをする。


▲絵本貸し出し風景

５月10日　年長児の絵本貸し出し開始と共に，毎土曜日・月曜日の返却時の立ち会いを交代制で実施。園から依頼があった時，月１回の割合でいたんだ本の補修や整理を行っていく。貸し出しと返却日の立ち合いは，２学級80名の幼児がゆっくりと借り終えるまで見守り，約30分最後は本の始末を見とどける援助である。

次の記録は，立ち会いの会員が喜びいさんで本を借りにくる子ども達の姿から共感したり，

一緒に悩んだり，わが子以外の絵本にふれる子ども達から感じとった声の一部である。

・ 本を選ぶとき，他の子に惑わされることなく，自分のみたい本を懸命に探している姿に感心した。(6月)
・ 親からのおしきせでなく，自分自身で好きな本を選ぶという意義を感じた。(6月)
・ 本を返すときちんとおく子,適当におく子等,家庭でのしつけを考えさせられた。(6月)
・ 選ぶとき友達と相談したり，片付けるとき，さすが年長児と思った。(6月)
・ 絵本袋をもってかけるように借りにくる子どもの様子に，どの子も本好きだなあとうれしくなった。(9月)
・ 先生に読んでもらったから借りにくるという子も多く，先生の力ってすごいなあと思った。(10月)
・ 女の子が右と左に本を持ち，どっちにしようかと悩んでいて，右手を今週，左手を来週にしたらというと,「うん！」と言って，目を輝かせた。とてもうれしかった。(10月)
・ 人気のある本は，借りたい子が何人もいてぶつかることもあったが，そんなときけんかもせず，じゃんけんをしている姿に感激。(12月)

〈昭和61年度　絵本貸し出しベスト・セブン〉(5月～2月集計)

	つくしぐみ		ゆりぐみ	
	男の子	女の子	男の子	女の子
①	からからからが	さくらのさくひ	11ぴきのねこシリーズ	きかんしゃやえもん
②	はれときどきブタ	のはらのこぐまさん	アンパンマンシリーズ	おばけのてんぷら
③	あかいぼうし	ひるねのじかんです	こぐまちゃんシリーズ	オズのまほうつかい
④	おならばんざい	とらくんのしごと	おばけのてんぷら	ふしぎながちょう
⑤	しろくまちゃんシリーズ	おばけさんなにをたべますか	おばけさんなにをたべますか	はれときどきブタ
⑥	11ぴきのねこシリーズ	おもしろいことないかな	14ひきのあさごはん	おりょうりとうさん
⑦	ろくべえまってろよ	おならばんざい	もぐらとずぼん	やさいのおなか

〈ノンタン会の活動のあしあと〉

絵本を媒体とした子ども達との交流のあゆみは，ノンタン会の活動のあしあとでもあった。

6月11日　毎日新聞社取材あり，読み聞かせ会公開。

7月14日　ノンタン会だより発行。よい絵本の紹介。

8月28～29日　手作り画集，手作り絵本編集，研修会実施。

9月27日　PTAバザーにて絵本・紙芝居実演。

10月中旬　ペープサード人形劇作成。2週間後完成。

12月4～5日　おはなしキャラバン見学。かたりべ参加，指導。

12月17日　ペープサード劇「ブレーメンの音楽隊」。

12月20日　おたのしみ会，誕生会にて園児のために上演。

2月9日　稲荷木幼稚園絵本サークルとの交歓会をもち，ブレーメンの音楽隊を公演する。

2/28～3/9　ノンタン会文集編集，1年間の活動の反省会。

3月11日　読み聞かせ会最終日，手作り紙芝居実演。

〈ノンタンの日の活動の1例〉

毎月末，水曜ノンタンの日は，一般父兄の参加も受け入れ，読み聞かせを実施。好評であった。

	読み聞かせた絵本	読み手	子ども達の様子と感想
5/14 3回目／お母さん加わる	・とりのみじさ 樋口　淳／文 梅田俊作／絵	主任	・とぼけた表情のじさが誤って鳥をのみこんでしまうところで，子ども達は思わず「あっ！」と声をあげ，わくわくした顔で聞き入っていた。
	・おばけのてんぷら (せなけいこ作絵)	お母さん	・うさこちゃんが気がつかないうちにおばけを天ぷらにしてしまいそうなとき，めがねをあげてしまったとき，子ども達は，うれしそうに笑い合っていた。
	・はけたよはけたよ 神沢利子／文 西巻かや子／絵	園長	・パンツのはけなかったたつやくんが，一寸した思いつきではけるようになって，得意に動物達に見せにいくと，一緒に喜び共感している様子。

5．研究の結論と今後の課題

本を読む行為は人としての証(あかし)であると，著名な絵本作家は述べている。人間の大切な土台作

りの幼稚園期に子ども達一人一人が心豊かに，主体的に生活していくことを願って，絵本交流を園と家庭で継続した結果，毎年得られる確かな手ごたえは，どの子も絵本が大好きということと共に，喜び育ち合う母親がいて，更にその効果は倍加していくという重みであった。学級の読み聞かせ絵本90冊余り，子どもが自ら選んで借りた絵本50冊，サークル活動で読み聞かせた絵本105冊と，実に１年間で200冊もの絵本の世界に遊んだことになる。絵本のへやで，子ども達が自由に出会った絵本は数知れない。絵本から発展した活動も多く，絵本のもつ総合性を再発見して保育者も子どもをみる目を深めていく機会となった。今後とも，地味な分野であるが，心を育てるために子どもと共によい絵本を求めて，絵本のへやを充実させ，家庭と手をつなぎながら，教育目標に近づいていくつもりである。PTA 活動の輪を広げる手だてとして他幼稚園との交流を更に図ること，よい絵本を整備充実することを課題に含めて，研究主題の主体的な子どもの姿の実践検証を図りながら，幼児理解を多くしていきたい。次年度へ向けて保育者と父兄一丸となって前進していく予定である。

6. 共同研究

■研究テーマ■

自らあそびに取り組み，生き生きとあそびを発展させていく保育を創造しよう
―― 家庭と心を通わせて ――

静岡県駿東郡長泉町立南幼稚園
代表　青木早枝子

1．主題設定の理由

長泉町は静岡県の東部に位置し，三島，沼津，裾野市及び清水町に隣接している。町の中南部にある園内区は，かつての純農村地帯から大企業，中小企業の進出に伴い準工業地帯化し，他県や町村外からの企業勤務者が多い。

園児の７割近くは核家族の少人数の中で育ち，生活が画一化し親子共ども生活経験が少なく，「隣は何をする人ぞ」的な考えも多い。車社会にあって大半の子どもは「歩く」経験が少なく疲れやすい。また，交通量の多い複雑な道路と新幹線が東西に，東海道，御殿場線が南北に縦断し，その三角地帯にあるので家庭では安全面を考え，子どもたちは狭い空間に追いやられ，既製の遊具で容易に遊べるものにとびつきやすく，「自らの力」でたくましく創り出していく遊びが少ない。

そこで，保育の場を園内にとどめず，長泉町全体を南幼の「庭」と考え，全ての住民を「教師」とし，積極的に園外に目を向け，自然や人びとと触れあう中で「豊かな感性」「たくましさ」「自分の足で歩ける子ども」を育てていきたい。また，家庭と心を一つにし，親子共ども「我が町長泉」「我が幼稚園南幼」と誇れるよう地域に根ざした保育をめざしていきたいと考えた。

2．研究の実践にあたって心がけたこと

(1)　自然の中に子どもを思いきってほうり出し五官をフルに使ってあそび，多くの実体験を重ねる中で「自らの力」であそび「豊かな感性」「たくましさ」を育てたい。

(2)　父母を園に引きよせるのではなく，園から手を伸べることにより，地域社会との連携を図り，理解を深めると共に，多くの人びととの出会いの中で「郷土を愛する子」を育てたい。

3．研究の内容とその実践

研究の重点を，1自然と人びとがふれあう園外保育，2心通わすたより，3地域ぐるみで楽しむ行事の3点においた。

1 自然と人びとがふれあう園外保育

● 園から踏みだしてみると豊かな自然があり温かい人情にふれる

今，「自然が失われている」と言われるが，よく目を開き足で歩いてみると，わが町はまだまだ自然に恵まれている。「人情が薄くなった」と言われているが，心を開きふれあいを求めていくと，長泉の人びとは人情が厚い。そこで「園外保育」をとりあげ，自分の足で歩き，見て，ふれ，感じる実体験を重視し，多くの人びととの出会いの中で「豊かな感性」「たくましさ」を育てる保育を実践する。

(1) 研究方法

● 思いきって，年間計画を見直す

58年度より前年度の計画を踏襲することをやめ，園だけでなく地域の自然や人びとも，子どもの保育に欠かせない環境であるという考えで，積極的にとり入れて保育計画をたてるよう努め，園外保育年間計画及び候補地地図（省略）を作成して，父母や地域の人びとの協力を得ながら年々充実してきた。

園だけの子どもの姿だけでなく，家庭や地域での子どもの姿をとらえていきたいので，実践記録の中にその欄を設けた。これは発展して「心を通わすたより」の実践につながるものになっていった。

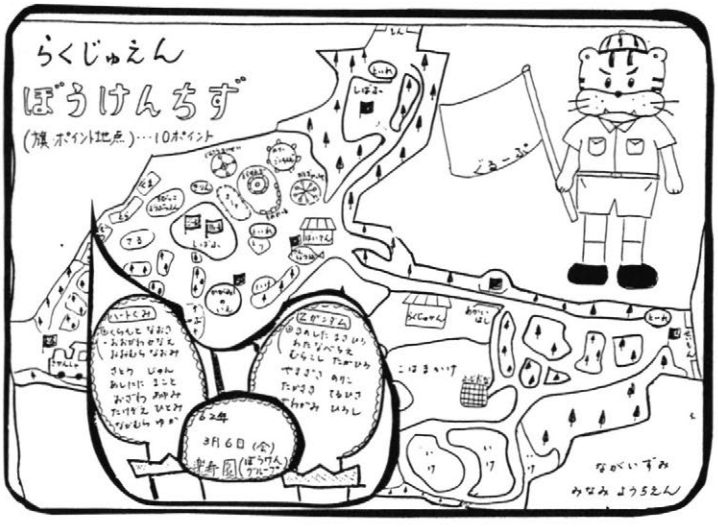
(2) 実践例

〈町内はもとより，隣の三島市まで「わが庭」と歩きまわれる楽寿園の実践例〉

【はる】 早春の楽寿園

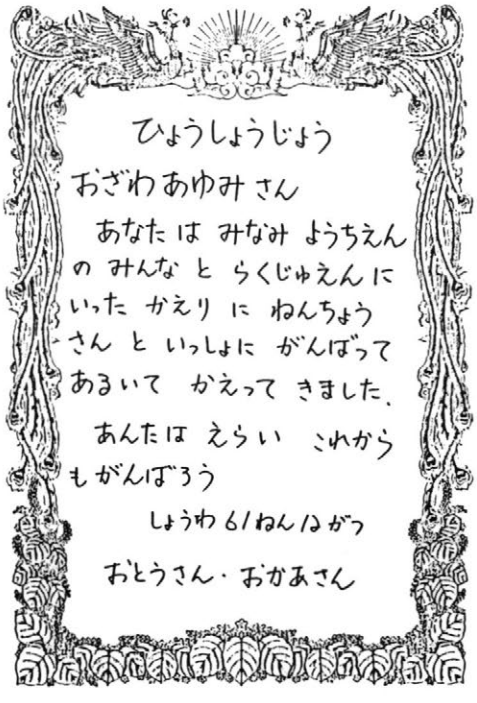
桃沢少年自然の家，駿河平，沼津少年自然の家，富士牧場公園と，どこへ行っても子ども達は，「冒険・冒険」と冒険が大好き。冒険にはいろいろな出会いがあり，スリルと感動がある。この冒険心を満たすため，また，2年間の園外保育の総決算という願いをこめて，ここ3，4年間，子ども同士で園内をかけめぐる「楽寿園冒険」を計画している。年少・年長・混合の6，7人のグループで構成されている。「地図」（次ページ）をたよりに，思いきり悩み，迷い，不安と戦い，力を合わせ，勇気をもってつき進んだこの体験がこれからの生きる力の一部になることを願っている。

※冒険は毎年この地とはかぎらないが，安全面を考慮し，子どもが経験している場所を計画している。



【あき】

秋の楽寿園は京都にも勝る風情がある。紅葉，木の実などの自然物も豊富で，子ども達は，夏の楽寿園との違いを肌で感じとる。雪どけ水で遊んだ池に水が1滴もなかったことも大きな驚きであった。同じ場所に何回行っても，四季折々のすばらしい発見がある。



ひょうしょうじょう

おざわあゆみさん

あなたは みなみようちえんの みんなと らくじゅえんに いった かえりに ねんちょうさんと いっしょに がんばって あるいて かえって きました。

あんたは えらい これからもがんばろう

しょうわ61ねん12がつ

おとうさん・おかあさん

Uちゃん のおかあさんより（年長児）（女児）　(S.61.12.9)

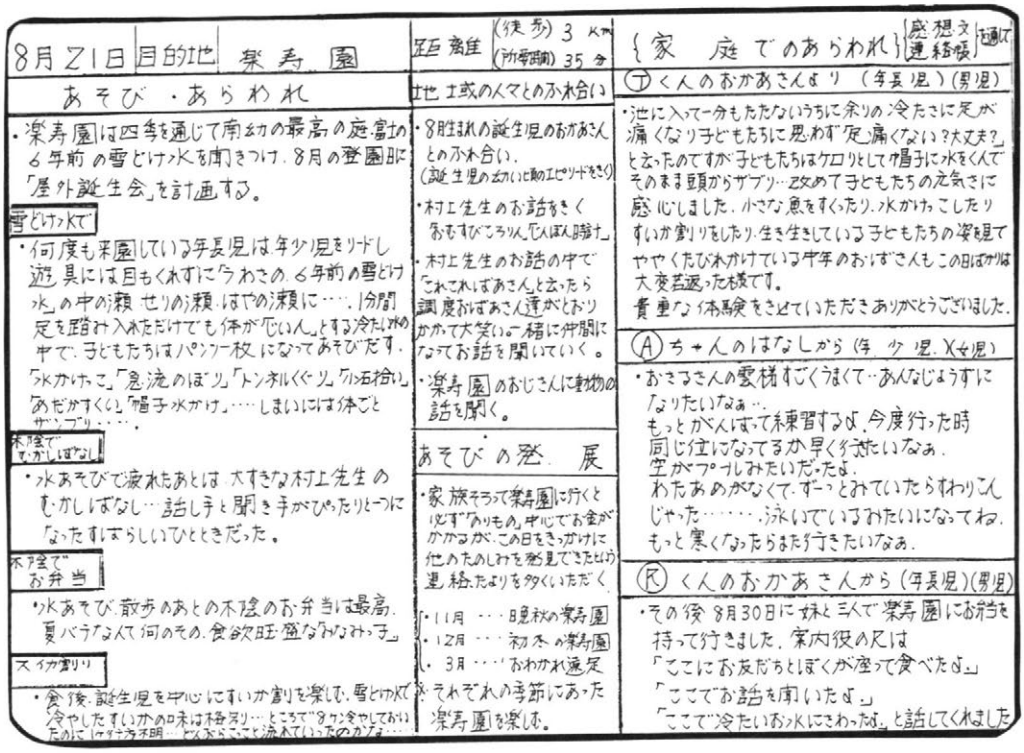
・もう何度目になるだろう.楽寿園.何回行っても楽しさは変わりません.夏.水あそびした池に行ったよ.その川は落ち葉の川だったよ。」そう楽寿園は色々な想い出がいっぱいある人ですよね.先日私たちも親子で楽寿園に行ってきた時.木の実をたくさん拾ってきました.きょうもその木の実を拾ってきて「おかあさん.おみやげ.」まだその木の実たくさんあったよ.」と大はしゃぎ.行き帰り歩いても疲れた様子はなく年少の時からの成果ですね.足も体も丈夫になって.そして心もたくましくなっていく様子がよーくわかります.行き帰りがんばって歩けたことで.本人も自信がつき明日への活力になる人です.なんてすてきな遠足でしょう.Uの笑顔から.今日も楽しい一日だったことに感謝…そして残された南幼の生活を思いっきり楽しんでほしいなあ.

T ちゃんのおかあさんより（年長児）（女児）

・落葉がきれいだったよ.」とオーー声…しいの実やどんぐりも拾ってきました.としよりの大ばあちゃんは子どもの頃をなつかしがってみんなでしいの実をいただきました。香ばしくておいしかったです.

往復歩いた割には家に帰っても疲れた様子もなくあそんでいました.明日の幼稚園の「おやつ」はしいの実をいって下さるそうですね.いつもありがとう.

【なつ】　6年前の富士山の雪どけ水を求めて


8月21日　目的地　楽寿園　距離　往路 3km　所要時間 35分

あそび・あらわれ

・楽寿園は四季を通じて南幼の最高の庭。富士の6年前の雪どけ水を聞きつけ、8月の登園日に「屋外誕生会」を計画する。

雪どけ水で

・何度も来園している年長児は年少児をリードし遊具には目もくれずに「うわさの6年前の雪どけ水」の中の瀬せりの瀬はやの瀬に……。1分間足を踏み入れただけでも体が「心いん」とする冷たい水の中で、子どもたちはパンツ一枚になってあそびだす。「水かけっこ」「急流のぼり」「トンネルくぐり」「小石拾い」「めだかすくい」「帽子水かけ」……しまいには体ごとザンブリ……。

木陰でむかしばなし

・水あそびで疲れたあとは、大すきな村上先生のむかしばなし…話し手と聞き手がぴったりとつのになったすばらしいひとときだった。

木陰でお弁当

・水あそび、散歩のあとの木陰のお弁当は最高。夏バテなし大食、何のその。食欲旺盛なみんなみっち。

スイカ割り

・食後、誕生児を中心にすいか割りを楽しむ。雪どけ水で冷やしたすいかの味は格別…ところで"8月冷やしておけ"ためにはどうやって明…どこからここまで流れていったのかな…

・8月生まれの誕生児のおかあさんとのふれあい。（誕生児のみいに関のエピソードをきく）

・村上先生のお話をきく。「おもすびころりん」「じいぼん」「時計」

・村上先生のお話の中で「これこればあさん」とかたら調度おばあさん達がとおりかかって大笑い。一緒に仲間になってお話を聞いていく。

・楽寿園のおじさんに動物のお話を聞く。

あそびの発展

・家族そろって楽寿園に行くと必ず「ありもの」中心でお金がかかるが、この日をきっかけに他のたのしみを発見できたとの連絡たよりを多くいただく。

・11月…晩秋の楽寿園
・12月…初冬の楽寿園
・3月…「おかわれ遠足」

※それぞれの季節にあった楽寿園を楽しむ。

{家庭でのあらわれ}（感想文 連絡帳）を通して

㋐くんのおかあさんより（年長児）（男児）

・池に入って一分もたたないうちに余りの冷たさに足が痛くなり子どもたちに思わず「足、痛くない？大丈夫？」と云ったのですが子どもたちはケロリとして帽子に水をくんでその真っ赤な頭からザブッ…改めて子どもたちの元気さに感心しました。小さな魚をすくったり、水かけっこしたりすいか割りをしたり、生き生きしている子どもたちの姿を見てややくたびれかけている中年のおばさんもこの日ばかりは大変若返った様です。
貴重な体験をさせていただきありがとうございました。

Ⓐちゃんのはなしから（年少児）（女児）

・おさるさんの愛情すごくうまくて…あんなじょうずになりたいなぁ…
もっとがんばって練習するよ。今度行った時同じ位になってるか早く行きたいなぁ。
空がプールみたいだったよ。
わたあめがなくて、ずっとみていたらすわりこんじゃった……。泳いでいるみたいになってね。
もっと寒くなったらまた行きたいなぁ。

Ⓚくんのおかあさんから（年長児）（男児）

・その後8月30日に妹と三人で楽寿園にお弁当を持って行きました。家内役の兄は
「ここにお友だちとぼくが座って食べたよ」
「ここでお話を聞いたよ」
「ここで冷たいお水にさわったよ」と話してくれました

〈幼稚園畑〉

園庭の地続きに小さな菜園，園から850メートルの距離に大きな菜園がある。

「幼稚園畑」と子ども達がよんでいる大きな菜園は，地域の方から無償でお借りしている。四季折々の野菜づくりの指導をして下さるのは，園児のおばあさんやおとうさんをリーダーに役員のおかあさまや地域の方がたである。特に，今年は苺，すいか，大根，ひょうたんにいたるまで大収穫で，夏まつり，秋まつりにも色を添えてくれた。子ども達は四季を通じて畑に通い収穫物と共にいろいろな発見をする。今年の卒園児のおみやげは，「南幼稚園らしく」春一番どりの「春キャベツ」を予定している。おやつも畑の収穫物が多い。

(3)　研究をとおして

①　子ども再発見

自然という偉大なる保育の場で子ども達は本物にふれ，本物の驚きを発見する。心をめいっぱい開き，素直な言動が生まれてくる。畑のもぐらの穴の奥はどのようにつながっているか夢中で掘り出したり，塀にへばりついている蜘蛛の行方をいつまでも見つめていたり，風に舞う落葉と一緒に1時間以上も戯れたり，野菜をとりに行った畑で野菜には目もくれずにじーっと虫の動きを見つめていたり……。自然とのふれあいは私達に予想以上の大きな収穫が

あり「子ども再発見」のよき場となり，テーマにある「自らあそびに取り組む生き生きとした子どもの姿」をみることができた。また，「生き生き」とは動的な姿を求めがちだった保育者の姿勢も反省させられた。

② 自然再発見・長泉再発見

畦道のおおいぬのふぐり，畑のつくしんぼう，田のせり，もち草，すみれ，たんぽぽ，れんげ草…四季折々の野の花が季節を告げてくれる長泉。この研究を通して小さな自然にも目を向けられるようになり，その大切さと必要性を感じた。

近くは友だちの家の庭から，遠くには駿河平，ビュフェ美術館，すすぎが原，桃沢など幼児なりに長泉のすばらしさを発見することができた。

③ 地域の人びととのふれあいの中で

核家族，少人数の中にあって生活が画一化している子ども達にとって，人びととのふれあいから得るものは大きい。「昔話をきかせてくれるおばあさん」「銀杏の話をしてくれるおばあさん」「せりやもち草のつみ方を教えてくれたおばあさん」「手品をみせてくれるくすのき学級のおじいさんやおばあさん」「藤の実の話をしてくれたおばあさん」「ビュフェの話をしてくれるおじいさん」「いつも幼稚園畑の世話をしてくれる鈴木さんのおばあちゃん」「役員のおばさん」 等々，いろいろな人びとのふれあいは子どもたちを一まわり大きく，豊かにしてくれた。特に，お年寄りとの出会いは子ども達の心の中に大切な宝物をプレゼントされたようである。

④ 豊かな感性

子ども達の発見や驚きに保育者が共感をもって接することにより，さらに興味や関心が深くなる。「共感ぶる」保育者の言動に子どもは敏感である。保育者の感性は子どもに影響する。感性豊かな子どもを育てるために，保育者自らの感性をみがかなければならないことを，そして，その一番の方法は「子どもに学ぶ」ことであるということを痛感した。

2 心通わすたより

● 父母と同じ高さになって

園だより「けやきの子」は，園のシンボルであるけやきにちなんで命名する。大空に向かってそびえたち，大地にしっかりと根をはっている大樹のように，たくましく豊かに育つ「みなみっ子」にと願って「けやきの子」を発行する。クラスだより「うさぎの子」「ひよこ」「たんぽぽ」「さくらだより」も各クラスの願いをこめて発行する。

(1) 研究方法

● 声がこだまする工夫

園からのいろいろなたよりを通知，指示事項というものでなくするために，形式や発令する時期にこだわらず，共によろこびあいたい子どもの姿や，おやと思われる子どもの言動などを折にふれて父母と交換しあうものにしていくように努めた。

園児の父母でない地域の人びとからのたよりや新聞の教育欄に見つけた記事より我が意を得たりと語りかけてくる父母もあり，園からのたよりが母親だけでなく家庭に地域に浸みている実感を味わいつつある。

(2) 実践例

① 夏休みに「つぶやきメモ」を依頼して（新聞省略）

② 「つぶやきメモ」より

◀年少男児K▶

雨降りの買物……ズック靴の中に水を平気で入れながら歩いている。しばらく我まんをしていたが，母「いい加減にしなさい！ 長ぐつじゃないんだから」 子「うん，今ね，水の検査をしているんだ。う―ん，この水はだめだ。ここはよし」 母「何が？」 子「ここは水の中に入っても毒じゃない。ママ，入ってもいいよ」

※あれっ，なんか変だな。おこっているのにおこられていると思っていないようだ。まあ，いいか…。

◀年少男児T▶

楽寿園から帰ってきて……子「お母さん，楽寿園の入口のキリンさん変ったよ」 母「どう変ったの？」 子「見ればわかるよ」 母「あっ，色を塗り替えたのね」 子「ちがうよ。ペンキ塗ったんだよ」 母「……」

※子どもってステキ！

◀年少女児Y▶

夏休みの間，私の実家のある広島で過ごし，帰る時のこと……祖母「もう帰るの？」 子「長泉に帰ると，おじいちゃんとおばあちゃんが悲しむし，広島にずうっといるとお父さんがかわいそうだし，どうしたらいいのかなあ…」

※両方の気持が考えられるようになったのだなあと，うれしく思った。

◀年少女児U▶

子「地獄はひどい所だから，夜も眠れないの。天国は静かに眠れるの。地獄は地面の下で血の海があるからおきてるの。天国は長い長い旅を続けると，ごはんを食べさせてくれるの。地獄は働き続けてもごはんは食べられないの。お腹がすいても食べられないの……」

※こわいほど真剣な表情…，私も勉強させられた。

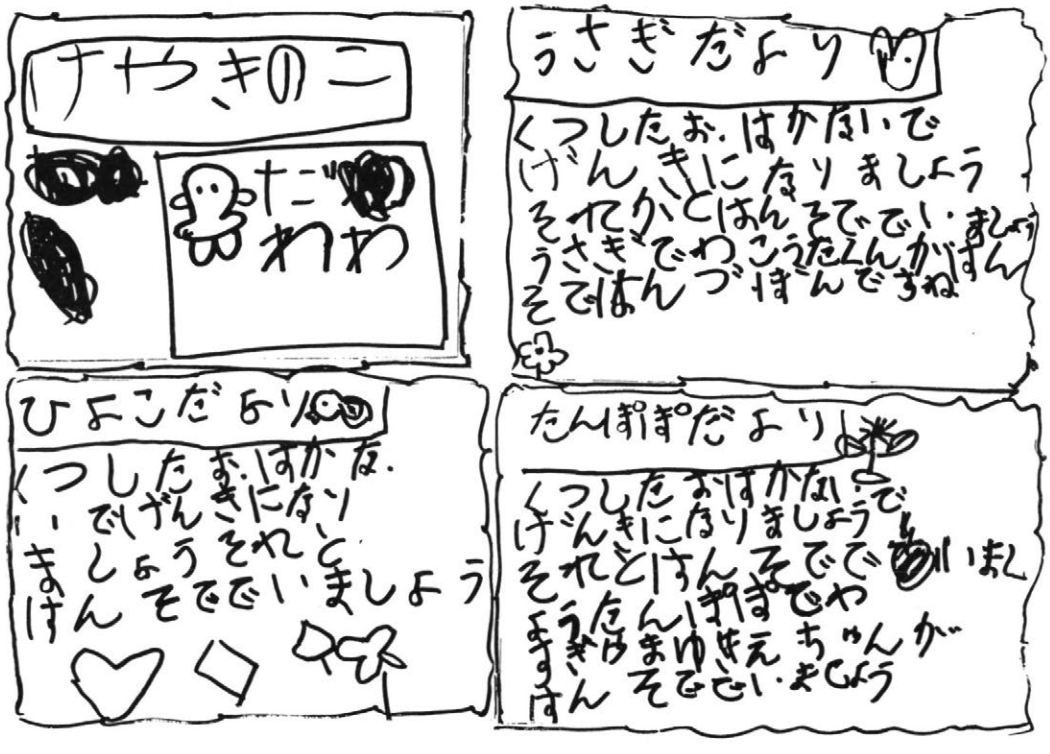
◀年長女児M▶

ひどい雨降り，そして降ったり止んだりの繰り返し。私が洗濯物を出したり入れたりしていると…　子「お母さんが大変だから，一度に全部こぼせえ―」（空に向かってどなっている）　母「だれに言っているの。そんな大きな声で」　子「雲の上でかみなりさんや雨の神様が雨降らせているんだって。バケツやジョーロを持って。たくさんでやるからバラバラになっちゃうのかね。先生がいて，『さあ，皆さん雨降らせましょう』って言ってくれれば，すぐ止むのにさ…」

※なるほど，空には先生はいないようだ。

③　子ども達からでた「おたよりごっこ」より

（「けやきの子」号外編）



(3)　研究をとおして

①　かつては「親も変容させなければ子は変らない」などと奢った考えをもっていたが，家庭との連携を密にし，心を開き合う中で，親自身のすばらしさを知ったのは大きな収穫である。とくに「感想文」「つぶやきメモ」「連絡帳」の中からは，子どものすばらしさを再確認するとともに，わが子を思う深い愛，みる目の確かさ……そして親自身の豊かな感性を知ることができた。

② 家庭でのあらわれ，親の見方を知る中で，一人一人の子どもが少しでも深く理解できたことはうれしい収穫である。「少しでも」と表現したのは，子どもを私達が知ったかぶりしないための戒である。子どもの奥はまだまだ深い。心の奥のやわらかい「ひだ」を解する保育者に一歩でも近づくよう努力していきたい。

3 地域ぐるみで楽しむ行事

● わが町のおらが幼稚園に

オルガン一つで神社の境内で開園以来30余年，今なお暖かく見守り続けて下さる地域の人びとが多い。園に対する期待も大きく，いつも念頭にあることを知り心強く思う。園児が卒園してからも，いろいろな面で協力してくれる。そこで61年度は「まつり」を主にし，秋まつりでは3日間の日程で延べ700名のお客さんをお迎えし，教育長さんをはじめ課の方がたも父母や子どもたちと交じって子どもたちが収穫し，子どもたちがつくったお好み焼きを召し上って下さった。展覧会場には遠く青森のおばあちゃんから届けられた変り種リンゴのコンクールがあり，大人も子どもも一緒になって頭をひねって投票する姿があり，今では運動会にしろお祭りにしろ園の行事が地域の話題の一つになっているのか，意外な出し物が誰からも届いて花を添えてくれるのである。

(1) 研究方法

① 町の先生，お母さん先生

子ども達も園に閉じこめないで町に出て行くし，地域の人びとも気軽に立ち寄り，「子どものため」の情報を提出してくれたり，楽しんだりできるように「たより」や「PTA会員」を通して声をかけるとともに，具体的に「たこ作り」「町高齢者学級のマジックショー」などを試みている。

② 地域ぐるみで学ぶ「かしこいかあさん」をめざして

未入園児，卒園児の親なども地域ぐるみで学べる家庭教育学級を運営し，楽しみながら「子ども理解」のための学習ができる工夫をする。また，小学校・中学校と進学しても，いつまでも「みなみっ子」を暖かく見守ってくれる人間関係ができたらと願い，運動会やお祭りなどに心よく迎え入れ，一緒に楽しめる場を作っている。

(2) 実践例

〈秋まつりの例〉

――手づくりの味「南幼まつり」――

●友だちと力を合わせて，「南幼まつり」を計画したり，すすめたりする。

○自然や人びととのふれあいを大切にする。

○いろいろな素材にふれながら，「つくる」ことのよろこびを体験する。

○友だちとのふれあいの中で，「表現する」ことのよろこびを体験する。

(3) 研究をとおして

① 3日間の延べ参加者は小学生も含めて700余名。正に「地域ぐるみのまつり」そのものであった。

② 保育者，子ども達の手づくりの店に加えて，「おにぎりとみそ汁」「ミニバザー」「おかしやさん」「みかんのつかみどり」「ボールすくい」など，全てPTA，有志の方がた，地域の方がたの積極的参加による店がだされた。またおまつりだからとお赤飯のおにぎりを作ってくれた在園児のおばあちゃん，あげたてのさつま芋の天ぷらを全園児にともってきてくれた卒園児のお母さん……地域の人びとに深く愛されていることを再確認した「南幼まつり」であった。

4．今後の課題

今，大学から幼稚園にいたるまで教育問題が山積し，教育の危機とまで言われている。幼児の教育にかぎってみても，親や社会のひずんだ要求要請に流されて，みかけのよい子を押しつけ，形式の上でやっているらしい保育が一般化している。

子どもや親の考えを管理する園ではなく，親と教師が子どもの将来について共同の責任を負うものとして共に学び，子どもと共に育つものであるという考えのもとで運営してきた。

主題にかかげた子どもらしい子どもを目指して保育しようとすると，どうしても大きな自然現実の社会に子どもを押しだし実体験をさせてやりたい。そうしたとき，はたと突きあたるものはひずんだ教育観，子ども理解の不足，安全問題，経済的事情等である。今日，やっと父母と地域に南幼稚園の考えるところを理解していただき，協力を得られる態勢を作り得たが，そうして育った子が次の社会でも認められその基盤の上にたって成長してくれることを願う幼小関連の問題，こうした保育観による運営の中での子ども一人一人の成長の把握など，今後に残る課題は大きい。

7. 共同研究

■研究テーマ■

3，4歳児混合クラスによるたてわり保育を実践して

静岡県静岡市静岡若葉幼稚園
代表　若林智子

1．主題設定の理由

8年前，急激な園児減少により年齢別のクラス編成が思うようにいかず，3，4歳児混合にしたクラス編成を試みた。実施にあたり，21名の3歳持ち上がり児父兄の一部より不賛成の意見があった。理由は4歳児の保育内容が低下することを心配したのである。踏み切るまでに，たてわり形態の幼稚園を見学したり，コーナー保育を行っている園の研究発表を聞いたり，自由保育を行っている園の公開保育を見た。また，当園の保育者に保育園経験者がいたことも参考になり，たてわりクラスを作っても，むしろ，発達に個人差のある幼児だけに，それぞれの力で受けとめていくことのよさを思ったのである。

一般にたてわり保育といわれる手つなぎ遠足とか，給食を一緒にするとか，入園時に年長児が新入園児の面倒をみるといった活動は，たてわり活動という意識なしに今までもごく自然に行っていたので，クラスが常時たてわり構成の中で保育をすすめていくことにより，子どもたちの発達を促したいと思った。実践を重ねていくうちに，たてわり保育が子ども同士，相互にかかわりあいながら人間関係を豊かにしたり，遊びを活発にしたり，同年齢クラスには得られないような経験もできることから，その必要性を感じているのである。

(園児数132名，教職員数――理事長，園長，担任4名，級外1名，事務員1名，運転手1名，調理員2名)

2．研究のねらい

(1)　どのようにしたら一人ひとりのよりよい成長を助長することができるか。

(2)　より多くのかかわりを持つことは子どもたちにどのような影響を与えるか。

3．研究の内容と方法

(1) たてわり保育の実践から3，4歳児がどのようにかかわっているか調べる。

(2) 自由遊びにおける遊びの工夫，遊びの実態から伝承遊びをとり上げる。

(3) 3，4，5歳児のたてわりの遊びをカリキュラムの中に位置づける。

(4) 生活習慣について考える。

(5) 幼稚園と家庭とのつながりについて考える。

(1) たてわり保育実践例

●昭和61年10月30日（木）　3歳児　9名　4歳児　21名

〔主活動〕　お店屋ごっこの品物作り

〔ねらい〕　いろいろな材料を使って，おもちゃ作りを楽しむ。

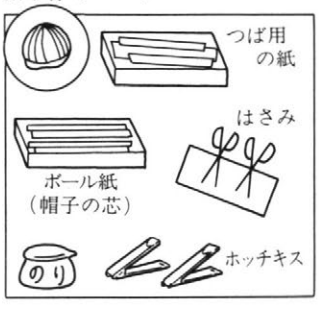
〔設定理由〕 秋，子どもたちは近くの公園でドングリをたくさん拾い集めてきた。ドングリゴマを作ったり，おみこし作りに利用したり，また落ち葉を集めてはままごと遊びや押し絵などを楽しんだ。季節の移り変わりに興味と関心を持たせ，秋の自然物を利用して遊べるおもちゃを作ることから，イメージをさらに広げて他の身近な材料でも造形活動を楽しむ。興味のある子が品物を作ったり，並べたり，飾ったりしていくうちにお店屋さんごっこへと発展させていった。

時間	幼児の活動	指導上の留意点	幼児の現れ
8：30 9：30 10：00	○登園する。 ○朝の挨拶をする。 ○視診を受ける。 ○持ち物は所定の場所に置く。 ○出席ブックにシールを貼る。 ○保育者と好きな遊びをする。 ○遊んだ後はかたづける。 ○集合し体操，マラソンをする。 ○うがい，手洗い，排泄をし，入室する。 ○保育者のまわりに集まってお話を聞く。 ○作りたいおもちゃのコーナー	○朝の挨拶をし，子どもたちを笑顔で迎える。 ○子どもの健康面を把握する。 ○好きな遊びに誘って安定を図る。 ○身のまわりのことは進んでしているか見守り，できない子には促したり，励ましたりする。 ○あらかじめ作っておいた品物を手にとって自由に扱えるように机の上に置	〈首飾りコーナー〉 「早くやりたいな」と子どもたちは興味を持つ。 「うわぁー，きれい」「かわいい」と手でさわったり，首にかけたりする。 U子（4歳）「丸いペンダントをぶらさげるといいよ」 M子（4歳）「そこにかわいいお花をかきたいな」 「ピカピカするのもつけたいよ」

に座って品物を作る。

首飾りコーナー

帽子作りコーナー



時計作りコーナー

く。

○材料は使いやすいようにコーナーに用意する。

○どんな工夫をしたらもっとよい品物ができ上がるか考えさせる。

○色の組み合わせによって感じが違うことに気づかせる。

○いくつ作ってもよいことを知らせる。

○別のものを作ってみたいときは，コーナーのお友達に断ってから仲間に入れてもらうようにする。

N子（4歳）　「私，ポケットにビーズが入っているからこれつける」

A子（4歳）　「私，明日おうちから持ってきてあげる」

先にストローで穴通しを始めた3歳児，おしゃべりもせず夢中になっている。

一つできあがると，「わぁー，できた。きれいでしょ」「もう一つ作ってもいい」

M子（3歳）　「私，結べない」

U子（4歳）　「かしてごらん。やってあげる」

〈帽子作りコーナー〉

T男（4歳）　「もっと，いっぱい帽子を作ろうよ」と色画用紙をもってくる。

A子（4歳）　「あっ，あいちゃんの帽子かわいい」「かぶってごらん」「小さくてピンクでかわいい」

3歳のあいちゃんはとても喜んでいる。

〈時計作りコーナー〉

S男（4歳）　「みんな僕にかして。時計の針をかくから」

そういって 1,2,3,4，……とかき入れ，針も3時や5時などいろいろであった。

「Mちゃん，Aちゃん，Y君

			(3歳)はベルトにシールをいっぱい貼って」と4歳S君命令。グループはうまくまとまっていた。
11：20	○できあがった作品を展示する。 ○あとかたづけをする。	○自分のまわりをきれいにしましょうと，紙くずに気づかせる。 ○がんばって作ったのでたくさんの品物ができたことをほめる。	作品を展示し，楽しんでいた。

〔感想〕

子どもたちの考えや工夫をとり上げていくことにより興味が持続し，楽しい作品ができ上がった。わからないところ，できないところを子ども同士で補いグループの作業が進行していた。保育者がやってしまえば簡単なことだが，子どもたちの中から問題を解決させることにより主体性を持たせたい。

●ある日の当番活動から　　昭和61年11月　　3歳児　9名　　4歳児　21名

〔ねらい〕　責任を持って当番の活動をする

〔活動〕　当番活動

〔時間〕　11時30分より11時50分

〔おもな活動〕　給食準備

○お当番は手洗い後エプロンと帽子をつける。ボタンがはめにくいとお当番同士，助けあっている。

○テーブルをぬれた雑巾で拭く。

○テーブルを拭いた子からピアノの横に並ぶ。

M子（4歳）　「A子（3歳）ちゃんまだきれいに拭けていないよ。ちゃんとしたら…」

4歳児が3歳児にテーブルの拭き方を教えている。

M子（4歳）　「それからね，帽子にはねぇ，髪の毛を全部入れるんだよ。やってあげるよ」

○保育者の後について給食室へ給食を取りに行く。

○順序よく並び，お盆，食器，食缶をお部屋へ運ぶ。

4歳児が指示し，テーブルの上にきれいに並べて置き，食器を取り出しやすいように整えてあげる。

○全部持っていったところでお盆から配り始め，グループの人数を数えて持っていく。
D男（4歳）　「B子（3歳）ちゃん，5だよ。5個」
B子（3歳）　「……」
D男（4歳）　「ほら，1,2,3,4,5,」
テーブルをたたき，いる子の人数を数える。
○食器を配り終えたら牛乳をコップに注ぐ。
○牛乳パックを持って皆が同じ量になるように注ぐ。↗

F子（4歳）　「B子ちゃん入れられないの？」席を立って手伝おうとする。
B子（3歳）　「……」
M子（4歳）　「いいの。自分で入れられるの」
M子がB子に注ぎ方を教えている。
○エプロン，帽子を当番はたたむ。
M子とC子（3歳）が再度きれいにたたみ直している。
○ごあいさつをして給食をいただく。

〔反省・考察〕
○3歳児が4歳児を見ながら，食器の配り方やお盆の枚数，初歩的なエプロンのつけ方，たたみ方など知らず知らず毎日の繰り返しで覚えたようだ。
○牛乳をこぼしたりすると，すぐ雑巾を持ってかけ寄ったりするやさしさが4歳児にみられる。
○数を数えグループの人数分だけの物を用意することができるのは，大きなメリットだと思う。

(2) 自由遊びにおける遊びの考察　――伝承遊びをとり上げる――

素朴で豊かな内容を持った昔からの遊びを，子どもたちは喜び，あきずに続ける。これらは子どもたちが主体となるものが多く，場所，道具などを選ばないという手軽さが子どもたちを引きつけるのだと思う。自由遊び時に保育者が遊びのきっかけをつくるのも，この伝承遊びを通して発展することが多い。そこには自然に異年齢の子どもが集まり遊びを活発にしている。特に新学期まもない頃は，まだ遊びのルールも簡単なものとなりがちであるが，5歳児がよい手本となり3，4歳児とかかわりあいながら遊びを理解させ仲よしの集団作りをしている。

〔伝承遊び実践例〕
●昭和62年1月26日（月）　自由遊びの中から〈長なわとび〉　3，4，5歳児

遊びの内容	教師のかかわり	子どもの活動・様子
たこさんたこさん	○長なわとびを用意して外に出る。子どもたちに声をかけ，やりたい子を集める。 ○「R君もやろう。入って	○教師をみつけて「やろう！やろう！」と2，3人集まる。また友達に声をかけ誘いあう。 ○列を作って，順番を決める。 ○「入れて」と声をかけ，列の仲間に入る→5歳児 ○列に加わろうとしないが，友達のやっているのを

	いいよ」と誘う。	みつめている3歳R君。 ○「やればいいのにね。私も練習したら上手になったよね。先生！」と4歳S子が言う。
	○「ほら，Nちゃん上手だよ。みてごらん」と5歳児をお手本にする。	○5歳N子は得意気にとぶ。 ○他の子どもたちは，N子のとび方をよくみている。 ○仲間に入ろうと列に並ばずに，途中割り込もうとする4歳Y君。
	○「Y君も並んでね」	○子どもたちが，Y君に文句を言う。 ○Y君も，仕方なく列の最後につく。

〔反省〕

自由遊びに積極的に伝承遊びをとり入れている今，子どもたちの遊びにも変化が出てきたように思われる。

(3) 3，4，5歳児のたてわりの遊びをカリキュラムの中に位置づける

異年齢の子どもたちの生活体験を多くさせることによって，それぞれの持っている能力を発揮させ，どのように集団の中で生かしていくか，活動場面を通して思考させたり認識させたい。また，年齢差のある子どもたちの活動のため，全員が喜んで参加できるようリズム遊びやゲーム的な遊び等の集団遊びを多くとり入れてみた。

●昭和61年度　たてわり遊び年間計画　　月2回　時間9：30～10：30

月	日	主題及び活動内容	ねらい	子どもの現れ
61年4月	14日(月)	●顔合わせ	●自分のクラスの先生や友達だけでなく年長や他クラスの先生や友達の顔も覚える	●年長と向かい合った時は少し照れくさそう。年長児も，まだ，らしさが出ていない。 ●握手をして名前を言うが入園したばかりなので親しみにくい。
	21日(月)	●リズム遊び てくてく歩いてきて なべなべ底ぬけ	●自分のまわりの友達2人と手を組み2人組でできるリズム遊びを行う。	●並び順が前後という関係で2人組を作っている。 ●年長児と組んだ子は遊びを比較的早く理解していた。 ●持ち上がり児の落ち着いた動作が見受けられた。

5月	12日(月)	●フォークダンス 線路は続くよどこまでも	●曲に合わせて楽しく踊る。	●小さい子が肩から手を離すと年長はまた自分の肩にのせるようにしたり遅れないように誘導している。 ●前の友達につかまっているのに必死という子もいる。
	26日(月)	●リズム遊び 音楽に合わせて歩いたりスキップしたり走ったりして遊ぶ。	●年長児の動きを模倣しリズミカルに体を動かす。	●年少児は歩いたり走ったりはできても，スキップのできる子は少ない。 ●年中児は見よう見まねでがんばる子，うまくできる子，きまった足だけあげる子等さまざま。 ●見られていることを意識し，年長児は得意になってスキップしていた。
6月	9日(月)	●帽子とり	●仲間意識を持たせ遊びを楽しくする。	●年長児は男女に分かれて楽しそうだった。 ●顔なじみの子や降園時のグループの仲間に声援を送っている子がいた。 ●年中・年少クラスでは圧倒的に年中児が帽子をとる数が多かった。
	23日(月)	●フォークダンス 線路は続くよどこまでも	●フォークダンスにジャンケンを加え，どんどん長くなっていく列におもしろさがわかり皆で遊ぶ楽しさを味わう。	●「ジャンケンポン」や「ラララララー♪♬」と歌う声が次第に大きくなる。 ●長くなっていく列を喜ぶ。 ●全員が振り付けを覚えたので活動が活発となる。
7月	14日(月)	●リズム遊び 人数ゲーム 音楽に合わせて歩き「○人」のかけ声でグループにま	●ゲーム遊びをしながら，数に対する興味を持たせる。 ●誰とでも遊ぶことができる。	●3人以上になると5歳児が積極的に遊びをリードする。 ●5歳児の「早く，早く」「おいで」の誘いに年少児も夢中になって遊びにとけこんでいる。

		とまる。		
9月	8日(月)	●鬼遊び ひっこし鬼	●遊びのルールを理解して，楽しく鬼遊びをする。 ●鬼につかまらないように素早く陣地に逃げる。	●鬼は保育者がなったり，5歳児がなったが，年長児の鬼は体当りである。 ●鬼につかまらないよう遠まわりしたりするなど工夫が見られた。
	22日(月)	●表現遊び いろいろな動物になる。 ●ロンドン橋	●動物になってのびのびと表現する。 ●歌に合わせて体を動かす。	●つかまえられないようにするりとぬけた子，つかまえてほしく動きを遅くする子など簡単な曲の繰り返しなので，曲の終わりに対する子どもたちの動きがおもしろい。
10月	13日(月)	●リズム遊び 人数ゲーム	●遊びのおもしろさがわかり，指示された行動がいち早くとれるようにする。	●前回に比べ小さな子もグループに入ろうと努力している姿が見られた。 ●グループになるとさっと座り，まわりの状況を見るほどとなり，年齢の区別がつきにくくなった。
	27日(月)	●小鳥さんのひっこし 3人1組となり2人が手をつなぎ家を作る。もう1人が家の中に入り，合図で出たり入ったりする。	●合図の「音」や「言葉」を知り家をいち早く見つける。 ●たてわりの友達関係を深める。	●5歳児は小鳥になった子を空いている家に大きな声で呼びよせる。 ●名前を知っている子が多くなり，遊びを通して親密感を増している。
11月	10日(月)	●ボール遊び ドッジボール	●ドッジボールのルールがわかる。 ●ボールをよくみて逃げる。	●ボールが来ることがわかっても思うように逃げられず戸惑っている年少児。 ●年長児のボールはとてもスピードがありそのスピードに年中・年少は少し気おくれしているようだ。
		●フォークダンス	●列を作ってジェンカを	●簡単な踊り方なので全員がすぐリ

12月	8日(月)	「ジェンカ」	楽しむ。 ●体を動かすと温かくなることがわかる。	ズムに乗ることができた。ゆっくりから次第に早いテンポにと，子どもたちも大喜びだった。
	22日(月)	●模倣遊び 2人1組となる。 8呼間歩き，残り8呼間でいろいろなポーズをとる。	●相手の動きをよく見，まねをする。 ●異年齢の友達と組む。	●子どもによっては堂々とポーズをとっていたが，照れながらやっている子がほとんどだった。 ●年長児と組んでいた子の方が早く要領をマスターしていた。
62年1月	12日(月)	●フォークダンス 「ジェンカ」	●皆でやると楽しいことがわかる。	●同じ形の中に大勢入ってしまい，話しあう姿が見られた。 「7人いるよ」「○○ちゃん出てよ」「いや！」お互いに譲らず立っている。 T「みんな入っているわけにいかないね。どうしたらいいかな」 「ジャンケンすればいいよ」 時間がかかったジャンケンだが，2人納得して外に出た。
	26日(月)	●形遊び ○△□と類似した形を園庭にかく。 指示した形を見つけたり，2人～5人までのグループになったりする。	●○△□の弁別ができる。 ●決められた人数で，○△□に素早く入ることができる。	
2月 3月	9日(月) 23日(月) 9日(月)	●コーナー遊び 折紙遊び 紙ひこうきを作る。 体育あそび ケンケンパ 輪なげ 絵本づくり 自分の本	●自分の好きな活動を選ぶ。 ●誰とでも仲よく協力して遊ぶことができる。 ●困っている友達に親切にする。	●年長児の絵本作りに興味を示し，ストーリー性のあるものを作り出す子がいた。 ●紙ひこうきばかりでなく，知っている折り方を友達に一生懸命教えている子。 ●園庭で飛ばしっこを楽しむ。自分で作ったもので遊ぶことは楽しいようだ。 ●毎回外での活動を選ぶ子は多い。特に年長児は活動量の多いものを好む。 ●3歳児が5歳児の横に座ったりしている様子は和やかである。

〔たてわりの遊びを通して得たもの〕

○戸惑っている年少児に年長児が声をかけたり手を差しのべたり，楽しい雰囲気を作っている。

○年長児が年少児に対して遊びを誘導することにより，遊びが活発となり興味が持続し，年少児は遊んでいるうちにルールを理解しているようだ。

○遊びの中で友だち同士がかかわりを持つようになり，親しみをこめて話しかけたり，年少児が素直に従ったりしている。

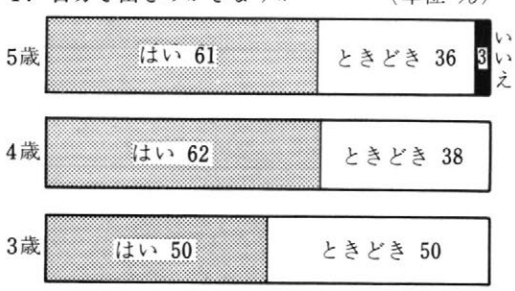
○普段，年長クラスで控え目な子も，小さいクラスと一緒になることにより，違った態度で接している姿を見ることがある。年長らしさを自覚するとともに，「教えてあげたい。面倒をみてあげたい。いたわってあげたい」そんな気持が自然に育ってくるようだ。

(4)　生活習慣について

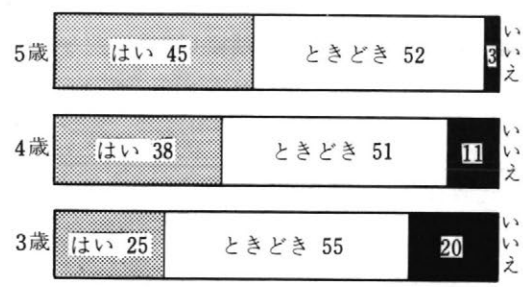
たてわり保育をしていく中で，私どもが子どもの活動について気づいたことがいくつかある。それは，幼児がまわりの仲間の動きをよく見ていることであった。日常の生活習慣をとってみても，朝の挨拶から始まりお部屋に入ると，通園服から活動着に着替える，衣類をたたむ，所持品を決められた場所に置く，繰り返し繰り返し行う。これらの動作が自然に仲間の中で育てられ，習慣化されていくことを思うと，幼児期は習慣形成の大切な時期であることがわかる。下記の表は，園生活の中でも指導してきたものであるが，家庭ではどのように身についているか調べてみた。

生活習慣調べ　　昭和62年1月31日現在

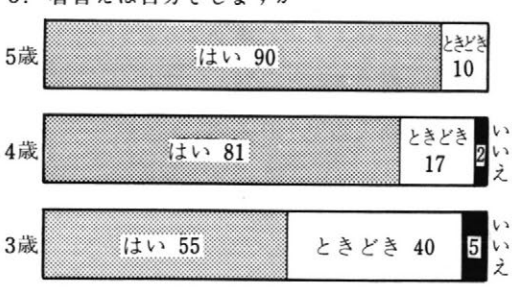
1．自分で歯をみがきますか　（単位 %）



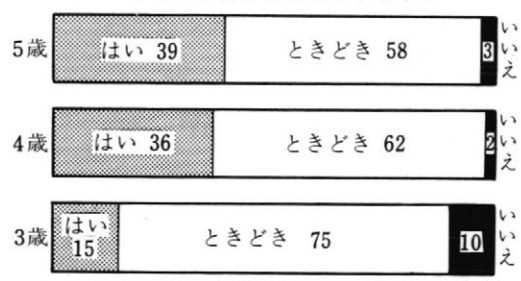
2．自分で顔を洗いますか



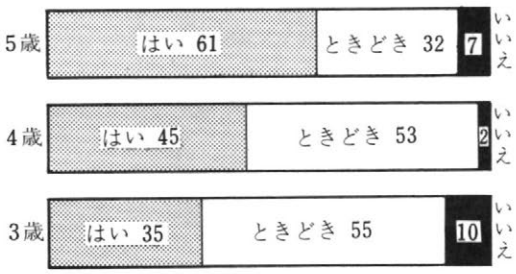
3．着替えは自分でしますか



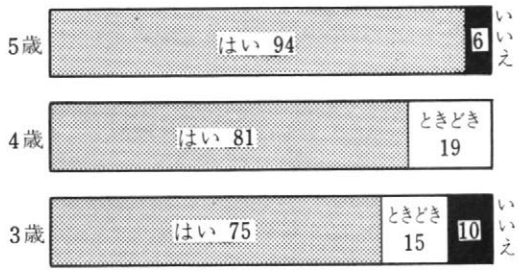
4．遊んだあとの片付けは自分でしますか



5．日常の挨拶ができますか

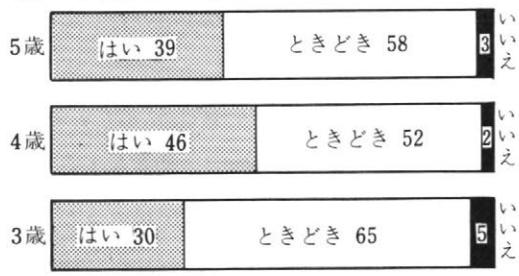


6．大便の自立



7．「はい」と返事が言えますか

8．「ごめんなさい」が言えますか



生活習慣を身につけることは，幼児の自立と大変関係がある。

3歳児にボタンをはめてやろうと，保育者が手をかそうとすると，「自分でできる」といって断られたことがある。反対に4歳児が手助けしてもらい，何くわぬ顔をしている。

集団生活では，一人でやれるようなことも家庭において親への甘えもあったり，親の行き届き過ぎが幼児の自立を遅らせたり，習慣化されない要因となっていることもあると思う。園と親，家庭をも含めた形で連絡しあう必要を感じる。

(5) 幼稚園と家庭・地域社会とのつながり

幼児の健やかな成長を願い家庭・地域との連携を密にするとともに，地域に開かれた場として近隣社会との積極的なつながりやコミュニケーションの必要を感じる。園もまた，地域の中にあり，地域の人々の生活が子どもたちの発達に少なからず影響を与えていると思う。園や幼児を理解してもらうために家庭や地域への活動として，次のようなことを実践している。

5月――講演会，保育参観　　6月――バザー

9月――敬老参観会，幼稚園説明会　　10月――プレイデー，講演会

11月――発表会　　12月――餅つき

2月――音楽祭参加，作品展　　3月――新入園児1日入園

(その他)

- 役員会，父母懇談会を開き，子どもの成長を話し合う。
- 園だよりを工夫し，両親や地域への働きかけをする。

5．まとめと今後の課題

3，4歳児たてわり保育の父母参観のときのことである。1枚の折紙を短冊に切り，輪つなぎを作る活動で，4歳児1月生まれの子どもの母親が「私の子どもは，何事をするにもおっとりで，早くも落ちこぼれかと思ったが，3歳児に比べると，はさみも何とか使えるし，ひとりで作品を仕上げている。ほっとした」という話を聞いた。同年齢のクラスでは，このような見方，考え方はできにくく，3歳児という比較対象者を目の前にして，余裕を持たれたようだった。それは母親が子どもの発達を正しく見つめる機会に恵まれたといえよう。同年齢が同レベルとはいえない幼児期の個人差のある発達に，たてわりが見直される点があると思う。核家族，少子化，そして車社会の現代，子どもをとりまく環境は閉鎖的で単独行動をとりやすい。遊び場は狭められ，限られた遊び場でさえ，子どもたちが遊び戯れている光景をあまり見かけない。まして，地域での異年齢同士の交友関係も少なく遊びの伝承もないように思える。園での自由遊びにおける伝承遊びが子どもたちに好まれるのも仲間同士ふれ合うことのよさや，そこから生まれる温かい交流や人間性が幼児の成長過程に欠くことのできないものであるからであろう。

異年齢の活動や人とのかかわりを多く経験させることにより，一人ひとりのよりよい成長を願っているのであるが，よこわりを否定しているものではない。年齢にふさわしい活動をするときはよこわりの形態をとっている。今後，さらに検討し，たてのよさとよこのよさを生かしながら，望ましい形に持っていきたいと思う。

8. 共同研究

■研究テーマ■

主体的に活動し，自ら伸びようとする幼児をめざして ——幼稚園と家庭との連携を通して——

岡山県岡山市立芥子山幼稚園
代表　井山房子

1．主題設定の理由

幼児が主体者の幼稚園生活の中で幼児の自ら伸びようとする力をさらに育て，はぐくんでいきたいと思う。それには，幼児が自分からやってみようという気持を起こして活動し，満足するまで経験し，自分の力を伸ばしながら自信をもって生活できるように，ひとりひとりに応じた指導をしていくことが必要だと考えた。

しかし，考えていることを実践に生かすことは難しく，教師中心の指導になったり，幼児の気持を尊重するあまり放任になったりという状態もあった。また，幼稚園で満足のいく指導ができたとしても，家庭で過ごす時間が長い幼児にとって，保護者と教師が同じ気持で幼児に接していかなければ，主体的に活動し自ら伸びようとする幼児を育てていくことはできない。保護者と教師が密な連携のもとに，考えを出し合い，幼児の内面を理解し，気持を合わせて指導ができるようにしたいと考えた。

2．研究のねらい

遊びを中心に総合的な指導をしていく中で，幼児ひとりひとりに応じた指導を進め，自ら伸びようとする力を育てるには，幼稚園と家庭がどのような内容をどのような方法で連携をとり合い，どう幼児に接していけばよいかを探り，教師の指導法と保護者の意識を高める具体的な方法について考察を加える。

3．研究の内容と方法

研究を進めていくうえで，次のことを共通理解して指導にあたった。

(1) 幼児ひとりひとりの発達の過程と内面理解

幼児は育った環境，生活経験の違いから発達の様子はさまざまである。従って，個に応じた指導をしていくためには，幼児ひとりひとりの育ちを確かめるとともに内面を理解することが大切である。

幼児が自分からしようとする意欲や，自ら伸びようとする力を育てるてがかりを得るため，アンケート調査，懇談，家庭訪問，ふれあいノートの利用等工夫をする。また，保護者と教師の信頼関係が深まるよう配慮し，幼児についてお互いの気持を素直にありのまま話し合い，幼児の気持を十分受け止めて指導にあたる。

(2) 実践の見直しと指導内容，指導方法の工夫

教師主導型の保育を反省し，教師がさせる活動，内容にならないよう教育課程，指導計画を検討し，指導方法にも工夫をこらし，幼児ひとりひとりの意欲が育つようにする。

そして，確かな指導方針をもって実践し，幼児の成長を促し，保護者の信頼が得られるように努める。

実践を進めるにあたっては，次のことを特に留意する。

① 幼児ひとりひとりの発達課題を理解し，幼児の要求を感じとり，何を認め励ますかを把握し，チャンスを逃さず言葉をかけてやる。

② 自発活動を受け入れ，その中での幼児の育ちを見てとり，認め，次への活動のステップになるよう見通しをもった指導ができるように活動内容の選択や教材研究をしていく。そして，幼児が自分から取り組み，試したり工夫したりして楽しめる場と時間を確保する。

③ 教師は，幼児と心がつながりいつも一緒にいて欲しい魅力ある教師であること。そして，保護者とともに，幼児を信頼しゆとりをもって見守り，よき相手のひとりとしてともに楽しみ，共感し，励ましながら指導にあたるよう努める。

④ 幼児の変容しつつある一面を保護者が感じとると，教師への信頼，協力の態度もかわりやすく，ひいては保護者の変容へとつながる。幼児のささやかな成長をとらえ，変容のきざしが見えた時を逃さず保護者と連絡し合うようにする。

(3) 年間指導計画

幼児，保護者，教師がお互いに理解し合い，心を通わせ合って幼児を育てていけるように，2年間を見通した年間指導計画（付表1，2参照）に基づき，要点をおさえた家庭連携の内容，方法を教職員間で共通理解する。そして，それぞれの時期に，最も大切なことを確実におさえ，家庭に指導が徹底するようにする。

(4) 幼稚園，家庭，地域社会の連携

PTAの組織化，活動内容の充実，地域との交流にも努め，保護者や地域の人たちに親しまれ

る幼稚園となるようにする。

幼稚園をとりまく家庭・地域との連携

4．実践事例

(1) 情緒に障害をもつA児の母親への働きかけ

A児は1年間保育園に通い，4歳児入園をした。明るく子どもらしいが情緒に障害をもち，視線は合わず，会話も少なくおうむ返しの状態であった。父親はA児のことは母親任せで一緒に遊ぶこともせず，母親はひとりでA児を育てようと溺愛した。入園する時点で祖父母との同居となったが，祖父母はA児に愛情を見せず，母親もA児をかばいひとりで育てようとするために，家族と気持が通じ合わず母親の態度がA児の成長に影響しているのではないかと思った。

○3月――入園前に親子と教師で教育相談に行ったり，A児の保育園での様子を参観したりしてありのままの姿を見つめ合い，幼稚園の受け入れ態勢を園長より話し，母親としての考え方，姿勢などについて考える場を与えたり，A児への接し方を知らせていったりした。

○4月――入園後は，母親の気持が安定するように，登降園時等を利用して，A児の様子や教師の指導の気持を話していった。

「きょうは，『先生来たよ，おはよう』と自分から言えました。私は目を見て『おはよう』と答えました。視線は全く合わなかったのですが，少しずつこちらの言葉を意識し，視線も合うようになるのではないでしょうか」と，教師の気持を話した。母親は「そうですか，言えましたか。私も目を見て話すようにしてみます」と，うれしそうであった。

○４月末――家庭訪問でA児の生活の様子や母親の気持を聞き，母親や家族がA児にどのように接していけばよいか働きかけていった。母親だけが愛情をもって接していくのではなく，家族全員で考えたり相談をしたりして，家族みんなが，同じ気持でA児に接していくことが大切であることを伝えた。幼稚園ではどの教師も同じ考えでA児を見守り，様子を担任に伝えるようにしている。担任だけの一方的な見方ではなく，９名の教職員により，多面的にA児を見ることができ，ありがたいと思っていることを話した。それに対して母親は，祖父母に助けてもらわなくてもできるという気持が強かったために，家庭内に温かさがなかったと，自分を反省し，家族みんなに協力してもらうようにしてみると話した。その後，母親も変化し，園に対しても，何か役立たせて欲しいと，役員選出の時には自主的に申し出るようになった。

○７月――１学期終業式当日には，園長より母親の変容をほめ励まし，養育態度についてアドバイスをするとともに，夏休み中A児の生活記録をこまやかにとることを促した。母親は熱心に記録をとり，それをもとに母親と教師が話し合うことで，A児の発達の姿を理解することができ，A児の指導の手がかりとなった。

○９月末――運動会を控えて，A児はみんなと一緒にはできないだろうと，母親が自分の不安な気持を話してくれるようになった。教師はその気持を受け止めて，A児の様子，教師の指導の気持を話し，母親が安心して，教師と同じ見方でA児を見守っていくようにした。

「先生や友達と一緒にしようね」と，誘ったり手をとったりして指導している。A児も誘ってやれば少しずつできだした。しかし，みんなと同じことが同じようにできるという見方ではなく，A児がみんなと一緒にしようという気持をどれだけもってきたかを見てやることを話していった。

○10月12日――運動会当日，A児は笑顔で走ったり踊ったりした。その姿を家族全員が目をうるませて見ていた。祖父母も「あの子がこんなにみんなと一緒にでき，本当にうれしいです」と，心から喜んでいる様子であった。

【考察】

○母親ひとりの愛情でA児を育てようとするのではなく，家族みんなに支えられ，気持を合わせて，A児に接していくように働きかけることで，母親が自分を反省し心を開くことができた。その気持がA児や家族，幼稚園に対する考え方，接し方の変容につながってきた。

○何度も園長，担任と話し合うことで，母親は自分の方から悩みをうちあけ，助言を求めたり，その助言を受け入れ実行したりするようになり，その結果A児の情緒が安定してきた。

○A児の実態を理解し，A児が母親，教師，友達等の存在に気づくように，スキンシップをしたり，目を見て言葉をかわしたり，友達と一緒に遊ぶ経験ができるようにしたりすることを，教師と母親が共通理解をしてA児に接していった。このように個に応じて指導をしていくことで，

A児は少しずつ周囲の人と会話もできるようになり，A児の主体性の成長を促すことができたと考えられる。

(2) 母親不信感を訴えるB子をみつめて

① 幼児の実態

両親共働きのため，生後6か月から保育園へ預けられた。B子は，母親の愛情不足を訴え続けるが認めてもらえず，口答えしたり，暴れたりで，精神的不安定な状態であった。就学への不安感により1年間だけ幼稚園に通うことになった。4，5月の登園時，祖母や母親と分離できず，教師が無理に引き離そうとすると，「バカ，いやじゃ―，お母さんを帰らすな，さわるな」と泣き叫びながら暴れて教師をてこずらせた。

② 母親の実態

一刻も早くB子と離れて勤めに行きたい気持で一杯で，教師には「B子を引き取ってください。しかってください」と言い，B子には「泣かずにいたら何でも買ってあげる。動物園に連れて行ってあげる。しゃんとせられぇ」としかったり，おだてたりするが，その気持はB子に伝わらず，母親にしがみついたままであった。腹を立てた母親は「仕事に遅れる」とカバンも靴も置いたまま，B子をたたいたり突き飛ばしたりしながら，連れて帰るということの繰り返しであった。

③ 担任の指導

B子の育ちには，母親との肌の触れ合いや，愛された思いが少ないと考えた。母親とB子の気持が通じ合わないまま，保母や祖母に引き離される分離不安が非常に大きかった。それはB子の「私をいつもほっといてさびしいんじゃー」の言葉からもうかがえた。しかし，B子の訴えはいつも聞き入れられず，母親への不信感はつのるばかりであった。B子も自己主張ができる年齢になり，自分の気持をわかってもらうために「赤ちゃん返り」をしているようであった。母親にB子の気持をそのまま受け止め，スキンシップや愛情表現，心の触れ合いを満足するまで経験させて欲しいと助言をした。それにより，B子の不安な気持を安定させ，B子が母親のもとを安心して離れていける気持になれると考えたからであった。

④ 園長の指導

B子の心の中には母親の存在感がなく，親子の信頼関係，触れ合い，愛された経験がなくては親離れはできないと考えた。「お母さんと離れたくないと言っているB子の希望どおりお母さんがくっついていてあげることですね。満たされない気持のままでは自立はできませんよ」と，幼児の心身の発達の特徴について話し，時間をかけてB子の気持を満たし，B子に信じてもらえる温かみのある母親になる努力をして欲しいと助言した。

⑤ 指導の経過

○あまりに激しいB子の訴えと，一見神経症的なしつこさに祖母も手をやき，母親の子育てのま

ずさを指摘し見放した。祖母に見放されて仕事に行けなくなった母親は勤めをやめ，しかたなくB子と一緒に登園して園生活を始めた。

○母親にしがみついての園生活の中で，親子の遊び，親子と友達との遊びを経験した。

○母親との肌の触れ合い，母親の存在感，愛情を感じとりB子の情緒はやや安定してきた。

○母親に，ともに遊ぶ姿勢から見守る態度へと変えB子の気持を友達の方へ向けてもらった。

○母親に一定の場所で遊びを見ながら，平井信義先生の「心の基地はお母さん」「意欲と思いやり」等の本を読んでもらった。その状態で大丈夫なことを確かめ母親を別室へ移した。

○B子が母親の存在や愛情を確かめに行く回数が，5分間隔より20分間隔位になって欲しいという教師の願いから，B子に，「今はお母さんも勉強しているのだから，Bちゃんもお母さんに会いに行くのを我慢して遊ぼうね」と励ました。

○母親には，B子が会いに来ると全面的に受け入れ，真剣に話を聞いたりスキンシップをしてもらい，B子が愛されている実感をもち，母親を信じる気持になるよう努力してもらった。

○数日経過後，B子の気持や表情に落ち着きがみられたので，母親にB子の心の支えを母親から友達に移していきたいと話し，B子が会いに来ても「よかったね，そうなの」と同意するだけにしてもらい，話し相手を母親から友達に変えていくようにした。

○やさしくて世話好きのC子とD子を友達として，「楽しいな」「友達っていいな」という思いをするような遊びの内容を工夫し経験させていき，友達の方がお母さんよりいいなという感じをもって，B子自身が母親から離れても安心して遊べるようにしていった。

○母親が園内のどこかにいることで，安心して遊べるようになった頃，友達から「明日から靴箱の所でお母さんとバイバイしようね」と言われ素直に「うん」とうなずいた。次の日「だいじょうぶ，お母さんは家で待っていてね。一番にお迎えに来てよ」と言い母親と別れができた。母親はなぜもっと早くB子の心がわかる母親になってやらなかったのか後悔したという。

○友達や教師に励まされたり，不安な時には園から家へ電話して，母親からもほめたり励まされたりしながら，安心して遊べるようになってきた。近ごろのB子は友達の中でも活発で人気者，朝も母親の手を引き自分が先になって笑顔で登園してくるようになった。

【考察】

○B子をとりまく実践の中で，B子の変容の要因になったと思われるものは，次のようなことではないかと考えられる。(母親の変容がB子の変容につながると考えた)

- B子を母親から引き離したりおだてたりしかったりしながら，母親とB子の理解に努めた。
- 母親が園長と話す機会を多くもつようにし，母親が自己反省し自分自身を見つめ直し，B子に信頼される母親になろうとする気持になるように働きかけた。
- 母親が仕事をやめ，B子中心の生活に変え我が子をよく見てやろうと真心こめて努力した。

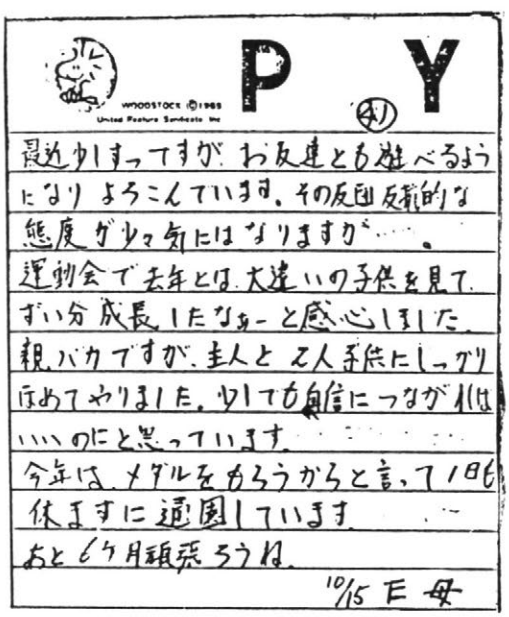
●母親が園長・担任の指導方針や心がまえを素直に聞いて育児の基本にたちかえり，はじめからやり直した。

○幼児の変容は，一見変わったようにみえても，時として逆もどりすることはしばしばである。従って，フィードバックしながらも生活リズムの定着と主体性をはぐくむ手だてを，今後も継続し見守っていく必要がある。

(3) ふれあいノート

200人余りの会員をかかえるPTA活動の中では，会員ひとりひとりの気持は出にくい。会員の本音がもっと聞きたい。人前では発言できにくい人のために，よい方法はないかと考えたのが，このふれあいノートである。文章で表すことにより，お互いの気持を理解し合えるのではないかと，PTA学級部の発案で始めた。PTA会員，役員，幼稚園のつながりを密にするため，日ごろ思うこと，PTAや幼稚園への意見，相談等，何でも自由に書こうということで，各クラスに1冊ずつのかわいいノートを準備した。ノートは，PTA役員の手作りの袋に入れて幼児を通して回す。幼児たちはこの袋を持ち帰るのを楽しみにしている。

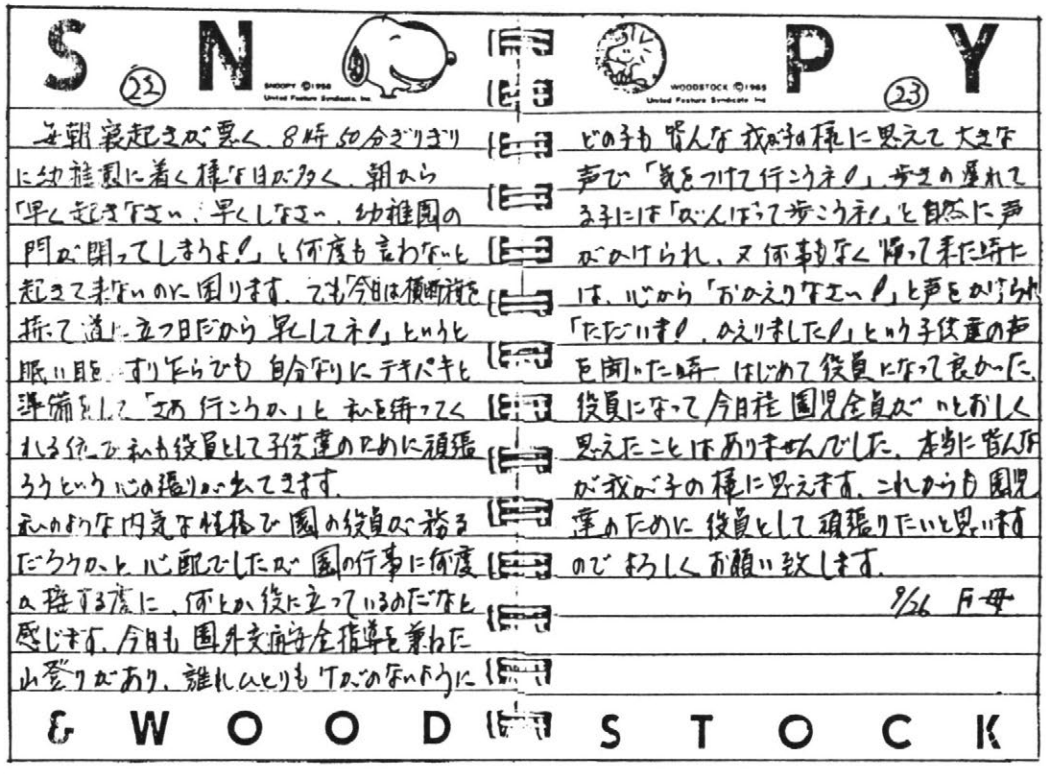
① 保護者と教師が気持を合わせて



運動会では，ひとりひとりの幼児が自分の力を出し切り，力一杯に取り組んでいる姿，友達と力を合わせて競技している様子を見てもらいたいと，幼児とともに内容を考え，みんなで頑張ろうと意欲がわくようにした。そして，ひとりひとりの課題に応じて援助し，自分の力で一生懸命に取り組もうとする気持が育つようにと努力してきた。その教師の気持が通じ，この母親は，我が子が本当に自分からしようとする気持で取り組み，力一杯頑張っていた様子を受け止め，その姿から，我が子の成長を感じとり喜んでくれた。そして，両親が一緒になってほめ，自信につながって欲しいと願っている。教師と同じ保護者の気持が感じとれうれしく思った。その教師の気持を素直に母親に伝えた。

「E子ちゃん，運動会ではとても張り切って，リレーも力一杯走っていたでしょう。一日一日と力強く，速く走れるようになったみたいですよ。ご両親にほめてもらって，ずい分自信がついたと思います。私も同じような気持で，E子ちゃんをほめているんですよ。これからも頑張っているところをしっかりほめてあげてくださいね」

② 保護者同士の啓発



S N O P Y

(22)

毎朝寝起きが悪く、8時50分ぎりぎりに幼稚園に着く様な日が多く、朝から「早く起きなさい、早くしなさい、幼稚園の門が閉ってしまうよ！」と何度も言わないと起きて来ないのに困ります。でも今日は横断旗を持って道に立つ日だから早くして ネ！」というと眠い目をこすりながらも自分なりにテキパキと準備をして「さあ行こうか」と私を待ってくれる位に私も役員として子供達のために頑張ろうという心の張りが出てきます。

私のような内気な性格で園の役員が務まるだろうかと心配でしたが園の行事に何度か接する度に、何とか役に立っているのだなと感じます。今日も園外交通安全指導を兼ねた山登りがあり、誰れひとりもけがのないように

(23)

どの子も皆んな我が子の様に思えて大きな声で「気をつけて行こうネ！」、歩きの慣れてる子には「がんばって歩こうネ！」と自然に声がかけられ、又何事もなく帰って来た時には、心から「おかえりなさーい！」と声をかけられ「ただいま！、かえりました！」という子供達の声を聞いた時はじめて役員になって良かった、役員になって今日程園児全員がいとおしく思えたことはありませんでした。本当に皆んなが我が子の様に思えます。これからも園児達のために役員として頑張りたいと思いますのでよろしくお願い致します。

9/26 母

& W O O D S T O C K

ふれあいノートで会員のPTA活動に対する主体的な気持を感じうれしく思った。この1ページを読んだ人たちが意識を高め合い，親しみを深め合って会員相互のきずなになって欲しいと願った。そして，この母親には，「お母さんの気持はF君にも通じて，お母さんも頑張っているからぼくも頑張らなくては，とF君も育っていきますよ。これからもよろしくお願いします」と，幼稚園側のうれしい気持を伝えた。

ふれあいノートを通して，日ごろあまり話をしない人のことも身近に感じられ，親しみがわいてきたようだ，というのが大半の感想である。そして今度は，お互いに悩みを話し合いたいという会員の気持から，各組ごとに懇親会が開かれた。近くの公民館を借り，全て保護者の運営で行われた。和気あいあいとした楽しい雰囲気の中から「同じ悩みの人もいるんだな」「子育てについていろいろ聞けていいなあ」等，保護者同士の親しみが増し，悩みも話し合え参考になったと好評であった。

さらに，各クラスのふれあいノートを幼稚園全体の保護者へ広めるためにふれあいコーナーを設けてノートを閲覧し，自由に書いたり読んだりできるようにしている。

【考察】

○ふれあいノートを通して，幼児や幼稚園に対する保護者の気持を知り，教師の方から保護者

に近づいたり，保護者の気持を受け入れたりできたことは，保護者と教師の信頼関係を深めお互いに理解し合うきっかけともなり，個に応じた指導に大変役立った。

○保護者同士，お互いの気持を伝え合い，さまざまな人の気持や考えに接することで自分を反省したり悩みが和らいだり，教育の知識を広めたりすることができた。それは，保護者ひとりひとりの自己啓発となり，幼稚園への協力，PTA活動に対する姿勢もより主体的になってきた。

5．研究の結論と今後の課題

保護者と教師が互いに相手を受け入れ，気持を合わせて幼児に接していくことで，幼児は大きく変容し育っていくことを改めて痛感した。そして，家庭と幼稚園，保護者と教師の相互理解のもとに，主体的に活動する幼児，自ら伸びようとする幼児を育てていくためには，教師の指導力と人間性が，大きくかかわってくることがわかった。教師は，幼児や保護者の心が読みとれる心ある教師，喜びや悲しみに共感できる感性豊かな教師となれるように，自己啓発に努めること。また，教師間も，お互いに自分の思いを表出し合える仲間関係で，実践を報告し合い考え合って実践力を高め，教育の専門家として恥ずかしくないよう努力していきたい。

PTA活動の様子からは，保護者が，自分たちの幼稚園だ，幼児のために，幼稚園のために何かできることはないか，役に立ちたいという気持をもち，その輪が広まっていることがうかがえ，幼稚園への理解，信頼の気持が深まってきつつある。保護者から保護者へ，そして地域へその気持が伝わり，広まり，本園の教育が地域に定着していくことを切望する。

今後もより質の高い家庭との連携ができるよう指導力をみがきさらに研究を進めていきたい。

付表 1

家庭連携の年間指導計画

（2年保育4歳児）

昭和61年度
岡山県岡山市立芥子山幼稚園

月日	行事名	必要とする主な内容と手がかり	（Ⓐ園だより　Ⓑ徒歩通園　Ⓒ一斉降園）
2.20 3.20	新入園児健康診断 新入園児保護者会	○園医により新入園児の健康診断を行ない幼児の健康状態を把握する。 ○幼稚園教育のあり方、教育目標、教育方針等の理解を求め幼児・保護者が安心して入園を持つ気持ちになるよう働きかける。	Ⓑ新入園児が始めて登降園をするためＰＴＡ補導部による案内と交通指導を行い、安心して安全に登降園できるようにする。 Ⓐ基本的生活習慣の必要性をのべ、身につくように協力を依頼する。
4.11	入園式	○幼児の成長と入園を祝い共に喜び合いながら協力して教育にあたるよう理解を得る。 ○担任と保護者は、幼児に接する心構えに一貫性をもっていくように話す。	〈園だよりの趣旨〉 毎月の行事予定、月の目標、主な経験や活動、幼児の姿、教師の指導の気持ち、連絡事項などをのせ、幼稚園教育の内容が理解でき、協力が得られるようにしていく。 幼児の健康管理、生活の安全面に関しては留意事項を具体的に表わし、保護者の指導が徹底するようにしていく。
4.23 24 25	家庭訪問	○地域の環境、幼児の様子、保護者の教育方針、園に対する要望を聞き、保護者と気持ちを合わせていく。 ○家庭を訪問して話すことで幼児・保護者がより心を開くことができ、信頼関係ができるようにする。	Ⓐ入園した幼児の成長を共に喜んでいる気持ちを伝え一人一人の幼児との心のつながりを持ち「幼稚園って楽しいな」という気持ちがもてるようにしていることを伝えていく。 〈徒歩通園の趣旨〉 徒歩通園を奨励すると共に毎月１日には全員徒歩通園とし健康増進、交通ルールの徹底、親子のふれ合いなどを求め、親子共に進んで徒歩通園する気持ちをもつようにする。
4.30	参観日 ＰＴＡ総会	○園生活を参観し幼児の実態を知って、個に応じた指導の大切さを理解できるようにする。 ○保護者の自己紹介やゲームなどをしてクラスの幼児・保護者の親睦を図る。 ○一人でも多くの参会者が得られるよう働きかけ、幼児のより良い成長を願って協力態度ができるようにする。 ○園での様子や幼児の発達段階におけるけんかといじめの違い、子育て７カ条等を話し合い、親の幼児を見る目、接し方について理解を深める。	Ⓑできるだけ徒歩通園して欲しいことを話し、理解を得るようにする。やむなく自転車で通園する場合はきめられた場所にきちんと置き、そこからは全員歩くようにすると共に、そこを起点としてあいさつ道路にしていることを知らせる。 Ⓑ学区の通園路や危険な箇所を手紙を通して知らせ親子で安全に気をつけて通園するように働きかける。 〈一斉降園の趣旨〉 幼児の様子、生活習慣、指導の気持ち、登降園の仕方等随時働きかけ、理解が深まるようにする。
5.21	参観日 交通安全教室	○参観のし方、遊びの見方を印刷物で知らせ我が子の遊びの様子を記録して、集団の中の我が子の様子を知ってもらい、教師は指導上の参考とする。 ○学級の実態、担任の教育観、学級経営方針、指導の要点を話し、理解や協力を得る。 ○親子で実地指導を受けたり、ダミー人形を使った実演を見たりすることで交通事故に対する認識を深め、保護者の姿勢を正したり、気持ちを合わせて指導していくよう働きかける。 （手のあげ方、親子手のつなぎ方、横断歩道の渡り方等）	Ⓒ衣服の着脱、自分の持ち物の始末、遊んだ後の片付け等、親が少し手を引いて、幼児が自分でするように見守って欲しいことを伝える。 Ⓒ登園後いつまでも保護者の顔が見えると幼児の気持ちが動揺するので、す早く幼児と別れて帰ってもらうよう協力を求める。 Ⓑ幼児の手首をにぎり、親子で安全に登園している様子をほめたり、励ましたりして交通のきまりを守ることの大切さを知らせていく。
5.30	学級ＰＴＡ ふれあいノート	○教師も一人の会員の立場で参加し、日頃思っていることや考えていることを話し合い相互の信頼と理解を深める。 ○各クラスの話題や教師からのメッセージとして指導の気持ちを含めて「学級ＰＴＡを終えて」という印刷物を配布し家庭へ働きかけていく。 ○ふれあいノートに各自の思いを気軽につづって回覧し、互いの気持ちを理解し合い、親しみを増すようにする。	Ⓐ自分で安定する場所を見つけたり、教師と一緒に探したりすることで安心し、落ち着いて過ごせるようになったことを伝える。 Ⓐ心身の疲れが出やすい時期なので健康状態に留意すると共に、親子のふれあいに努め、心の安定を図るようにお願いする。 Ⓑ横断歩道ではまず手をあげて体を大きく見せること、又かさをさしている時は左右の確認をしてから渡ることを伝え、指導が徹底するようにしていく。
6. 7	親子綱引き大会 救急指導	○幼児・保護者・教師・全員でクラス対抗綱引きを行ない、親睦と健康増進を図る。 ○水遊びシーズン前に救急処置の仕方の実技指導を受ける。	Ⓐ幼児が自分のしたい遊びを見つけて遊ぶようになっていること、身の回りのことや遊んだ後の片づけ等少しずつ自分でしようとする気持ちをもたせるようにしていること等を伝え、家庭でも同じ気持ちで協力してもらうようにする。
6.19	弁当参観日 プール準備	○弁当指導を参観し、我が子の食事の仕方の実態を認識すると共に、園での指導内容を理解し、家庭でも気をつけられるようにする。 ○保護者・幼児・教師が一緒にプールを組み立てることにより保護者には、幼児のためにという意識が高まるように、幼児にはプール遊びへの関心が高まるようにする。	Ⓐ梅雨期の保健衛生について知らせ、良い生活習慣が身につくように協力を依頼する。 Ⓒ少しずつ自分の気持ちが出せるようになり友達とのトラブルが多くなってきているが、大人の一方的な見方をするのではなく、幼児の気持ちを聞き受け止めて欲しいことをお願いする。 Ⓒ家庭での幼児の生活や遊びを見直し、良い、悪いの判断がつくように見守ったり教えたりして欲しいことを伝える。 （線路内で遊ばない、置き石をしない、工事現場へ行かない）
7. 2	参観日 教育講演会	○園の生活に慣れ遊びに取り組んでいる様子を参観し、成長を喜び合うと共に我が子の課題を理解する。 ○子育てについて講演を聞き、もう一度自分を見つめ、子育てをふり返る機会をもち、一人一人の意識が高まるようにする。	Ⓐ園生活の楽しさがわかり、好きな遊びを見つけて遊んでいる。さらに水遊びを通して水に慣れ親しんだり、開放感を味わったりして思いっきり遊ぶ中でより楽しさを味わって欲しいことを伝える。 Ⓑ汗がでたらふく、戸外では帽子をかぶる等、夏の衛生管理について知らせ家庭の協力を依頼する。

付表 2

家庭連携の年間指導計画

（2年保育5歳児）

昭和61年度
岡山県岡山市立芥子山幼稚園

月日	行事名	必要とする主な内容と手がかり	Ⓐ園だより　Ⓑ徒歩通園　Ⓒ一斉降園
7.12	地区ＰＴＡ	○地区の危険な場所や困っている点について話し合い、保護者同士の懇親を図ると共に、地区のみんなが同じ気持ちで幼児の指導にあたっていけるように働きかけていく。又教師も一会員として参加し指導に生かすようにする。	Ⓐ目的をもって遊べるようになったこと、友達への関心が高まり友達と一緒に遊びを進めていけるようになったこと、水遊び等一人一人の課題に応じて指導していきたいことを伝える。
	個人懇談	○一人一人を理解したうえで指導にあたっている内容を具体的に伝え、指導の見通しを話し保護者が努力しようとする気持ちになるよう働きかける。	Ⓐ自分のことが自分ででき規則正しい生活が送れるようにお願いする。 Ⓒ夏休みの間、安全で規則正しい家庭生活が過ごせるよう園だよりと合わせて依頼する。
7.24 8. 9	夏休みプール開放	○保護者と教師が協力して個に応じた指導をしていく。 ○参加者全員で準備から片づけまで分担して力を合わせて行い、相互の親睦を図る。	Ⓐ一学期間の幼児の生活、成長の様子を知らせると共に、休み中の留意事項について具体的に示し、家庭で有意義な生活ができるように協力を求める。 Ⓒ規則正しい生活に早くもどれるように協力を求める。
9.18	参観日 お月見会	○お月見会を主体的に進めている幼児の様子を見たり、成長の様子を感じとってもらったりして、幼児と共に楽しく過ごすようにする。	Ⓒ二学期の生活の見通しを話し、成長の著しい充実した時期を、協力して幼児の成長を援助していけるように働きかける。 Ⓐ友達との再会を喜び一緒に夏休みの経験を生かして遊んだり、自然に触れて遊んだり運動遊びに挑戦したりする中で自分なりに目標をもって遊びに取り組めるようにしていきたいことを伝える。
9.26	園外交通指導	○ＰＴＡ役員で道の歩き方、横断歩道の渡り方、踏み切りの渡り方等の指導の援助をし、幼児保護者共に交通安全への意識を高める。	Ⓐ早く園生活のリズムを取りもどし元気に登園できるようにお願いする。
10.12	運動会	○幼児が友達と一緒に力を合わせて自分なりの力を出し切って運動している様子から、一人一人の成長の様子、頑張っている姿を見届け安心できるようにする。 ○幼児と一緒に競技をし、親子のふれあいをもち楽しく過ごす。 ○幼児、ＰＴＡ役員、保護者、教師で共に力を合わせ運動会を進めていく。	Ⓐ「自分達の運動会だ、頑張ろう」と友達と一緒に毎日取り組んでいる。自分の力を出し切り、友達と力を合わせて臨んで欲しいことを伝える。 Ⓐ気候のよい時期に自然の中で家族一緒に遊んだり話をしたりしてふれあいをもつようにお願いする。
10.21	園外交通指導	○交通安全母の会、警察署、ＰＴＡ役員等の協力を求め、幼児への指導の徹底を図ると共に園への理解が深まるようにする。 ○園での指導内容を保護者に自覚的で知らせ園と家庭とが同じ気持ちで指導していくようにする。	Ⓐ道路で自転車を乗り回してはいけないこと、自転車に乗って遊んでもよい場所等を知らせてもらい家庭で安全な自転車遊びができるようお願いする。 ⒷⒸ保護者と幼児が手をつなぎ幼児を内側にし、保護者が車道側を通って登降園することを伝え意識づくようにしていく。
11. 5	親子芥子山登り	○親子で山登りをしてふれあいをもち心を通わせると共に自然の中で思う存分身体を動かし楽しく過ごす。 ○励まし合ったり助け合ったりして登る幼児の様子から、頑張る気持ち、幼児なりのやさしさを保護者・教師が共に理解しほめていく。	Ⓐ運動会を通して意欲的に遊びに取り組めだしたこと、友達関係にも深まりが見られ、思ったことを伝え合っていること、友達と一緒に遊ぶ楽しさをしっかり経験し、我慢したり友達と気持ちを合わせたりする心を育てていきたいことを伝える。 Ⓑ時間を守ることの大切さや遅れて登園することが幼児の心に負担となり、生活のうえでマイナスになることを知らせ遅れないで登園できるよう、個に合わせて助言していく。
12.13	生活発表会	○生活発表会の意義、幼児の姿、どう見て欲しいかということをプリントし、その子なりに頑張っている面が理解できるようにする。	Ⓐ友達とのかかわり合いを大切にし友達関係を育てていきたいこと、一人一人が自分なりの力を出し目的をもって発表会や子供会に取り組んで欲しいことを伝える。
	懇親会	○発表会を見ての感想を話し合い、幼児理解、幼児への接し方等の相互理解を深めると共に親睦を図る。	Ⓐかぜをひかないように健康管理に気をつけてもらうようお願いする。 Ⓐ文字や数に接する機会が多い時期なので、幼児が興味関心をもち、質問をすれば正しく教えてやりましょうと伝える。
1.25	日曜参観日	○親子で一緒に体を動かして楽しみ、体、心のふれあいをもつと共に運動への関心が高まるようにする。	Ⓒ事故のないように幼児の様子に気をつけたり、年末年始の家庭、社会の様子に幼児が接することができるようにお願いする。 Ⓐ冬休みの過ごし方を具体的に伝え、年末年始の生活を幼児も家族の一員として過ごし様々な経験ができるようにお願いする。 Ⓒ寒さに耐えてきている松や梅の話をし、幼児と保護者が共に頑張ろうとする気持ちをもつようにする。 Ⓒ最後の学期を、より一層保護者と気持ちを合わせ幼児の心を受け止めたり成長を助けたりしていきたい気持ちを伝えていく。

日曜参観日（親子体操）

2. 4	学級ＰＴＡ	○卒業、一年生入学に向い、幼児が自立できるように園での指導、家庭での指導の共通理解をする。	Ⓐ「もうすぐ一年生だ頑張ろう」と幼児同士心を通わせ合えるようにそして、自立した落ち着いた態度で生活できるように一人一人に応じ指導していきたいことを伝える。 Ⓐはし、鉛筆の正しい持ち方を知らせ、家庭でも、気をつけてもらうようお願いする。 Ⓐ１２月の山登りで話し合った、寒い中でじっと我慢している桜の芽のことを伝え、くじけそうになったら桜の芽のことを思い出して頑張れるように助ましてもらうようお願いする。 Ⓑ防寒着の着脱を自分することの大切さや、ポケットに手を入れて歩くと危険なことを知らせ、幼児が自分で気をつけてできるように見守ったり助言したりしてもらうよう協力を求める。 Ⓐ自分の力を発揮し主体的に幼稚園生活を過ごしていることを知らせ、一人一人の課題をとらえてより成長を促していきたいことを伝える。 Ⓐ１日も休まないで金メダルをもらおうと頑張っている幼児のことを知らせ、お互いの励みとしていく。
2.25	参観日 同和教育講演会	○遊びの姿から幼児の心の成長をとらえ確かめ合っていく。 ○同和問題の現実を理解し、家庭教育のあり方を考える。	
3.18	卒業式	○幼児の成長を喜び合い、園生活で育ててきた意欲、豊かな感情、物事に対する興味関心、表現力等が小学校での学習と発達の基盤となっていることを理解できるようにする。 ○保護者の協力に感謝し相互のきずなが強まるようにする。	Ⓐ自分なりの課題を達成しようと毎日挑戦していること、一人一人の良さを認め合い成長を共に喜び合いながら、自信をもち、自立した態度で生活できるようにしていきたいことを伝える。 Ⓐ一年生入学まで健康管理に留意し、事故のないように気をつけるようお願いする。

9. 共同研究

■研究テーマ■

自ら環境に働きかけ遊びを工夫する幼児の育成
――自然環境を生かした活動を通して――

島根県浜田市立石見幼稚園
代表　大屋勝義

1．主題設定の理由

幼児は本来，自分の身辺にあるものに興味や関心を示し，自ら環境とかかわりながら自発的に遊びを見いだしていく傾向がある。幼児の遊びの場として，時には人工的に手を加えられた施設や環境の中で生活させることが必要であろうが，それが必ずしも子どもの遊びの意欲や創意を育てる結果とはならない。一般に幼児が整備された環境で生活する場合，一時的には物ごとに興味や関心を示し遊びにも意欲を持つが，逆に遊びに深まりがなく発展性にも乏しく，永続しない傾向が目立つ。また，最近は家庭での遊びも既製の玩具やファミコン等を使っての室内遊びが多く，自然の中でのびのびと遊ぶ幼児の姿が見受けられない。

以上のことから，素材は豊富でも環境が整えられず条件も満たされていない自然の中で，遊びをつくりだす幼児を求め，年少組は園庭を中心とする「砂場・築山周辺の活動」を，年長組は園外の山野で遊ぶ「断崖山の活動」を中心として，年間指導計画に位置づけ実践を試みようとした。幼児たちが，これらの体験を基に身近な自然の中で環境に働きかけ，友だちとかかわり合いながら遊びを深め，遊びきった満足感を味わうと同時に，新しい発想を育て，遊びを工夫し発展させていくことを願って本主題を設定した。

2．研究のねらい

(1)　自然は複雑なしくみを備え多様化に富んでいるが，中でも「解放感があり，のびのびと活動できる」，「科学性の芽ばえを育てることができる」，「感動の心が育ち，豊かな人間性が養われる」などの自然のもつ要素を大切にし，感受性に富み，自立心や想像力（創造力）豊かな幼児を育てる。

(2) 環境に積極的に働きかけ，友達とかかわりながら課題意識をもって遊びを工夫し発展する気持や態度を養う。

(3) 一人ひとりの幼児が遊びに喜びを感じ，遊びきり，次の活動への意欲を持つようになるためには，環境への配慮をどのようにすればよいか探る。

3．研究の内容と方法

(1) 研究の内容

① 幼児の個や集団での遊びの変容を知り，遊びを活発化させるための条件整備や指導の配慮事項について研究する。

○抽出児の観察記録や幼児の日常の活動記録をとり指導の手法を探る。また，自然の中で活動する幼児に対し，応答的環境の設定はどのようにすればよいか継続的な研究をする。

② 主題にかかわる活動（合同活動）と他の活動（自由な遊び・選ぶ活動・学級活動・集会活動）との関連を究明し，年間指導計画の検討をする。

③ 教師が幼児理解を深め指導の共通基盤を得るため，幼児観察のしかた，記録のとり方，資料分析の方法，適切な助言のあり方等を研究し，指導技術の向上を図る。

○教師が幼児と共に遊ぶ姿勢を大切にし，個々の幼児の遊びの実態を把握し，発達課題を見つめ，日常の保育にかかわらせる指導の方法や技術を研究する。

○課題の究明に有効適切に働く，焦点化された資料づくりに努める。

④ 自立の出発点は幼児に基本的生活習慣を身につけさせることであり，保育活動全般を通して，家庭との連絡提携を密にする方途を再考する。

○教育課程実施のうえでは，自主登降園をはじめ学級活動，集会活動に力点をおく。また，参観日や親子遠足など園行事の充実をはじめ，園便り・個々通信・親子読書日記・交通班日誌等，家庭と園のパイプ役としての諸機能を組織づけ活用する。

(2) 研究の方法

① 本園は幼児数195名（4歳児―100名・5歳児―95名），年少児，年長児それぞれ3クラスの6学級編成である。日常の保育では，自由な活動，選ぶ活動，園外活動を含め行事等は学級解体による合同活動を試行しているが，その主たる理由は次の諸点である。

○幼児の友人関係が広がり，遊びが多面的となり，刺激も多く活動が意欲的となる。

○チーム・ティーチイングによる教師間の協調が図られ，個々の幼児の個性がより尊重される。

○年少児の園生活を安定させ，仲間を広げるには合同活動が望ましい。

○異年齢合同活動では幼児間に，いたわりや思いやりの心が育つと共に遊びが伝承される。

○園外保育では幼児の活動が広範に亘るので，安全面から目の届き易い合同保育がよい。

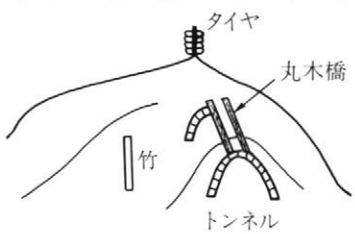
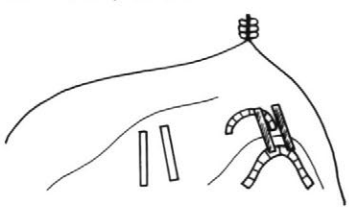
② 主題究明のための保育研究や日常の保育活動を，より焦点化し確かなものにするために，「保育実践を確かめる窓」—評価の観点—を設定し研究仮説と対照しながら研究を進める。

③ 研究に必要な幼児の実態把握を中心に，家庭・地域へ啓蒙のための諸調査を実施する。

4．実践事例

(1) 砂場・築山周辺で遊ぶ（4歳児合同活動）——M児の遊びを追って——

停滞しがちな築山や，その周辺での遊びに刺激を与え，遊びの活発化と発展を期待して，教師が意図的に設置した環境を，幼児が自分達で作り変えながら遊びが深まった事例である。一人の幼児の遊びを追うことで，他の子ども達と相互に働きかけ合っているようすや過程を知ると共に，仲間一人ひとりの幼児の発達段階や個性を見つめ成長の節を探りたいと考えた。

	M児の遊びの姿	他とのかかわり	考察
▶Ⓣの投げかけ	築山に1本の竹がたてかけてある  		●遊びの発展を期待して築山に1本の竹をたてかけたことにより，日頃とは異なった遊びが生まれた。
9：30			
▶興味を持つ	「オーイ　引っぱれや」	a児・b児	
	並べて2本たてる 		●素材が大きいので，自然に友だちとのかかわりが生まれ，協力して遊びの場を作り出している。
	「2コきました。危ないですよ」 「そっちだめ。工事中，こっちにしなさい。こっちですよ」	c児 M君　よして	

▶イメージのひらめき

「いいよ」
「だー。早ようせーや」

c児
←持ってあげようか？

「よしきた。僕はこんとうしょう」
竹を並べかえる　竹が増える

●言葉の中に，遊びへの意欲が感じられると共に，合理的に作業を進めていっている。

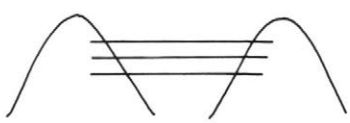
「よし，お仕事やろう。はいこの上に」
「そうだ，いいこと思いついた。下がれ，下がれ，下がれていうとるだろう」

d児
人にやらさんといけんのだけえ

●d児は，M君達の遊びに参加していない。しかし，関心を持ってみつめている。

9：45

鼻歌を歌いながら，竹をあっちこっちに動かす
♪　チーン　チキチキ



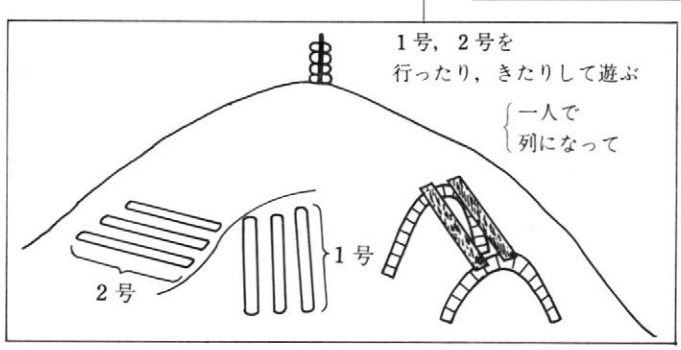
「コンクリート，コンクリート」

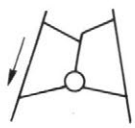
♪　ギーダン　ギーダン
くり返す。

b児
土を持ってきて，竹と築山とのつなぎ目に置き，手でたたいてかためる

●共通のイメージで遊びが広がっていっており，言葉で確認しなくても互いを認め合っている。

▶遊びへの満足	「これ1号，これ2号」	a児　e児 竹を移動させようとする	
	「a君がいるんなら，持って行ってもいいよ」	a児 ←これ，あそこまで行ったらゴールなん	●遊びへの目的がはっきりしてきた。
	下から竹を登ってきて 「ゴールまできた。やったー，ゴールだ！」 ♪　チラリ　チラチラ	c児，e児，f児 いっしょに竹に登ろうとする	
	「やー，重たい」	a児 1人ずつしかいけん	●a児の言葉を受け，遊びのルールが自然にできてきた。
▶遊びへのふくらみ	「はい。じゅん番，じゅん番」		
	♪　チラリ　チラチラ　　チラリ　チラチラ みんなで　くり返し歌ううちに， チラリ　チラチラ　のパターンができる		●即興の鼻歌に，遊びの楽しさが表出されているように思われる。
	♪　ハニ丸王子	a児 ♪オーイ　ハニ丸	



10：00 ▶遊びへの自信	「やりんさい，やりんさい」 「せやない，せやない」 「こがあすりゃ，えんだあね」 1号を逆にすべってみせる  10：40 片づける	Ⓣ 先生もやってみたいなあ Ⓣ でも　ちょっとねえ Ⓣ よし！　やってみよう	●M児達の楽しそうな遊びの様子を見ているうちにⓉも仲間入りをしたくなり声をかけてみた。 ●自信と思いやりが感じられる。

① 園庭周辺での遊びの「まとめと考察」

㋐ 竹が築山に1本たてかけてあるのに気づき，興味を持ったM児の呼びかけに応じて，遊びが始まっている。初めはM児のリードしている場面が多かったが，時間がたつにつれ，端的な言葉の会話ではあるが，共通のイメージを持って遊びを具体化させていっている。

㋑ この時期の4歳児は，遊びに対する興味やイメージはあっても，友だちに追従して遊んだり，遊びが持続しないことが多い。本日のように，友だちに呼びかけ，環境を作りかえ作ったもので，繰り返し遊ぶという段階的な広がりと，深まりをみせた活動が展開された理由として，次のような点が考えられる。

○ M児という，友だちをリードして遊びを進めていく存在があった。

○ 素材(竹)が友だちの協力なしでは動かせないため，自然に友達とのかかわりが生まれた。

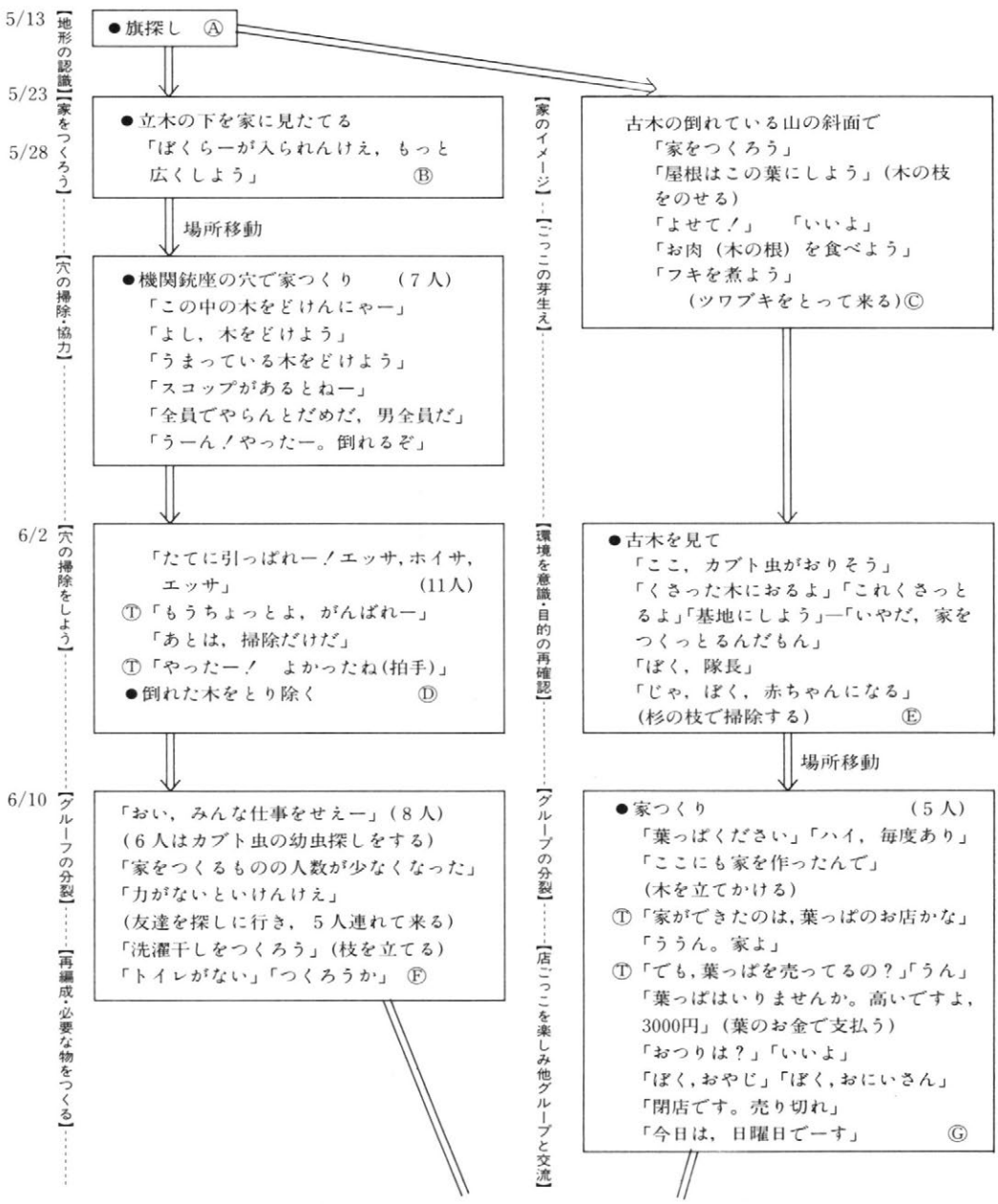
○ 友達とのかかわりの中で自己主張しながらも，相手の立場を受け入れて遊んでいる。

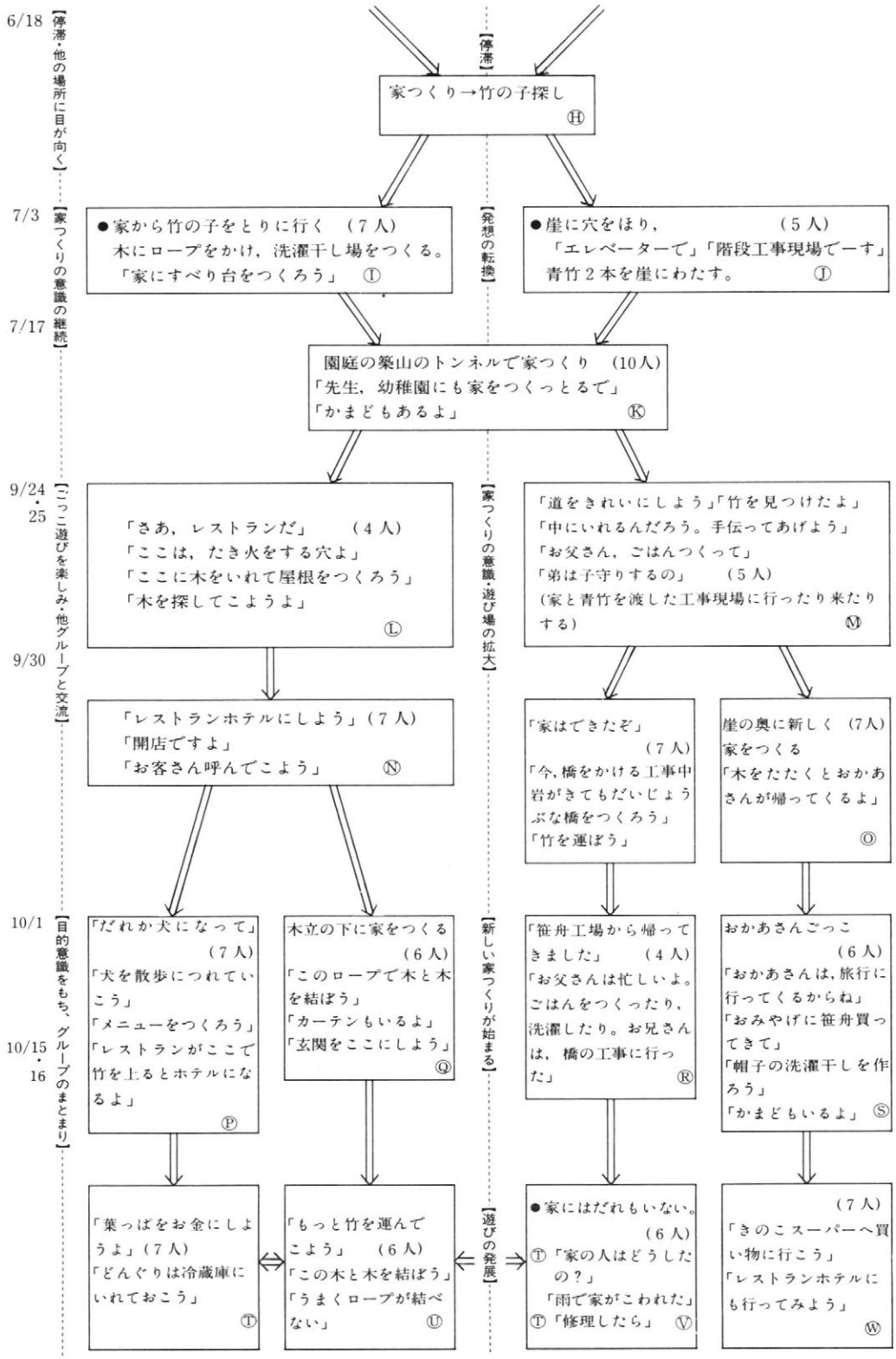
○ みんなで協力して，遊びの場を作りあげた成就感が，より遊びに楽しさを加え，満足感を与える結果となった。

㋒ 幼児は，教師や友だちに認められることにより気持が安定し，次の活動への原動力となる。そのためには，教師もゆったりとした気持で子ども達に接し，自由に自己主張できるような雰囲気作りをすることが大切である。幼児同士の自我のぶつかり合いを通しながら自分を抑制し，相手を認め，共感することができるようになるのではないだろうか。やってみたいという気持を起こさせ，意欲的に遊びが展開されるような場の設定，遊びの深まりが生まれるような助言のあり方に心がけると共に，発達段階をふまえつつ，個々の幼児の背景にあるものを考え合わせて指導にあたらなければならないと考えている。

(2) 断崖山で遊ぶ（5歳児合同活動）「家つくりのようす」 ― グループを中心に ―

年長児の断崖山での活動は4月当初より1月中旬までに20回（内，4回は年少児と合同）実施した。これまでに，木登り，ターザンごっこ，探険，家つくり，どんぐり拾い，楽器つくり，幼虫探し……等60種以上の遊びを展開している。ここでは山の自然を適切に利用し家つくりを始めたグループを中心に，幼児達の遊びに対する意識の変化や環境への働きかけに着目すると共に，教師の環境設定への配意や指導助言の適否を考察しようとした。




6/18
【停滞・他の場所に目が向く】
【停滞】
家つくり→竹の子探し Ⓗ
7/3
【家つくりの意識の継続】
●家から竹の子をとりに行く (7人)
木にロープをかけ，洗濯干し場をつくる。
「家にすべり台をつくろう」 Ⓘ
【発想の転換】
●崖に穴をほり， (5人)
「エレベーターで」「階段工事現場でーす」
青竹2本を崖にわたす。 Ⓙ
7/17
園庭の築山のトンネルで家つくり (10人)
「先生，幼稚園にも家をつくっとるで」
「かまどもあるよ」 Ⓚ
9/24・25
【ここ遊びを楽しみ・他グループと交流】
「さあ，レストランだ」 (4人)
「ここは，たき火をする穴よ」
「ここに木をいれて屋根をつくろう」
「木を探してこようよ」 Ⓛ
【家つくりの意識・遊び場の拡大】
「道をきれいにしよう」「竹を見つけたよ」
「中にいれるんだろう。手伝ってあげよう」
「お父さん，ごはんつくって」
「弟は子守りするの」 (5人)
(家と青竹を渡した工事現場に行ったり来たりする) Ⓜ
9/30
「レストランホテルにしよう」(7人)
「開店ですよ」
「お客さん呼んでこよう」 Ⓝ
「家はできたぞ」 (7人)
「今，橋をかける工事中岩がきてもだいじょうぶな橋をつくろう」
「竹を運ぼう」
崖の奥に新しく (7人)
家をつくる
「木をたたくとおかあさんが帰ってくるよ」 Ⓞ
10/1
【目的意識をもち、グループのまとまり】
「だれか犬になって」 (7人)
「犬を散歩につれていこう」
「メニューをつくろう」
「レストランがここで竹を上るとホテルになるよ」 Ⓟ
木立の下に家をつくる (6人)
「このロープで木と木を結ぼう」
「カーテンもいるよ」
「玄関をここにしよう」 Ⓠ
【新しい家つくりが始まる】
「笹舟工場から帰ってきました」 (4人)
「お父さんは忙しいよ。ごはんをつくったり，洗濯したり。お兄さんは，橋の工事に行った」 Ⓡ
おかあさんごっこ (6人)
「おかあさんは，旅行に行ってくるからね」
「おみやげに笹舟買ってきて」
「帽子の洗濯干しを作ろう」
「かまどもいるよ」 Ⓢ
10/15・16
「葉っぱをお金にしようよ」(7人)
「どんぐりは冷蔵庫にいれておこう」 Ⓣ
「もっと竹を運んでこよう」 (6人)
「この木と木を結ぼう」
「うまくロープが結べない」 Ⓤ
【遊びの発展】
●家にはだれもいない。 (6人)
Ⓣ「家の人はどうしたの？」
「雨で家がこわれた」
Ⓣ「修理したら」 Ⓥ
(7人)
「きのこスーパーへ買い物に行こう」
「レストランホテルにも行ってみよう」 Ⓦ

① 活動経過の概要

㋐ 第1回目 ～ 第3回目（Ⓐ ～ Ⓒ）

○ 遊びの行動範囲を示す旗4本を配置したため，旗探しをしながら山の地形の把握をする。殆どの幼児が，年少時に山で遊んだ経験があるので，それをもとに，やがて家つくりに適した場所を見つけて遊び始める。遊びに対する目的意識やごっこの芽ばえがうかがえる。

㋑ 第4回目 ～ 第8回目（Ⓓ ～ Ⓚ）

○ 遊びのイメージが対立しているが，不都合を感じないで遊んでいる。また，穴の掃除や片づけが済んだことで，目的が達せられたと考えたのか，幼虫や竹の子探しに興味が移行する。

○ 幼児個々の遊びのイメージが異なり，グループの人数も定まらず，家つくりが停滞したように思われる。そこで，遊びの場を限定し，物的環境の一部として青竹を10数本切って放置する。それが遊びを刺激し，その後，青竹を工夫して使う姿が見受けられ，次第に遊びが活発化し，家つくりのイメージも強化されてきた。そして夏休み前になるとⓀグループのように，家つくりが園庭に持ち込まれるようになり，遊びの発展が見受けられた。

㋒ 第9回目 ～ 第10回目（Ⓛ ～ Ⓜ）

○ 2学期が始まり2か月ぶりに山に登るが，遊びの意識は継続している。青竹を更に数本準備したことで，家つくりの遊びが盛んになり，役割分担も見られ，ごっこ遊びが拡大した。

㋓ 第11回目 ～ 第14回目（Ⓝ ～ Ⓦ）

○ 新しく，家つくりのグループ（Ⓞ ～ Ⓠ）ができ，遊び場もかなり広範囲になったので，教師の目がゆき届かなくなる。家を中心として遊びの種類も多くなり，グループ同士の交流も見られ，楽しく遊びきっている様子がうかがえる。

○ しだの葉で作った屋根が壊れ，遊びの意欲を失いかけたグループ（Ⓥ）ができたので，次回は藁を準備し，それをどのように使って遊ぶか観察したい。（1/21～前日，教師が山に運びそれとなく置いた藁を利用して，家の屋根ふき，ベット作り，なわないなどの遊びが始められた。屋根ふきに使ったことは，教師の予想に合致する）

② 断崖山の遊びのまとめと考察

㋐ 当初は同じ場所で遊びながらも，幼児が個々のイメージで遊ぶ傾向があるので，教師が問題点を提示するが，協力して遊ぼうとはしなかった。日を重ね遊びこんでいくに従って，個人遊びがなくなり，遊びの目的が明確で内容も複雑になってくる。また，仲間が増えグループ内の人間関係も深まり，役割分担や協力の態度がはっきりし，リーダー的存在の幼児も現われる。一方ではグループ間の交流が広まると同時に仲間意識が育ち，活動の場も広範囲になってくる。以上のことから早期に，まとまりを持たせるような指導や助言をするのでなく，個人遊びを十分に体験させながら，徐々に協力して遊ぶ楽しさを知らせるよ

う指導することが大切である。

㋑ 断崖山での遊びの延長と発展が，園庭でも見られるようになり，これ迄に使うこともなかった丸太や竹，剪定した樹木の切れはしなど固定遊具と組み合わせたり，築山のトンネルを活用しての家つくりが盛んになってきた。このことから環境に対する幼児の反応が敏感になったと考えられる。また，年少児への遊びの伝承にもつながると思われる。

㋒ 季節の移り変りにより，自然の変化を直感すると共に，遊びが誘発される長所がある。しかし，山に遊歩道があるため外的要因で幼児の作った遊び場が壊され，遊びに対する意欲が阻害されることがあった。このような場合の指導には大変困惑した。

5．研究の結論と今後の課題

(1) 砂遊びは抵抗が少なくて，幼児の創造性を伸ばすことのできる格好な素材であり，年少児には，砂に親しみ砂に働きかける遊びを繰り返しさせる必要がある。当初は砂や水，板ぎれや竹筒など，その場や身辺に備え付けてある材料や，用具を使っての遊びが多かったが，日を重ね経験を積むにつれて，草花や草木の葉や実・木の枝・野菜の葉など周囲の自然物へも関心が向けられるようになり，それらを使って多様な遊びができるようになった。遊びも砂場から築山，園庭周辺へと広がり，グループ内で役割分担をしたり，ルールを作る等，年少児なりの工夫が見られるようになった。一方，断崖山の遊びでは個人遊びの期間は短く，すぐにグループ遊びに発展し物を作ることから，ごっこ遊びに進む傾向が目立った。山の活動は3年間の継続研究で年間指導計画に位置づけて実践しているため，年長児に，四季の変化による季節感や感動の心を育てるには，極めて有効であった。また教師としては，多角的に継続観察して得た資料により，個々の幼児の特性や遊びに対する関心度，交友関係，遊びの中での発想や意志力など，幼児の成長発達に必要な多くのことを修得することができ，自然にかかわる活動が，日常の保育内容や遊びの質を高めるうえで，適切であったと考えている。

(2) 年少児に砂場で全身を使って遊ぶダイナミックな活動をさせると同時に，築山や園庭周辺まで遊びをつなぎ発展させるための教師としての環境構成のあり方や配慮事項，また，年長児の山の自然を活用する遊びを継続発展させるために，応答的環境の設定はどのように考え，どのような手だてをすべきか等は，今後に残された当面の課題である。また，友達同士が協力して遊ぶことで，創意のある変化に富んだ遊びが多く見られたので，今後はグループ遊びの楽しさを知らせる集団の育成（仲間づくり）に着目した指導に重点をおきたいと考えている。なお基本的生活習慣の確立については，園生活では定着し習慣化の傾向にあるが，家庭への啓蒙と指導は，これからも組織的に継続して行うよう研究を積みたい。

10. 共同研究

■研究テーマ■

親子の心の絆を基盤とした基本的生活習慣・態度の育成は，どのようにすればよいか
――園だよりによるゆさぶりで――

愛媛県松山市桃山幼稚園
代表　佐伯照美

1. 主題設定の理由

幼児の基本的生活習慣，態度の育成は，家庭教育の役割である。家庭の教育機能が低下したからといって，幼稚園が安易に基本的生活習慣，態度を身につけるための指導を安請け合いをしてはならない。幼児のしつけは，あくまでも，親子の心の絆を基盤とした家庭教育でなければならない。ところが最近における社会情勢の変化によって，核家族化した若夫婦だけの家庭では，子育ての知恵を老父母などから教えられることが少なく，子育ての技術は低下してしまっている。また，女性の社会進出は，ますます家庭の教育力の低下に拍車をかけている。

幼稚園でも，当然，家庭の守備範囲であるしつけの問題を，引き受けようとする気配がみられる。家庭教育書は読んでいるが，子育てには自信がないという核家族化した家庭が多いのが実態である。幼児期においては，幼児の基本的生活習慣，態度の育成は，家庭でなければならないという基本的な考えにたち，本園では父母が子育ての学習をするための「子育て情報」を提供することとした。この情報内容は，あくまでも問題提起にとどめ，問題の解決はわが子の実態に即し，各家庭教育において解決するという考え方にたつこととした。

2. 研究のねらい

幼児の若い両親たちが，子育てに関する知識や技能を身につけることに意欲を持たせるために，毎月何回か発行している園だよりの空いたスペースに，「子育て情報」を掲載し，問題提起をすることにした。幼稚園と家庭との連携は，両者がお互いに歩み寄らなければならない。特に，幼稚園側の過度な指導性の発揮は，かえって家庭を幼稚園から遠ざけることになりかねないとの判断にたって実施することにした。

そこで，それとなく，しかも，ひかえ目に子育て問題を提案し，家庭内での話し合いや，隣近所での話題のたねを提供するという気持で，取り組むことが必要であると感じた。ただ，園からの子育て情報が一方的に流れっ放しにならないように，家庭からの反応が返ってきた場合は，全保育者が適切な対応ができるように，教員（保育者）間の共通理解をはかる体制を確立することとした。

そのため，園だよりを発行したときには，予想される家庭からの反応を予測し，保育者同士で，子育て情報を取りまく問題をあれこれ話し合う時間をもつことにした。このことは，教育専門職としては，当然なことではある。しかし，幼稚園での直接的な保育内容以外を問題として持ちこまれた場合に，子どもを産み育てた経験のない若い保育者には，即答できかねる問題もある。そのためあらかじめ十分な心の準備がなされていなければ，具体的な子育ての技術を父母達に納得させることができない場合も考えられる。その対策として経験の深いベテラン保育者が中心となり，若い保育者に指導をしなければならないことも多い。

特に，学期末の個別懇談会等では，園からだした「子育て情報」が如何に家庭の中に浸透していきつつあるかを考察し，次の子育て情報に何をとりあげればよいかについての準備をしなければならない。

3. 研究の内容と方法

(1) 園だよりの余白のスペースを適切に使い，父母が気軽に目を通すことのできるような内容から手をつけることにした。あまり，格式ばって系統を立てるのでなく，その時期，そのチャンスをじょうずに捉えて，父母達が興味や関心を持つような内容を，全保育者で話し合って設定することとした。

(2) 父母達の反応を強要するのではなく，どんな小さな反応についてもとりあげ，具体的な事後指導の手だてについても，相談にのることにした。子育て情報についての共通な話題が学級から幼稚園全体に拡がっていくために，保育者が共通理解をもって，相談員になるという自覚をもつよう努力した。ことに，父母との相談内容が理屈っぽくなることのないよう，一人ひとりの幼児たちの日々の生活や遊びを基盤としたものを中心にとりあげることとした。

4. 実践事例

(1) 第1号「子育て情報・園だより」を発行するに至った経緯

例年6月頃になると，どこの園でも「フィンガー・ペイント」を実施する。この遊びは，大人の感覚からみれば，何となく不潔感の伴う活動である。また，この時期には，本園では園庭の一隅に，1坪ほどの田んぼを作り，「泥んこ遊び」をさせることにしている。

本年は，K児の母親からうちの子には「泥んこ遊び」をさせないようにしてほしいという連絡があった。その理由は，家庭ではそのような遊びをさせていないからというのであった。母親の気持の中には，わが子だけは不潔な遊びをさせないでほしいという気持が受けとられる連絡であった。

「フィンガー・ペイント」も，泥んこ遊びも，幼児たちにとっては，この遊びほど自己充実する活動はみられないのである。たまたま，この時期には，プール遊びもはじまるので，遊びの後にはプールサイドで体を洗い，プールの中で思いきり水遊びを楽しみながら，泥や糊を洗い落としながらプールでの水遊びが展開されるのである。

K児の家庭環境は，高層マンションの5階にあり，降園後も屋外で遊ぶことが少なく，室内でテレビ視聴をしたり，室内でのおもちゃ遊びが多いようである。そのうえ，ひとり遊びが多く，遊び相手は母親がほとんどである。他の幼児のように，公園や広場で泥まみれになって遊ぶという経験が少ないようである。就園まで，一人で外にでることがほとんどなく，従って，すり傷ひとつしたことがない状態であった。

K児以外の母親の中にも，「フィンガー・ペイント」や「泥んこ遊び」には，必ずしも，賛意を示さない母親があるということが分かった。そこで，6月の「園だより」に，大妻女子大学教授医学博士，平井信義先生の「不潔のすすめ」という一文を掲載した。小児科医であり，心理学者である，その道の大家の子育てを紹介し，幼児をどのように遊ばせるかの理解をはかるようにした。

「不潔にこだわらずに遊べる子にしよう」

平井信義氏（大妻女子大学・児童学科教授）

最も子どもらしい「よい子」は、手足や衣類の汚れにこだわらずに、遊びに熱中できる子どもです。とくに幼児期から小学校低学年の子どもに、その点を強調したいのです。もしこの年齢で汚れにこだわって遊びに熱中できない子どもがいれば、思春期以後になって不潔恐怖症になったり、登校拒否になる危険性があります。衣類を汚さないので、お母さんにとっては手数のかからない「よい子」に見えますが、遊びに熱中できない哀れな子どもといってよいでしょう。そのような子どもは、子どもらしい子どもが近づきますと、「さわらないでよ、ママが怒るから」といって友達と遊ぶことを拒否します。そうなれば友達作りの大切な能力が育ちません。友達が少ないし、同類の哀れな子どもとばかり遊んでいて、いきいきとしていません。そして、思春期には孤独になってしまい、友達と話すことによって解決することのできる悩みをかかえこんで、神経症や心身症に陥っています。それらを予防する意味で私は十年前から、「不潔のすすめ」を提唱しています。

(2) 父母の反応

「子育て情報」は，機会あるごとに，不定期的に園だよりに掲載するので，隣近所での子育ての話題提起としてほしいということも，つけ加えていた。そのため若干は，母親達の関心と興味を誘ったようであった。園側は，あくまでも，子育ての資料の提供ということであるから，1学期の個別懇談会で意見がでることを期待していた。しかし，残念ながら，明確な反応としてはあまりでなかった。

ただこの試みが幼児の遊びに関し，子育てのための概念くだきのようなものにはなったと思われる。本園が実施している体育的な遊び（特に2学期の秋季運動会）での「はだし・はだか」に対する父母の理解はある程度深まってきたようである。

(3) 「子育て情報」をどのように受けとめさせるか

近年園行事や参観日などで，母親が幼稚園に出かける機会は，従来より相当に多くなってきた。特に最近は，私立幼稚園でもPTA活動が盛んになり，園外保育や遠足などへの協力体制や，夏休みのお泊り保育などには，積極的に協力的な参加が多くなってきた。保育参観日や，運動会，遊戯会などには，両親揃って幼稚園にでかける親も多くなった。

30数名の幼児を通して，知り合った親達が，どのような心構えで幼稚園に出かけるかということは，極めて重要なことである。そこで7月の個別懇談の案内に「園をおしゃべりの場に」というコラム的なものを掲載した。

子育て情報

園をおしゃべりの場に

豊かなコミュニケーションによって、人びとの「くらしの知恵」は伝えられます。と言えばスマートに聞こえますが、平たく言えば「おしゃべりの場」が大切だということです。

幼稚園が、保護者同志あるいは保育者と保護者のおしゃべりの場として十分に機能しているかどうか、振り返っていただきたいのです。おしゃべりは「子育て」の知恵をふくめた、人びとのくらしの文化の伝達と吸収の最高の機能のはずです。

今、さかんに言われている「新井戸端会議」の発想なども、このような考え方から出ていると思います。

園庭の一隅で、保育室の隅っこで、何の気がねもなくおしゃべりがなされているでしょうか。何か問題があったらすぐに子育ての課題となって、自由に話し合え、おしゃべりができる雰囲気の幼稚園にしたいと思います。

(4) 母親達と園や親同士との交流がどのように変容したか

母親の間に，次のような人間関係の変容がみられるようになった。

① 気の合った者同士が，おしゃべりをする場を作ろうとする傾向がみられるようになってきた。

② 自分の子どものことについて，よいこと，とくによくないことについても，遠慮なく話し合えるような人間関係の輪が広がりかけてきた。

③ 子育てに関する情報に関して，興味や関心をもつようになってきた。NHK学校放送番組の「お母さんの勉強室」などを視聴しようとする意欲がみかけられるようになり，中予私立幼稚園PTA会での無着成恭先生の講演にも，多数の参加者を見ることができた。

④ 地域社会，近隣社会における母親同士の心の絆のようなものは，子育て情報の交換によらなければならないことの大切さが理解されるようになった。

⑤ 他人の子どもをわが子のようにほめたり，叱ったりすることのできる親が，少しずつではあるが，みかけられるようになった。

(5) 「お母さんはいつも問いつめ～」

「子育て情報No.4」「お母さんはいつも問いつめ～」は，冬休みの直前に園だよりの余白を利用して提供した内容である。

年末年始は，一家の主婦にとっては，1年中でいちばん忙しい時期である。特に，職業をもった母親は，忙しさのあまり，わが子への関わり方に適切さを欠く場合が多いことが予想されるために，次のような「子育て情報No.4」を掲載した。

子育て情報

お母さんのせっかち

「あのね、おかあさん！」「あのね、どうしようか！」「やっぱりやめとこ」・・・・とモジモジしながら話しかけてくることがあるでしょう。そんなとき「なによ、はやく言いなさい。おかあさんいそがしいんだから」と、ついつい言ってしまいそうなときがあるでしょう。

お母さんに突き放すように言われたら、その子のことばはあとが続きません。子供がモジモジしながら話しかけてくるときは、とっておきのお話をしたいときがあります。母親の心ないことばで話の腰を折らないで、「なあに、○○ちゃん」と子供の心を全面的に受け入れることが大切です。

子供の眼を見ながら、ゆっくりしたテンポで話すことばをとがめたり、せかしたりしないで聞いてやりましょう。

子育てに　せっかちはタブー

(6) 子育て情報№4に関しての母親からの反応

① N子の母親からのたより

私は上の子どもは小学校の2年生にもなり，N子は年長児になったのを機会に，現在のパートタイマーによるお勤めをするようになりました。N子が幼稚園から帰った時，私が留守をしていることが，最初の間は，とても可愛そうでなりませんでした。しかし，それも時の経過とともに，慣れっこになり，今では，簡単なお手伝いのようなものをN子やN子の姉に要求するようになってしまいました。今日の園だよりを読んで，慣れということの恐ろしさにびっくり致しました。

今，お勤めをしていなかった頃と，最近の私の母親としての子どもたちへの関わり方は，園だよりを地でいくように変ってしまっています。11月頃から，日が早く暮れるため，家庭での仕事の能率を上げようとして，子ども達への心の通う関わり方を欠いていたと反省しています。これからは，子どもの言うことを背中で聞いたりせず，夕食後などは，ゆっくりと子どもの話を聞いてやりたいと思います。続くかどうか分かりませんが……。

② S夫の母親からのたより

農家である私の家は，農閑期で比較的暇なのに，秋や冬の農繁期のくせがでて，子どもの言うことを，つい，うわの空で聞いているということに気がつきました。今は，炊事も，掃除も，機械や電気の力で楽になっているのに，何となく忙しいという気持になって，子どもと向かい合っての話し合いがなくなっているということに気がつきました。

S夫も年長になって，少しは，理屈を言うようになりました。また，言い訳もじょうずになりました。理屈に負けても，言い訳にだまされても，S夫の言うことを真剣に聞いてやりたいと思います。

(7) 今後の園だより「子育て情報」計画

① 「本当のよい子とは」

見かけの「よい子」を本当の「よい子」にすることを考えましょう。子どもの自立心を抑えるようなことは，しないようにします。管理主義的なしつけをやめることが大切です。そのためには，できるだけ子どもの言い分を聞いてやります。叱ることより，ほめることの効用を考えてください。もし本当の「よい子」でないようだったら，その委縮した子どもを伸び伸びとした子どもに育ててください。

グズはダメと叱ったりしないで，「お母さんが，見ていてあげるから，時計の長い針が8のところへいくまでに頑張ってみようね」と，子どものやる気（意欲）を起こさせるような関わり方をしてみましょう。

② 「あいさつは，母親が発信源」

この頃は，朝起きても「おはようございます」のあいさつができない子どもが多くなりました。幼稚園でもあいさつのできない子どもを見かけます。子どもにあいさつをさせるには，朝，子どもよりも早く起きた母親が，「おはよう」と呼びかけてください。毎日毎日，母親や父親が，あいさつの発信源となってやれば，何時かは，子どもの方から「おはようございます」「おやすみなさい」のあいさつができるようになります。

自然に，子どもの方からあいさつをするようになるまで，叱ったり，強要したりしないことが大切です。

あいさつは，自然発生的なものなのです。

③ 「こんな言葉づかいはやめて」

「また，お皿わって，お母さんの言う通りせんからよ。あんたに，たのんで損しちゃった，お母さん」

小さい子どもがほんとうに自分からやる気でお手伝いをしていて，つい間違ったあやまちを，母親の感情丸だしで叱ったりしたのでは，子どもは物事をする意欲（やる気）をなくしてしまいます。お皿をわった失敗を責める前に，「けがしなかった？」「お皿がわれたことより○○ちゃんの，お手伝いがお母さんはうれしいのよ」と言ってやれば，その子どもは，やる気（意欲）のあるすばらしい子どもになるでしょう。

私たちは，ついつい子どものやる気をなくすような，不用意な言葉がけをしているのではないでしょうか。

カッとなったとき，大きく深呼吸をして，子どもにものを言っては!!

④ 「よい子がふえた」

何でも親の言うとおり素直に従う子どもは，ともすると親の理想の「よい子」と考えられます。反抗的な子どもと正反対で，口ごたえひとつすることもなく，親のつくってくれる友達と遊び，指示通りに片付けをし，言うとおりに勉強するような一見「よい子」が増えてきているようです。

ところが，心理学の専門の先生方の目からみると，一番気になる性格だそうです。子どもというのは，本来，おとなからみるとルーズだし，だらしがないし，言うことを聞かない存在なのです。

小さなおとなのような，きちんとしすぎて，聞き訳のよすぎる子どもには，どこか，心配なところが隠されている場合があるそうです。

⑤ 「かぜひきも，また成長の一過程」

一人っ子，少子家族の世の中になってきました。子どもを大事，大事にするあまり，毎日

を健康づくり，病気の予防のためにだけに費やしてしまうのは，どんなものでしょうか。

健康のために，害になりそうなこと，危険が伴いそうなことは全部避け，一切しないといった人生は，味気ないものになってしまいます。

子育てについてもそうです。子育てから冒険を取り除いたら，子どもたちは，どうなるでしょうか。子どもは，何時か身を守るすべを身につけることができなくなってしまいます。幼いうちに，いろいろなかぜにかかって，免疫ができるから大きくなると，かぜをひく回数が少なくなるそうです。だから，子どもにとって，かぜをひくことは，成長のための一段階です。かぜをひいたとき，病気の子どもを看護する中から，親子のコミニュケーションが作られる場合もあります。

健康はよいもので，病気は悪といった肩ひじ張った考え方をしないで，子どもにとっても，親にとっても，まず，のびやかで，生きがいのある生活を第一と考えつつ子育てをしていきたいものです。

⑥「児童非行の芽を促進させる不健全性要因に関する学際的研究」

児童の非行の芽が知らぬ間に伸びていって，取り返しがつかないことになった家庭の要因を調べたところ，次のようなことが分かったそうです。もちろん皆さんのご家庭では，このようなことがあてはまる家庭はないでしょうね。

次のような結果がでています。

- 子どもが悪いことをしたとき，静かに言って聞かせないで，大声でどなる。
- 幼児期から両親が，緊張とイライラに満たされている。
- 親が，育児や，しつけに自信が持てなくて，育児不安にさらされている。
- 両親が，この子は生まなければよかったと思うことがある。(特に母親)
- 母親が，子育てや育児について悩み，離婚を考えたことがある。
- 幼児期に，隣近所の幼児たちと，友達づき合いをしなかった。

以上のようなケースの場合，非行少年がでていることが研究されました。

⑦「体を動かす」

幼児は，本来，体を動かして遊ぶことを好みます。ところが最近は，テレビをはじめ，家の中で遊ぶおもちゃが多くなりました。寒いことも加わって，家の中で，ゴロゴロしがちです。外気や自然にふれて，体を動かしての充実感や，楽しさを味わうような関わり方を工夫してください。幼稚園から帰ったら，あまり寒くなければ，屋外で遊ばせ，買い物の時など，いろいろ話し合いながら連れて行くことは，よいことだと思います。

テレビに釘付けさせないためにも，屋外で，自然にふれる機会を，じょうずに作ってやってください。

5. 研究の結論と今後の課題

(1) 子育て情報を，園だよりと兼ねて流すことにより，子育ての経験の浅い父母達には，子育ての問題点がどこにあり，その解決はどのようにしなければならないかということを，学習することができるようになったという反省を聞くことができた。

(2) 核家族化傾向にある最近の家庭事情のもとでは，年老いた両親から，子育ての知恵を身につけることは，容易ではない。子育てに不安を感じている若い父母達にとっては，少しは価値ある情報であったと思われる。特に，ミニ情報であったことが，気軽に読んだり，考えたりすることが容易であったという評価を受けることができた。

(3) 学期に１回程度は，子育てミニ情報の課題をテーマに,「子育て学級PTAセミナー」などを実施し，子育てに関する知識や技術を身につける学習活動が望ましいと思った。なお，それぞれの家庭における子育ての課題をすい上げて，その解決をはかればよいかという工夫も必要ではなかろうか。

(4) PTA活動が，とかく，園行事中心の活動になりがちであるという反省にたって，具体的な子育てをどのようにすればよいかということと，取り組んだ学習活動を除々に取り入れていかなければならない。園内に「子育て投書箱」を設置し，PTA会員（PもTも）がそれぞれ課題を持ち寄り，できれば，年度当初に課題を集計し，できるだけ系統だった子育て課題解決学習を計画すれば効率的であると思われる。

(5) 子育てミニ情報に対する父母の具体的で，生きた課題解決の手法を，一人の知恵とせず，各学級毎に，グループで話し合うことは子育ての知恵を，みんなのものとすることである。これは極めて重要なことである。幼稚園側としては，子育ての内容的なものだけでなく，学習活動の方法的なものにも，対応していくという心構えが大切である。

(6) 幼稚園における家庭と園との連携は，学習内容だけにとどまらず，学習方法的なことについてもそれぞれ個性の異なる幼児達のために，一人ひとりにどう密着させていくかが大切である。

本園で，このような課題に取り組んだことにより，父母たちが，幼稚園を巻きこんでの課題発見，課題解決，解決の一般化と拡大発展させることができたと総括している。